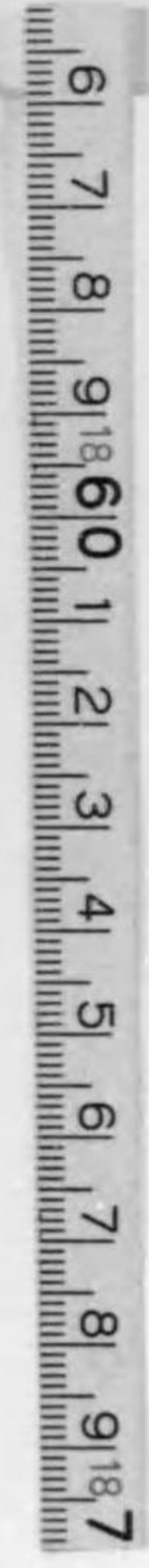


425
108



始



工藝美術聚英第二編目錄及分類表

工藝美術聚英刊行會發行

二十二	國寶	菊	繪	手	足利時代	熟	田	宮	藏
二十三	同	同	同	同	同	同	同	同	上
二十四	同	木	造	舞	足利時代	同	同	同	上
二十五	同	蓬	萊	蒔	同	同	同	同	上
二十六	同	同	同	同	同	同	同	同	上
二十七	國寶	兵	庫	鎖	鎌倉時代	同	同	同	上
二十八	同	同	同	同	同	同	同	同	上
二十九	同	銀	裝	毛	藤原時代	同	同	同	上
三十	同	蘆	鷺	文	同	同	同	同	上
三十一	同	亞	刺	比	唐時代	同	同	同	上
三十二	同	御	挽	人	德川初期	同	同	同	上
三十三	同	車	挽	人	德川初期	同	同	同	上
三十四	國寶	金	銅	華	鎌倉時代	同	同	同	上
三十五	同	木	造	彩	桃山時代	同	同	同	上
三十六	同	木	造	彩	同	同	同	同	上
三十七	同	金	銅	冠	上古時代	同	同	同	上
三十八	同	黑	漆	前	兄利時代	同	同	同	上
三十九	同	牡	丹	文	鎌倉時代	同	同	同	上
四十	同	同	同	同	同	同	同	同	上
四十一	同	同	同	同	同	同	同	同	上
四十二	同	同	同	同	同	同	同	同	上
四十三	國寶	同	同	同	同	同	同	同	上
四十四	同	同	同	同	同	同	同	同	上

四十五	鐵	籠	同	同	桃山時代	木	派	願	寺	藏
四十六	唐	花	文	金	南北朝時代	大	德	順	寺	藏
四十七	鶴	丸	文	穀	同	同	同	同	同	上
四十八	支	那	古	代	宋末元初時代	京	都	帝	國	大
四十九	磁	州	窯	耳	宋時代	所	管	陶	磁	器
五十	籬	菊	蒔	繪	德川初期	高	戒	光	明	寺
五十一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
五十二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
五十三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
五十四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
五十五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
五十六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
五十七	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
五十八	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
五十九	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
六十	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
六十一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
六十二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
六十三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
六十四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
六十五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上
六十六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上

二百八	國寶	兵庫	太刀	熱田宮藏
二十九	國寶	銀裝毛拔形太刀	微古	社藏
三十四	國寶	金銅冠殘款金銅忍冬文香葉	兵主神	社藏
三十七	國寶	金銅冠殘款金銅忍冬文香葉	微古	社藏
五十四	國寶	釘隱引	醍野中	寺藏
六十一	國寶	青銅博山爐	朝鮮總督府博物館藏	
六十二	國寶	盤龍四神鏡	同	
六十三	國寶	純金耳飾三	同	
六十四	國寶	金相附勾玉	同	
六十五	國寶	青銅裝太刀	同	
七十一	國寶	五獅子如意	同	
七十二	國寶	同	同	
七十八	國寶	同	同	
七十九	國寶	同	同	
八十	國寶	同	同	
八十二	國寶	同	同	
八十三	國寶	同	同	
八十七	國寶	同	同	
九十八	國寶	同	同	
九十九	國寶	同	同	
一百一	國寶	同	同	
一百二	國寶	同	同	
一百三	國寶	同	同	

四百	國寶	花喰	多度神社藏
四百一	國寶	草花	同
四百二	國寶	草花	同
四百三	國寶	草花	同
四百四	國寶	草花	同
四百五	國寶	草花	同
四百六	國寶	草花	同
四百七	國寶	草花	同
四百八	國寶	草花	同
四百九	國寶	草花	同
五百	國寶	草花	同
五百一	國寶	草花	同
五百二	國寶	草花	同
五百三	國寶	草花	同
五百四	國寶	草花	同
五百五	國寶	草花	同
五百六	國寶	草花	同
五百七	國寶	草花	同
五百八	國寶	草花	同
五百九	國寶	草花	同
六百	國寶	草花	同
六百一	國寶	草花	同
六百二	國寶	草花	同
六百三	國寶	草花	同
六百四	國寶	草花	同
六百五	國寶	草花	同
六百六	國寶	草花	同
六百七	國寶	草花	同
六百八	國寶	草花	同
六百九	國寶	草花	同
七百	國寶	草花	同
七百一	國寶	草花	同
七百二	國寶	草花	同
七百三	國寶	草花	同
七百四	國寶	草花	同
七百五	國寶	草花	同
七百六	國寶	草花	同
七百七	國寶	草花	同
七百八	國寶	草花	同
七百九	國寶	草花	同
八百	國寶	草花	同
八百一	國寶	草花	同
八百二	國寶	草花	同
八百三	國寶	草花	同
八百四	國寶	草花	同
八百五	國寶	草花	同
八百六	國寶	草花	同
八百七	國寶	草花	同
八百八	國寶	草花	同
八百九	國寶	草花	同
九百	國寶	草花	同
九百一	國寶	草花	同
九百二	國寶	草花	同
九百三	國寶	草花	同
九百四	國寶	草花	同
九百五	國寶	草花	同
九百六	國寶	草花	同
九百七	國寶	草花	同
九百八	國寶	草花	同
九百九	國寶	草花	同
一千	國寶	草花	同

彫工

一	木彫彩色天蓋	教王護國寺藏
二	木彫彩色獅子	同
三	木彫彩色華鬘	同
四	木彫彩色華鬘	同
五	木彫彩色華鬘	同
六	木彫彩色華鬘	同
七	木彫彩色華鬘	同
八	木彫彩色華鬘	同
九	木彫彩色華鬘	同
十	木彫彩色華鬘	同
十一	木彫彩色華鬘	同
十二	木彫彩色華鬘	同
十三	木彫彩色華鬘	同
十四	木彫彩色華鬘	同
十五	木彫彩色華鬘	同
十六	木彫彩色華鬘	同
十七	木彫彩色華鬘	同
十八	木彫彩色華鬘	同
十九	木彫彩色華鬘	同
二十	木彫彩色華鬘	同
二十一	木彫彩色華鬘	同
二十二	木彫彩色華鬘	同
二十三	木彫彩色華鬘	同
二十四	木彫彩色華鬘	同
二十五	木彫彩色華鬘	同
二十六	木彫彩色華鬘	同
二十七	木彫彩色華鬘	同
二十八	木彫彩色華鬘	同
二十九	木彫彩色華鬘	同
三十	木彫彩色華鬘	同
三十一	木彫彩色華鬘	同
三十二	木彫彩色華鬘	同
三十三	木彫彩色華鬘	同
三十四	木彫彩色華鬘	同
三十五	木彫彩色華鬘	同
三十六	木彫彩色華鬘	同
三十七	木彫彩色華鬘	同
三十八	木彫彩色華鬘	同
三十九	木彫彩色華鬘	同
四十	木彫彩色華鬘	同
四十一	木彫彩色華鬘	同
四十二	木彫彩色華鬘	同
四十三	木彫彩色華鬘	同
四十四	木彫彩色華鬘	同
四十五	木彫彩色華鬘	同
四十六	木彫彩色華鬘	同
四十七	木彫彩色華鬘	同
四十八	木彫彩色華鬘	同
四十九	木彫彩色華鬘	同
五十	木彫彩色華鬘	同

窯工

七十三	國寶	仲津媛皇后御木像	藥師寺藏
七十四	國寶	同	同
八十一	國寶	黑柿蘇枋金銀山水繪寫	正倉院御藏
八十五	國寶	木造樂用瓶子	東福寺藏
八十六	國寶	胡德樂用瓶子	同
九十一	國寶	木造蛙股	醍醐寺藏
八	國寶	陶製小皿	石川縣商品陳列所藏
十七	國寶	陶製平鉢	廣瀨治兵衛氏藏
三十一	國寶	亞刺比亞式唐草陶皿	京都帝國大學文學部藏
三十二	國寶	御庭燒	所屬者皆陶磁器試驗所藏
四十八	國寶	支那古代筋彫土型	京都帝國大學文學部藏
四十九	國寶	磁州窯耳付花瓶	所屬者皆陶磁器試驗所藏
五十三	國寶	淡陶綠釉香爐	堂本印象氏藏
五十六	國寶	綠釉四天王瓶	朝鮮總督府博物館藏
六十七	國寶	青磁象嵌雲鶴文壺	同
六十八	國寶	黑釉草葉文瓶	同
六十九	國寶	白磁刻文水注	同
七十	國寶	唐華文花瓶	同
七十二	國寶	明器騎馬俑	堂本印象氏藏
七十三	國寶	陶製蠻人燭臺	長野草風氏藏
七十五	國寶	宋三彩陶枕	橋本關雪氏藏
七十六	國寶	宋赤繪三彩小鉢	守屋孝藏氏藏
六	國寶	摺笥地無小袖裂地	京都美術工藝學校藏
十八	國寶	錦	聖護院藏

染織

七十一	國寶	肩	浦神
七十二	國寶	同	同
七十三	國寶	同	同
七十四	國寶	同	同
七十五	國寶	同	同
七十六	國寶	同	同
七十七	國寶	同	同
七十八	國寶	同	同
七十九	國寶	同	同
八十	國寶	同	同
八十一	國寶	同	同
八十二	國寶	同	同
八十三	國寶	同	同
八十四	國寶	同	同
八十五	國寶	同	同
八十六	國寶	同	同
八十七	國寶	同	同
八十八	國寶	同	同
八十九	國寶	同	同
九十	國寶	同	同
九十一	國寶	同	同
九十二	國寶	同	同
九十三	國寶	同	同
九十四	國寶	同	同
九十五	國寶	同	同
九十六	國寶	同	同
九十七	國寶	同	同
九十八	國寶	同	同
九十九	國寶	同	同
一百	國寶	同	同
一百一	國寶	同	同
一百二	國寶	同	同
一百三	國寶	同	同
一百四	國寶	同	同
一百五	國寶	同	同
一百六	國寶	同	同
一百七	國寶	同	同
一百八	國寶	同	同
一百九	國寶	同	同
二百	國寶	同	同

其他

四十一	國寶	唐花文金紗	大德寺藏
四十二	國寶	同	同
四十三	國寶	同	同
四十四	國寶	同	同
四十五	國寶	同	同
四十六	國寶	同	同
四十七	國寶	同	同
四十八	國寶	同	同
四十九	國寶	同	同
五十	國寶	同	同
五十一	國寶	同	同
五十二	國寶	同	同
五十三	國寶	同	同
五十四	國寶	同	同
五十五	國寶	同	同
五十六	國寶	同	同
五十七	國寶	同	同
五十八	國寶	同	同
五十九	國寶	同	同
六十	國寶	同	同
六十一	國寶	同	同
六十二	國寶	同	同
六十三	國寶	同	同
六十四	國寶	同	同
六十五	國寶	同	同
六十六	國寶	同	同
六十七	國寶	同	同
六十八	國寶	同	同
六十九	國寶	同	同
七十	國寶	同	同
七十一	國寶	同	同
七十二	國寶	同	同
七十三	國寶	同	同
七十四	國寶	同	同
七十五	國寶	同	同
七十六	國寶	同	同
七十七	國寶	同	同
七十八	國寶	同	同
七十九	國寶	同	同
八十	國寶	同	同
八十一	國寶	同	同
八十二	國寶	同	同
八十三	國寶	同	同
八十四	國寶	同	同
八十五	國寶	同	同
八十六	國寶	同	同
八十七	國寶	同	同
八十八	國寶	同	同
八十九	國寶	同	同
九十	國寶	同	同
九十一	國寶	同	同
九十二	國寶	同	同
九十三	國寶	同	同
九十四	國寶	同	同
九十五	國寶	同	同
九十六	國寶	同	同
九十七	國寶	同	同
九十八	國寶	同	同
九十九	國寶	同	同
一百	國寶	同	同

大正十四年五月

編輯者 京都市四條大橋東詰川端北 工藝美術聚英刊行會

印刷者兼 京都市四條大橋東詰川端北 山本湖舟

發行所 京都市四條大橋東詰川端北 山本湖舟寫真工藝部

電中三一〇番
振替口座六五七四番

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

賜台覽

賜天覽

下
凡



蘇
州
府
印



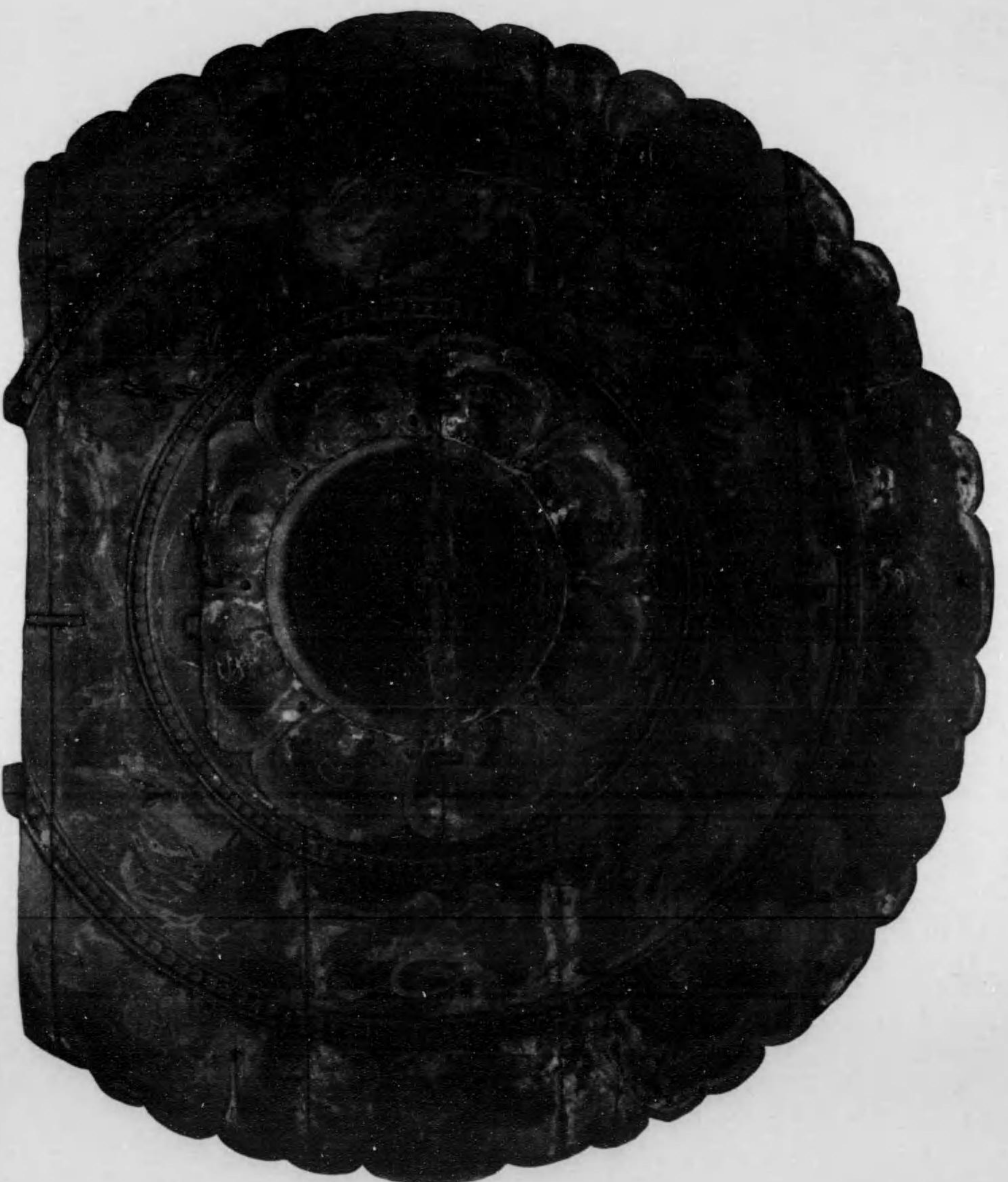
國寶 木彫彩色天色蓋
 第 一 冊
 平安朝 藤原朝
 敬 平 王 安 護 國 時 代 寺 藏

本圖は教王護國寺即永壽寺製作と傳ふる木彫彩色の天色蓋なり、圖の中央なる蓮座は、螺鈿彫上げて縁脊を飾り、蓮實を抜き其外に蓋を彫出して彩色を以て畫刺りたり、其周圍なる間、散蓮の彫りに充分の内を寫せ、一々螺鈿の彩色華文あり、其外部には二子所立邊即ち六彩形の蓮珠文を刻して蓋背を押したる二つの圓が、其間の平面には朱地に天人の飛雲を機彩色に見たり、更に其外部には螺鈿を彫りて之にも螺鈿の華文あり、それには所々に螺鈿を打て羅網を吊りし物ならむ、この天人像は最も雄勁なる線を以て描かれ彼の日野法華寺本堂古壁に存する天人の像は又異なる趣致をなす精緻の圓なり、又彩色の莊麗は尚殘存せる色彩に依りて考察し得べく、曾良阿闍心寺金堂の本尊蓮華の彩色に見る如く、螺鈿に顔面を承ねれば彼の彫削風格ありて正しく平安朝の作品たるを察し得べし。

直径四尺寸八五分。

工部省藏書部藏書第二一〇一號

1



第二回 彫木 影彩 安代 天蓋
平 王 教 府 郡 京

第一圖の部分を表はしたるものなり。

第一回第二回第三回第四回

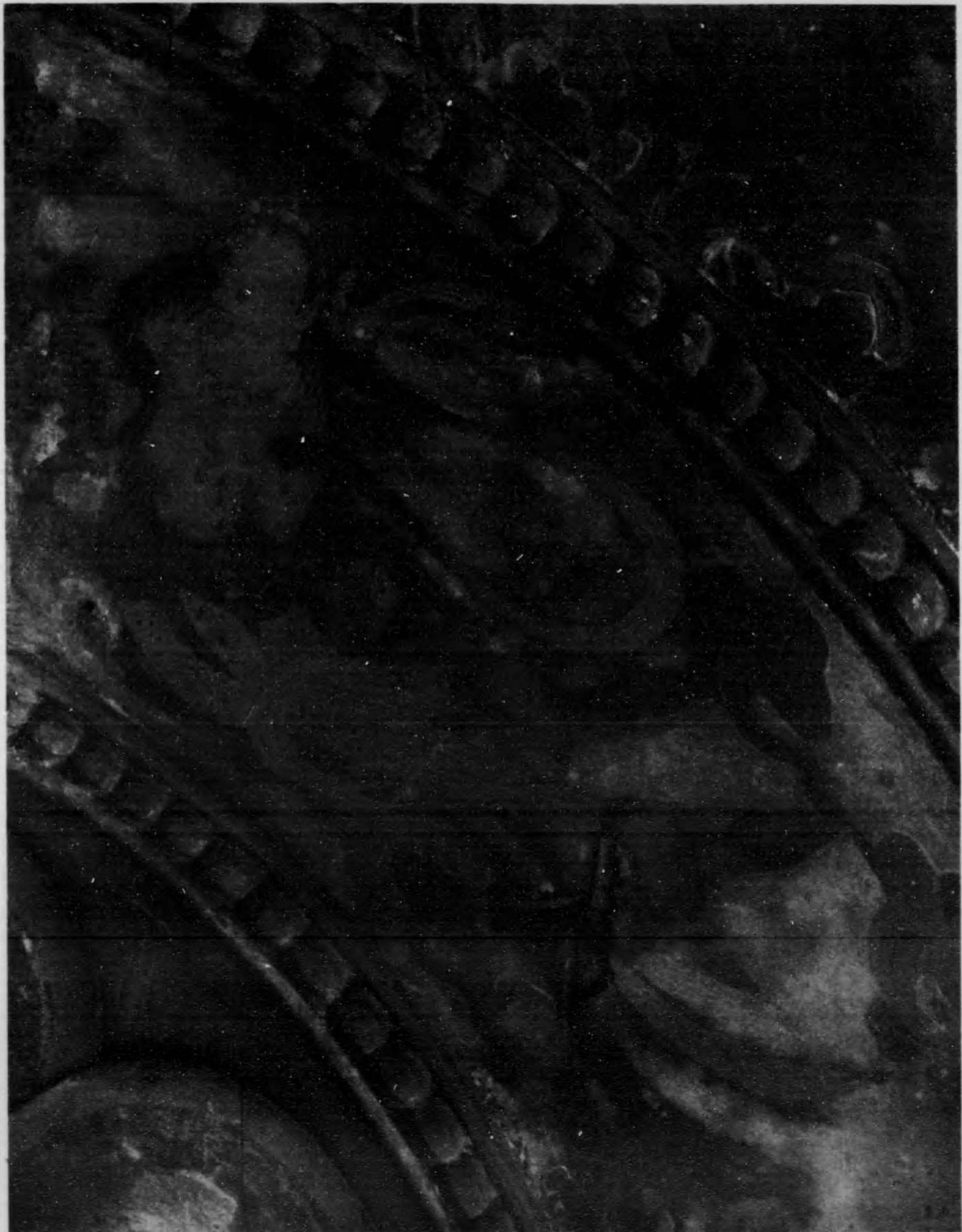


圖 三 第 三 號
 實 物 牡 丹 文 螺 鈿 鞍
 鑲 川 石 白 山 比 呼 介 倉 時 社 代
 藏 社 神 呼 比 山 白 鑲 川 石

此に於て牡丹文螺鈿の鞍は加賀白山神社蔵の同形鞍にして、近世始めて世に現はれたるもの、本圖樂器編九七十九回所載の螺鈿鞍と共に未だ今世に知らざる物なり。全體漆地に海漆、手形少くして他の同類のもの同く圓形鞍なるは、以て當時武人の常用せしものなるを疑ふ。惜むらく其傳を失し只口碑、林六郎助、宗權の二氏の神社の奉獻せしと傳ふるも斷定を得ず。本品は文様殆ど剝離なく完好に傳へられしを喜ぶるに於て、只出陣だしく其鞍の如きも殆どを遺損して、原形存せざるは殊に惜むべし。

鑲川石白山比呼介倉時社代藏

本圖は前鞍を示したものであり。
 前鞍長九寸一分、後鞍長九寸八分
 前鞍と後鞍の間隔徑上部二尺二分
 兩脚徑にて六寸六分、後鞍脚端の間隔 尺三分
 前鞍圓一尺八分、原本幅三寸六分五厘

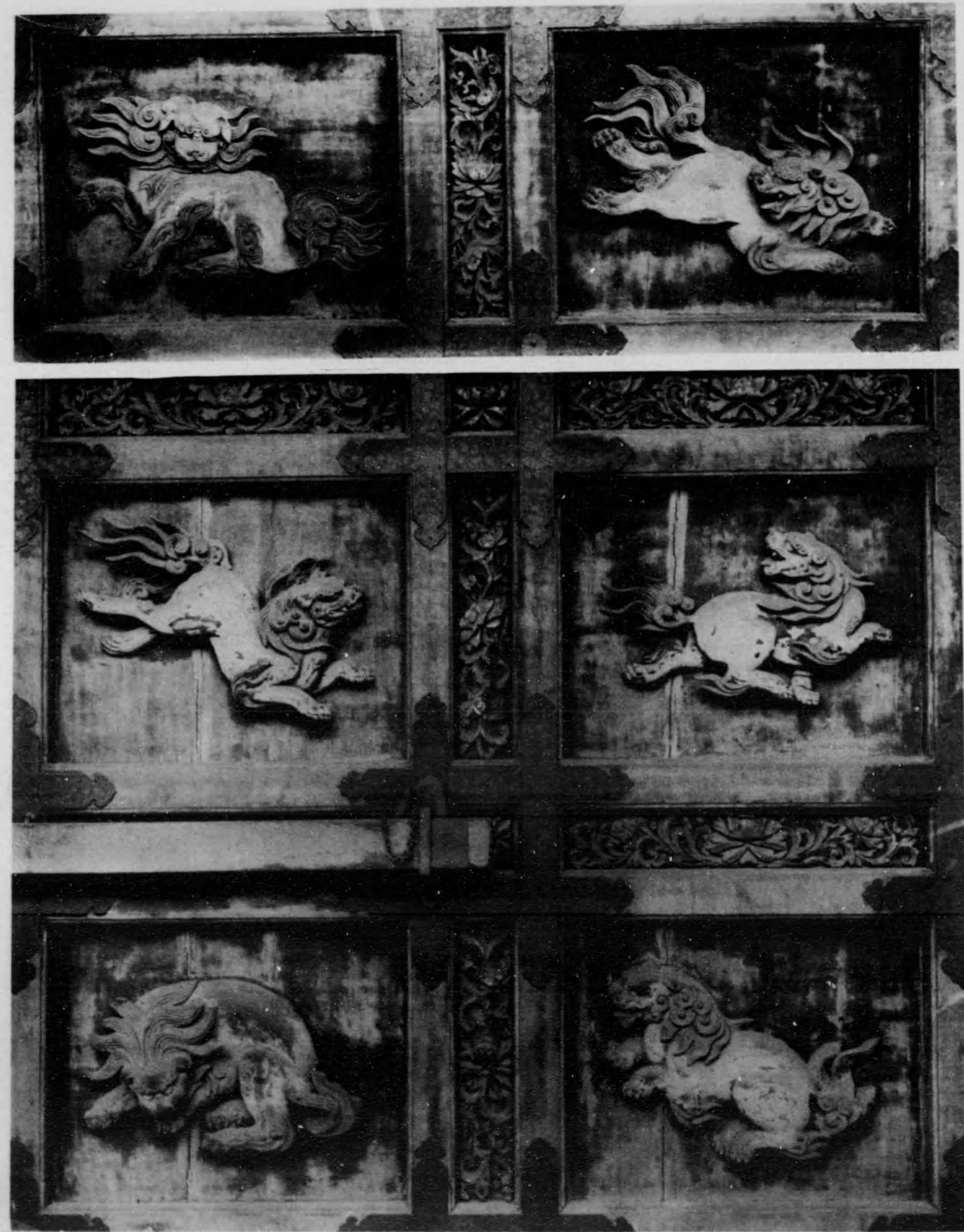




第 四 四
蓬 萊 飛 鶴 鏡
鎌 倉 時 代
京 都 杉 浦 丘 園 氏 藏

本品は青銅佛世鏡にして、世間多く存する蓬萊鏡と異り、園の如く宮殿を配し松喰鶴を
あしらいたるは珍すべく、全體圓様温雅にして作風又鎌倉時代鏡中の逸品なり。又
撮みに艶あるも面白く大形なるに共に珍重すべきものなり。本園は等寸に現はしたる
ものなり。

工 藝 院 展 覽 會 二 期 第 一 冊



第五
木彫獅子

京都府 本派本願寺藏

本圖は本派本願寺なる唐門左右の扉に存する木彫の一部を撮影したるものにして、棧間に各々異なる獅子の姿態を刻したるが、何れも構想縦横にして刀法雄渾實に見事なるものなり。

この唐門は桃山の遺構を移したるものにして、大徳寺の唐門及第一編三五圖に掲げたる豊國神社の四脚門と共に三唐門の稱あるものなり。

惟ふに當時は各部共黒漆地に五彩を施して海に華麗を極めしものならん、現今は剝落して跡を止めず、雖其蒼然たる古色却つて異彩を放つものなり。

工藝美術史 第二卷 第一編

第六卷
浮世人物
中元村實藏
時代古氏藏

浮世人形とは、其の頭巾や髪を木彫彩色なし、之に
 繒繻等の織物を以て表装を作者用せしめたるものにして
 て、この種作品には時代表装を知るべき資料多く存す、
 本圖に掲ぐる所當時の武家室の姿を寫せるものにして
 其の身形の頭細き目小き口唇等は當時の好相を
 現はせるものと云ふべく、其の作風同時代に流行せし法
 郎左衛門權の形式に似たるが、彼の作品の多く權人形な
 るに比しこれは亦流暢なる装束の立派なるを誇り、
 し、蓋し其の装束に用ひし金襴の古風なるに似ず袖形の
 角にして長き袖口大なる、ふきの太く出でたる等、
 當時の風俗にはあらず後代の變遷によるものと思はる
 右圖は同時代の下れるものと云ふべきも、體頗る圓滑の姿
 態は後世流行せし御所人形即ち伊豆人形の源流をなす
 もと云ふべし、本圖は何れも實大なり。

工師實藏村元古氏藏一第



第七 第
 文鶴立銅螺繪蒔
 明 初 川 德
 鐵匠學藝工術院京市都京 府 都 京

鏡の文様なるものは所傳至つて少なく、本出は其未作
 に屬し、明治府粗なりと雖も丹中、中、遠、近なる關係を配したる
 は、たゞく管工成る時代に於て好事家の爲に其故を誦
 らね、複製として用ひられしものなり。
 直径八寸三分、高さ一寸五分、栗茶地、雲母子にて所々に
 青貝を嵌入したり。
 左の小圖は裏面を表したるものにして、同じ文様の圖を
 本手に描きたるは表の圖に對しよ、調和を得たりと云ふ
 べし。

鐵匠學藝工術院京市都京 府 都 京



第八 附 山 乾 陶 製 繪 變 向 付

石川縣立品陳列所

京都江戶時代の初期に、仁清出て進藤彌重父子が
 此の如き陶器を作り、中華には尙出現はれて無縁故
 關五郎の委を購むるに似たる器物を出して日本産の
 陶器を成したるものなるが、

乾山製用いたる手法は

一 素地土の粒子粗く糊灰を帯びたる事

二 素地土の間に白色粘土の不透明なる目掛又は紐

三 呼ば薄層を施したる事

四 器體の角彩を多く用ひし事

五 乾山 裝束、深茶室の筆致を入れたる事

六 器體の手法を應用して和風の陶器を作りし事

を指するを、茲に掲げたるは重ね色紙形の間にし、

茶色の地に白の化粧を施し其上に鐵粉の樹葉なる繪具

以て草花山水等描き一年に數を入れたるが、この筆致難

妙腕を乾山の面目を奪得したるものにして、製造一

り五斗の程度を以て、遠く其形狀の細く繪變りの

變化自調和候て、京都の基準を表はしたるもの云

ふべし。

横寸五斗、左右三寸七分、最下圖は側面を示す。

第五卷 第二章 第三節 乾山陶器



第九卷 第四十圖 月ヶ香 香 箱

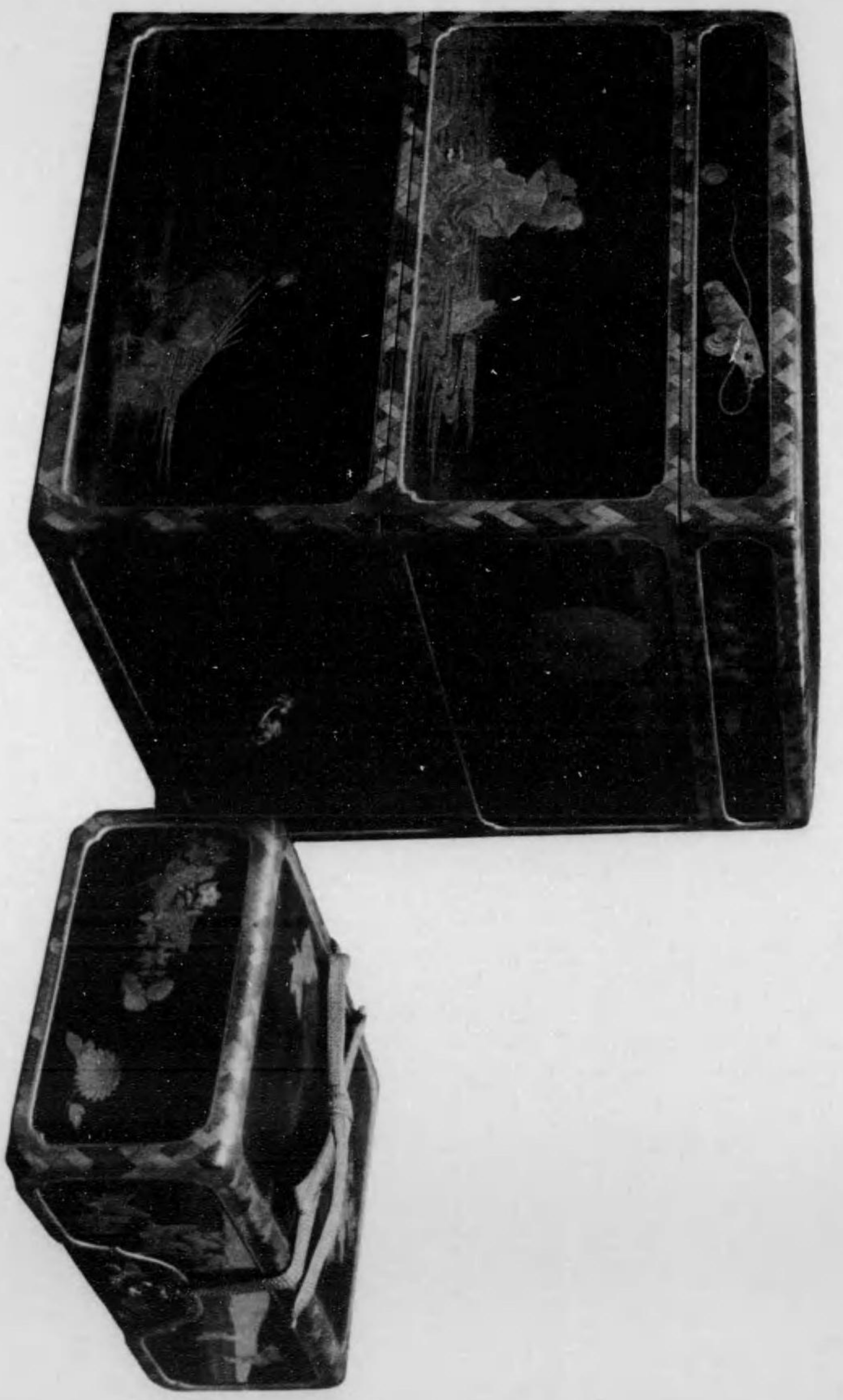
京都府 徳川門中 崇徳

本品は深澤庵に金銀、金銅を以て、破れ損壞品等各面には十二月の景物を彫繪し、或はアクリ、或は岩に雲雀鳩、吹雪、落葉、滿月、梅の枝等を精密に描たり。小箱も大同じ深澤庵地に四季草花を彫繪り金物は銀金具にして、桂枝の平打を用ひ所謂徳川中期の精巧彫鑿なる彫繪を以て造られたるものなり。

内容小箱は淺中柱香道具なるを以て今之を略す。

高さ七寸二分、六寸三分角、小箱幅高さ二寸、深五寸八分、三寸五分幅

第一頁第二卷第四十圖月ヶ香香箱工



第十四 箱相説文鳳凰金鍍

藏 明 寺 四 縣 貢 藏

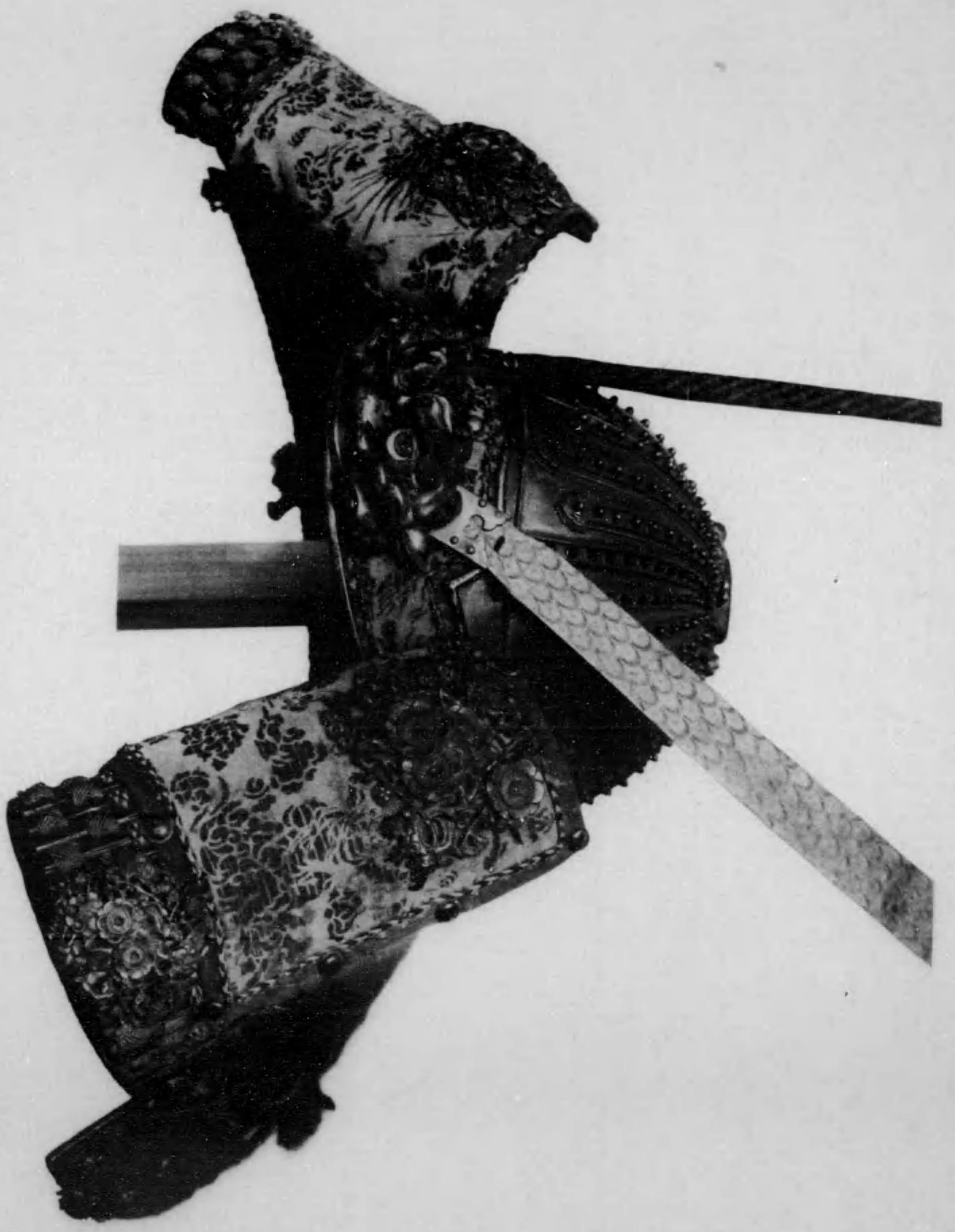
この説相箱は、全銀鍍の板にて包み更に四隅に中の束に唐花透しの金物を打ち、幾筋の處には香座あり、束と束との間には同鳳凰の付物を打ちたるものにして、奥州中尊寺金色堂の沙彌檀の香座間乃空宗意院の沙彌檀の香座間に類せり、本品の製作は稍粗雑にして所々脱突すも此種唐金箱中の逸品にして、文様は優麗なる當時の作品として頗る稀なるものにして、香座間の形等他のものに比較して多く興味を感ずるものなり。
上圖は側面にして下圖は其前後の面を写せるもの、中下圖には香座間の中束及蓋裏の損欠すものあり、内蓋は飾を削ひしものならんも今は之を存せり。
高さ三寸八分、幅二尺二寸、横徑一尺三分。

藏 明 寺 四 縣 貢 藏

第十一圖
寶國 鍍金梅花影具甲胃
代時食日非 靈具宗
社神日非 靈具宗

従来の影金家は、口を開けば直ちに後藤船乗を以て影金の鼻祖となし、其の以前には優れたる作品無きものとして研究せざるを常とせしも、近來社寺等の寶物開放せられて、斯かる古き誤傳を破るに到れ、抑も足利時代末期に於ては甲胃等の様式に變化ありし爲め、其裝飾は殆んど省おかれて具なきもの無きに至りしに反し、刀劍の裝具に漸く力を加ふるこゝなりしも、鎌倉時代より前北朝時代は武器全般に於て正に裝飾の黄金時代と云ふべく、茲に掲ぐる甲胃の如きも本圖第一編四十六圖に於て述べたる如く現存僅かに三四種中の名品にして、其の前記の鑄削の優劣なる實にこの一品を指て他に求む能はざるものなり、亦各所の茶金物は一々圖様を異にし梅樹に蝶を配した物を配置せる變化の巧妙なるは比類なきものなり

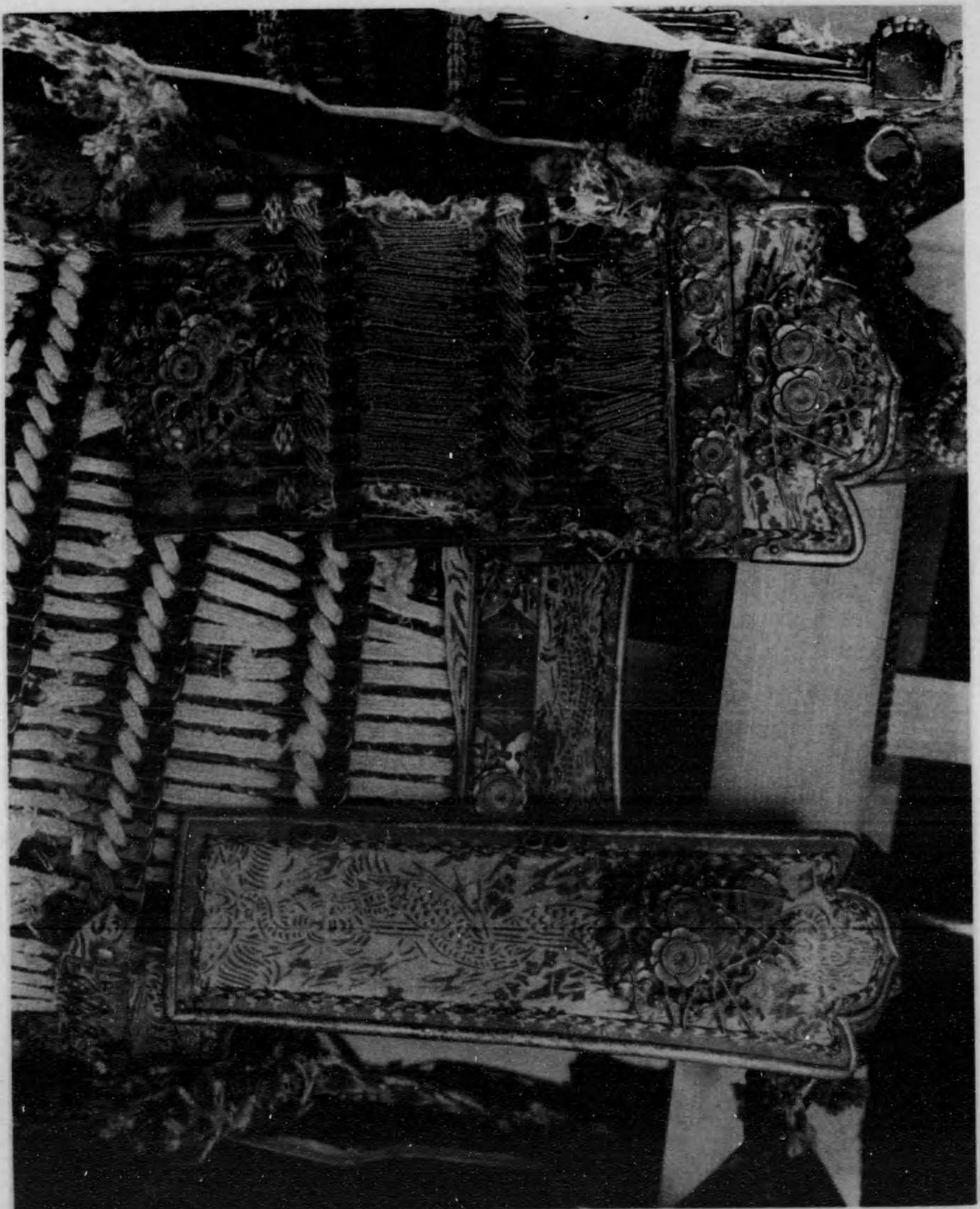
第三編第二圖 鍍金影具甲胃

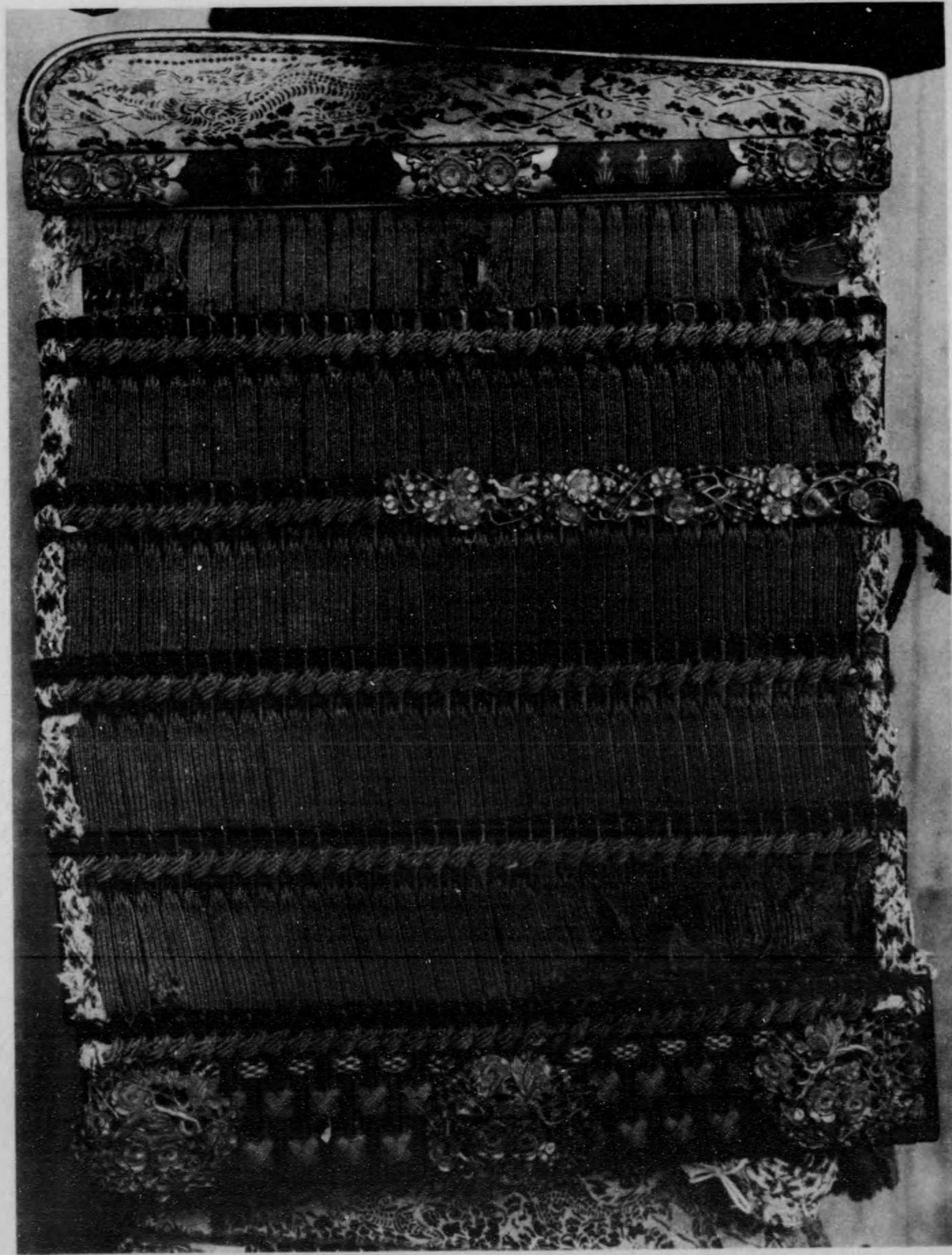


第二十卷
 實國 鍍金梅花影具付甲冑
 鎌倉時代 鎌倉神社
 寶長 泉

本圖は前面の梅樹及鳩尾の裝飾を示した。
 梅樹 堅九寸、幅四寸二分
 鳩尾 堅八寸六分、幅二寸八分

第三卷第二編 實國 鍍金梅花影具付甲冑





圖三十第
 (四其) 冑甲付具金彫透花梅金鍍 寶國

代時倉録
 藏社神日春 縣兵奈

本圖は射向の袖にして、化粧板の八雙金物の前端には、梅枝の間に蜘蛛網
 と蜘蛛を配し、拵金物の前寄りの所にも雲を彫せるを見る。

袖 縦 一尺五寸二分
 幅 一尺一寸三分

第二卷第二部装束美術精工

寶 國 第十 五 第
 京 都 府 平 安 朝 開 初 寺 藏
 意 如 影 毛 文 鳥 花 銅 金

如意の優秀なるもの稀に存する中、其材料手法等の異なれる名品を併せ陳する醍醐寺の如きは他に多くあらざるべく、洛南第一の巨刹にして始めて之を見る。

本圖は夫の一にして、鍍金唐草發繪に飛雀を毛彫

せるもの、其文様の古雅にして優麗なる、平安初

期の手法を見る好資料たるべく、類品亦稀なるも

のなり。

本品の全体を第十六圖の左に示す

總長さ 一尺八寸五分

頭部 縦四寸六分、左右八寸

第二圖第二圖意如影毛文鳥花銅金工





圖 六 十 第
 意 如 鈿 螺 文 華 唐 寶 國
 期 初 朝 安 平
 藏 寺 關 殿 府 部 京

本圖又醍醐寺の所藏に屬す、其の頭部は鍍金無文にして、其柄部は沃懸地に唐華唐草の螺鈿を施せしものなるが、今頗る剝落すと雖も、幸に其要部を存し螺鈿の光彩と沃懸地の金色と相反映して頗る古趣の感を存す、特に其文様の精緻なる、平安朝初期の斯藝を語る絶好の資料たり、本圖錄に屢々登載したる螺鈿文各種の鞍の文様に比しこの螺鈿の一層高雅なるを覺ゆるは只兵器と佛器との相違のみに非ざるべし。

本圖の右端は全体を示し中央、柄部を示し左圖は第十五圖の全体を示せるものなり。

總長さ 二尺

國二第第三第圖器用史藝工



第十七号
鉢 平 製 陶

作 内 源 賀 平
藏 氏 衛 兵 治 瀬 廣 府 郡 京

本圖は平賀源内作なる交趾寫しの平鉢を撮影したるものなり。寶曆年間（西曆一七五十一—一七六三年）源内長崎に於て交趾燒の法を倣ひ讃岐志度に於て茶器等を製したるに始まる。源内は有名の學識なり、法を赤松光信等に傳へて江戸に去れり、爲に源内の作世に傳はるもの歟し。
元來志度燒は割花、繡花、印花等の法を用ひ作りしもの多く本品の如きは其の繡花の法に屬し底部に「志度齊民」とあり、この種のものとして堅緻なる質を有し釉藥豐麗なる本品の如きは珍稀の品と稱すべきなり。

直徑 七寸七分
高さ 二寸一分

第二卷第二回展覽會出品



第八十

錦

代時原藤
院護聖府都京

本圖は近年國寶に指定されたる智證大師木像の背部より發見せし大師入唐當時の將來目錄を納めたる竹筒を包みし裂にして、犀霜數百年跡内に藏せられたるものなるが地色は尙紅の跡を思ふに足り、文様は白紺蒔黃等を以て七寶を亂付きこなし其の間に寶相華唐草を充たし、七寶と七寶の間には小童の蔓を持ちて座せるを配したる頗る巧妙なるものにして、神護寺の竹帙の縁の錦と相似たり、又正倉院御物の竹帙の裂に純日本製品なる例あり本品の組織に於ても多少支那渡來のものとの相違あるを覺ゆ、作風又奈良朝時代のもの如き勁銳味を見ず、温雅にして親しみあり蓋し康治二年（西曆一一四三年）覺忠僧都造像當時の裂ならむ歟。

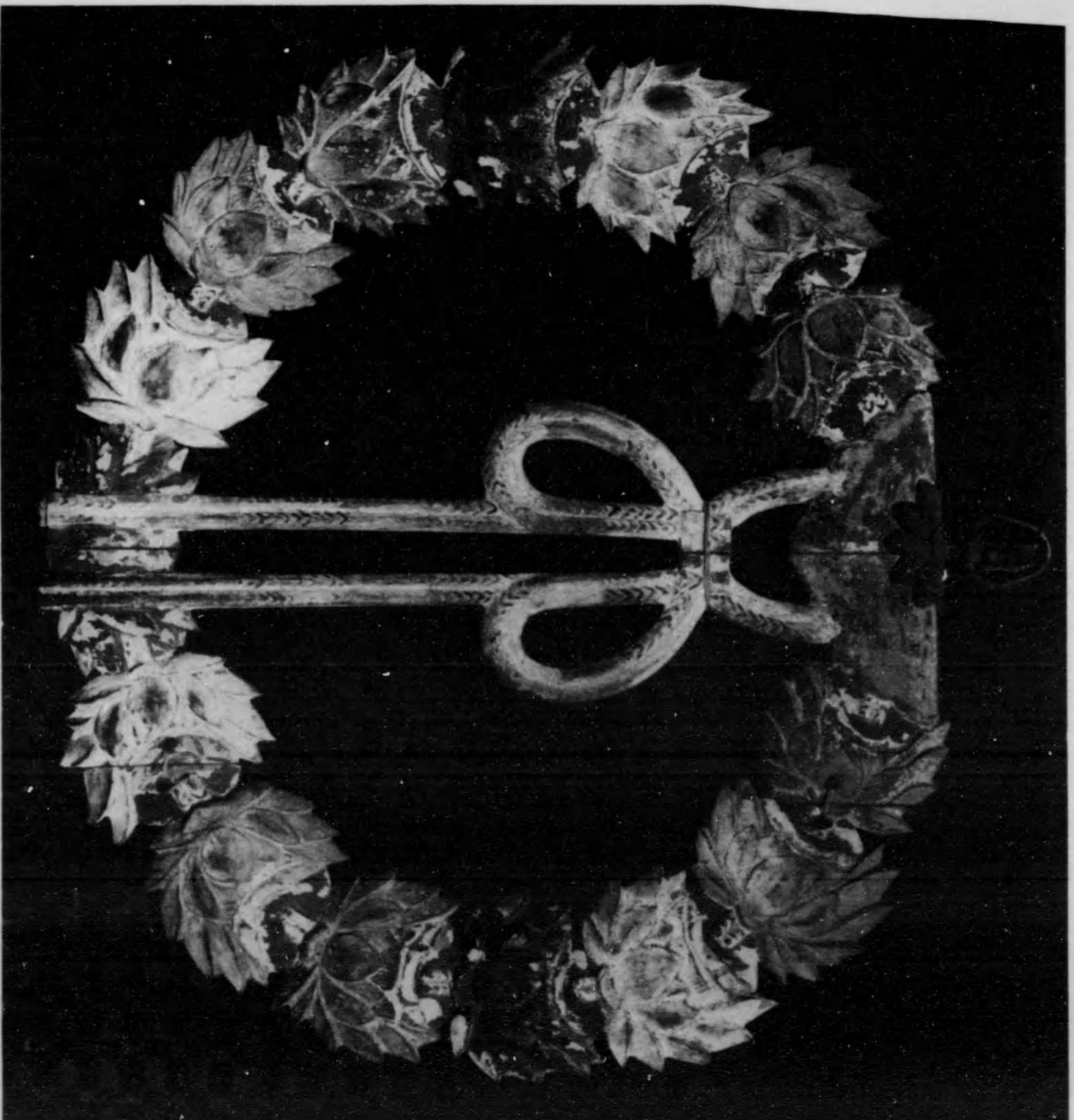
圖は殆んど全部を實大に示したるものなり。

第二卷第二編 美術史 藝文部

國 寶 木 彫 影 彩 倉 山 寺 代 華 藏
 第九十號
 變 華 色 影 彩 木 寶 國

本圖は華蓋の最も原始的の形式をなせるものにして、大日經に「是等妙華、吉祥華所、樂、採集以爲蓋」と云へるに基きたる道場莊嚴の具にして、圖の如く蓮華を一々組紐にて貫き其餘りを結んで總角として垂れたるものなり。
 この變形せるものに、稱字體と云へるあり、唐華或は迦陵頻迦等を彫刻するに至れるなり。
 各華形は青白赤の彩色ありて之を貫くに綾染の組紐を以てし其紐付の銀座も圓敷蓮を用ひ、之に切龍頭の樹形形の鍍を施したる等首輪を存し頗る優雅の趣を存す。
 堅一尺一寸三分 左右二尺三寸三分
 各蓮花の幅二寸七分 厚約四分五厘

第二卷第二章 國寶 木彫 影彩 華藏





第二十 金銅能作生塔

鎌倉時代 長福寺藏

茲に掲げたるは、一般能作生塔と稱するも實は水瓶形に莊嚴を加へたるものなり、この例は大和竹林院發見の行基菩薩の舍利も亦この水瓶形の中に納められたり、蓋し此等の形式を追ふて作られたるものならん。本品は銅質鍍金にして精巧なる蓮華唐草の毛彫ありて其間を魚子地とせり。全体は五重の臺座の上に据えたる寶瓶の形にして、其の蓋上には火炎を飾りたる寶珠を据え、瓶身の胴紐を境として螺番を施したり、この形式彫刻の手法は、南都西大寺に藏せる舍利塔に酷似し、傳來詳ならざるも大凡鎌倉中期頃の作品と見るべきものなり。斯かる形式は淵源を遠く西域に發し、我國にては法隆寺、正倉院等の寶庫に此の形式に似て簡素なる小塔形に移り存せり、これ等は多く舍利を安じたるものなるが、本品は名の如く密教にて秘寶とせざる寶珠を安ずるに用ひしものなり。

高さ 八寸八分

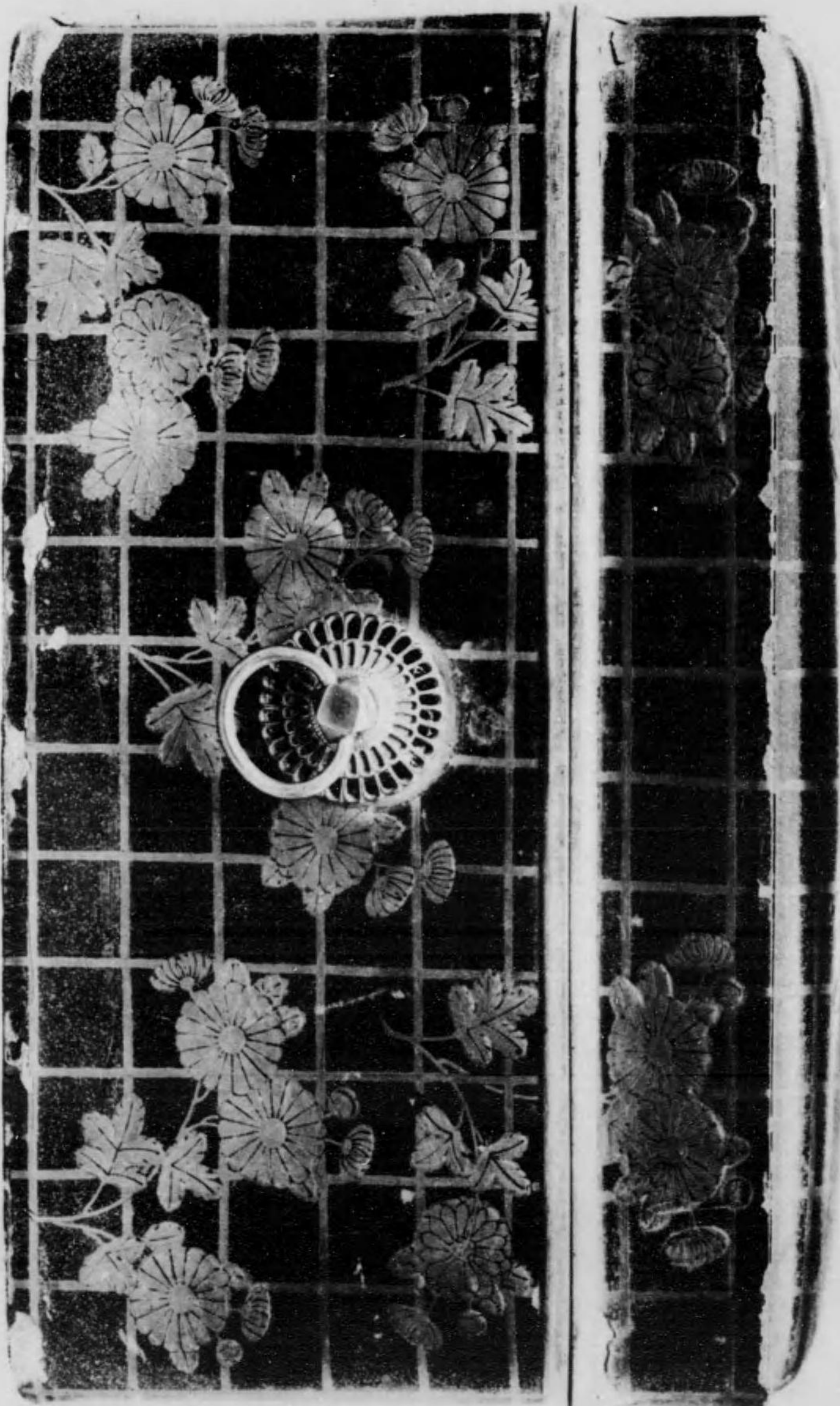
正倉院藏 金銅能作生塔

圖一十二 第
實 圖
菊 詩 繪 手 宮
足 利 時 代
熱 田 神 宮 藏

本圖は熱田神宮の寶物中、足利義政四郎一四四四年一四七三年寄進する手宮にして、築地を布袈裟の織物地として、東濃郡の織地を専ら織に菊の枝折を傳せたり、其織庫は通常詩繪の圖に因る宝物を傳すのなれども、本品は同じ菊を用ひして意の知展さし、恰かも鎌倉時代より南北朝なる間の大座の織に似たるものを用ひたり、斯くの如き織を二面に配したるは足利時代の織の衣裳衣袂に類し、通常優美のものに比し二種別裁の趣あり、この手繪の手法は精細なるも織に菊枝を清らせたる等閑なる描き方をなし且花葉等は規則の上、繪畫をなし、葉裏、襷子の内外にも菊枝を穿せる精細なるものなり。

總高さ六寸一分 正幅九寸九分、幅七分八分
 襷高さ二寸
 身長四寸三分
 襷子高さ一寸六分五厘

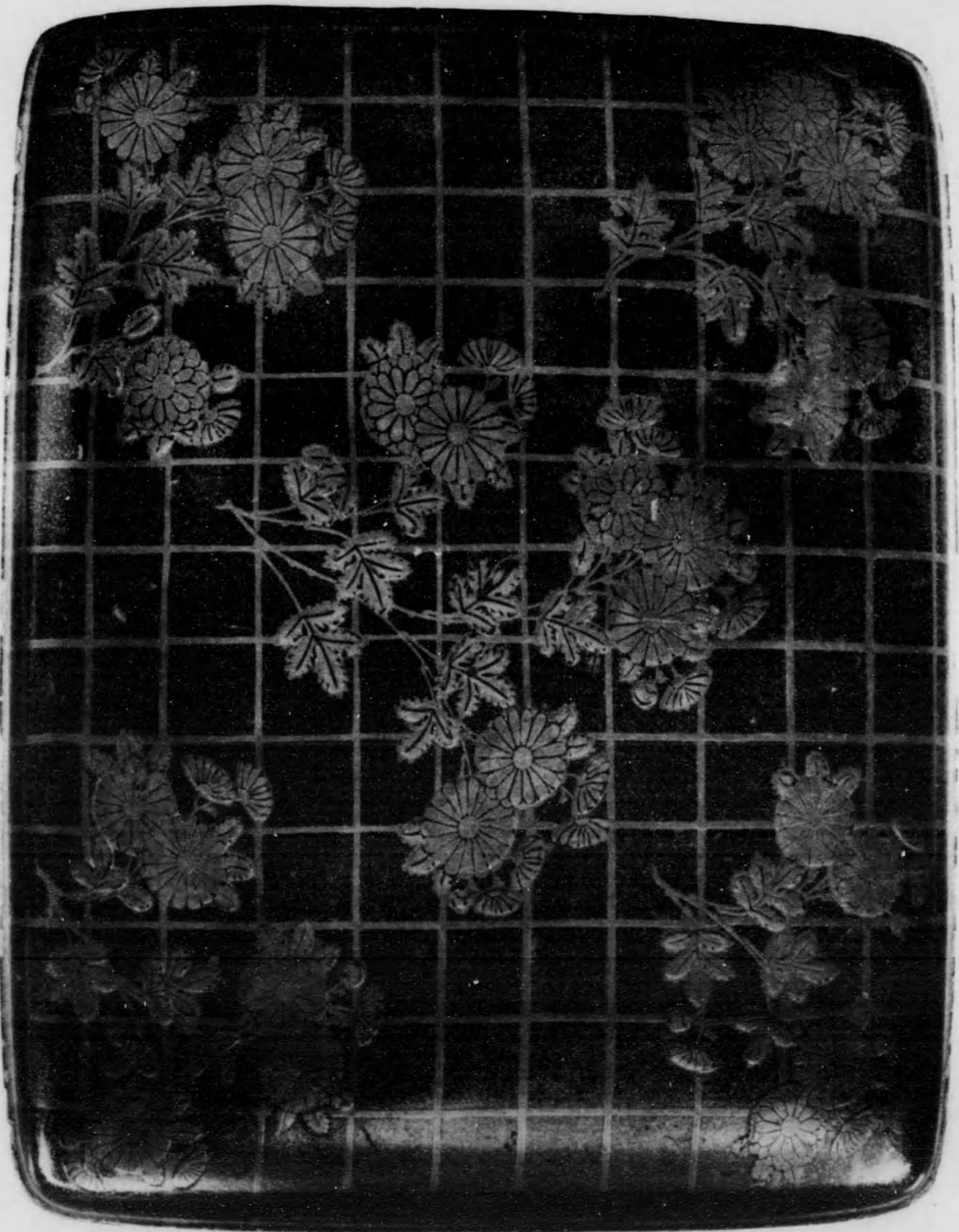
明治三十二年二月東京美術會館藏



圖三十二 菊
寶國
手繪蒔
代時利足
宮 繪田 菊

本圖は表裏を裏にして

繪三十二 寶國 菊 手繪蒔



圖三十二 菊 手繪 宮

代時用是
藏宮神田熱

右圖 手有白網
左圖 蓋 裏

繪三時宮二宮五葉菊其工





第十四号
木造舞樂面

愛知縣 熱田神社 藏

この面は左方大曲に用ふるものにして、樂家傳へて支那北齊の蘭陵王、匈奴を征せし時其の美貌なるにより、この假面を被りて擊刺せし勇壯の狀を傳へたるものと稱すれども、恐らくは印度南洋邊の假面にゴブラ(毒蛇)を頂上に据ゑたる龍王の面あり、夫れ等が支那に入りて後に我國に傳へたるものなるべし。この種の面は嚴島神社、水宮神社其他二三あり、雖も本品は特に優秀なるを以て先づこゝに掲げたり。この面は所々尙金色を呈し、その裏面には朱漆を以て「新面弘安年修」とあり。

幅 六寸
高 一尺一寸

工藝美術史卷二 第三編

刀 太 釧 庫 兵 實 國

圖 五 十 二 部
 代 時 倉 鎌
 藏 宮 神 田 熱
 館 山 慶

兵庫鎮の太刀は所傳影なきも、其の年紀
 全確に傳ふるものな多し、本品は足間の雨
 雲の覆輪に「尾州丹波安土庄領守八幡大明
 清源權現長尾大納言兼備前守仁第七層己亥三
 月二十六日勅兼倉原定」を新書ありて、明か
 に空閑の時代を訂定するを得るものにして、金具は
 例に依り鍍金を施し柄は銀組にして總て松及び
 梨を以て飾らる。柄紋は實で第一編第一圖に登載
 せし丹波郡足原郡の太刀と同一にして混紋に銀紋を
 他物にて嵌せしが脱出せるものなり、同時代に
 於ける工藝技術は器の裝飾に傾注せられたりこ
 云ふ可く本品如きは最も尊重すべき資料なり。
 本圖は形にて下圖は足金物及鞘の毛彫を示す
 全長 三尺五分
 柄長 六寸七分

實國兵庫藏：新書實錄五卷五



第六十二號 刀 太 鑽 庫 兵 實 國

代 時 倉 藤
藏 官 神 田 然 徳 和 愛

本圖は柄及柄の彫刻を小字

第三卷第二頁五段見録工





第七十二圖

蓬萊蒔繪鏡奩

足利時代

愛知縣 熱田神宮藏

この鏡奩は文安二年(西曆一四四五年)奉納せ傳ふるものにして通途の蓬萊文八稜鏡を納めたるものにして、隙地に松竹鶴龜を描きたるが、松竹の葉を研出蒔繪マシエなし其他は鈔の盛上げカマエなり、この手法は研出より盛上げに到る蒔繪の過渡期を示せるものにして後代の高蒔繪の初期をなせるもの云ふべく最も珍らしきものなり。
本品は他に類例なき懸子を具したり、この懸子は合せ鏡を納むるものと思ふすれども今用途を明かにせず、斯く大形にして形式特異の鏡奩は稀有のものに屬し、貴重なる資料なり。

直徑 九寸八分
高さ 二寸二分五厘

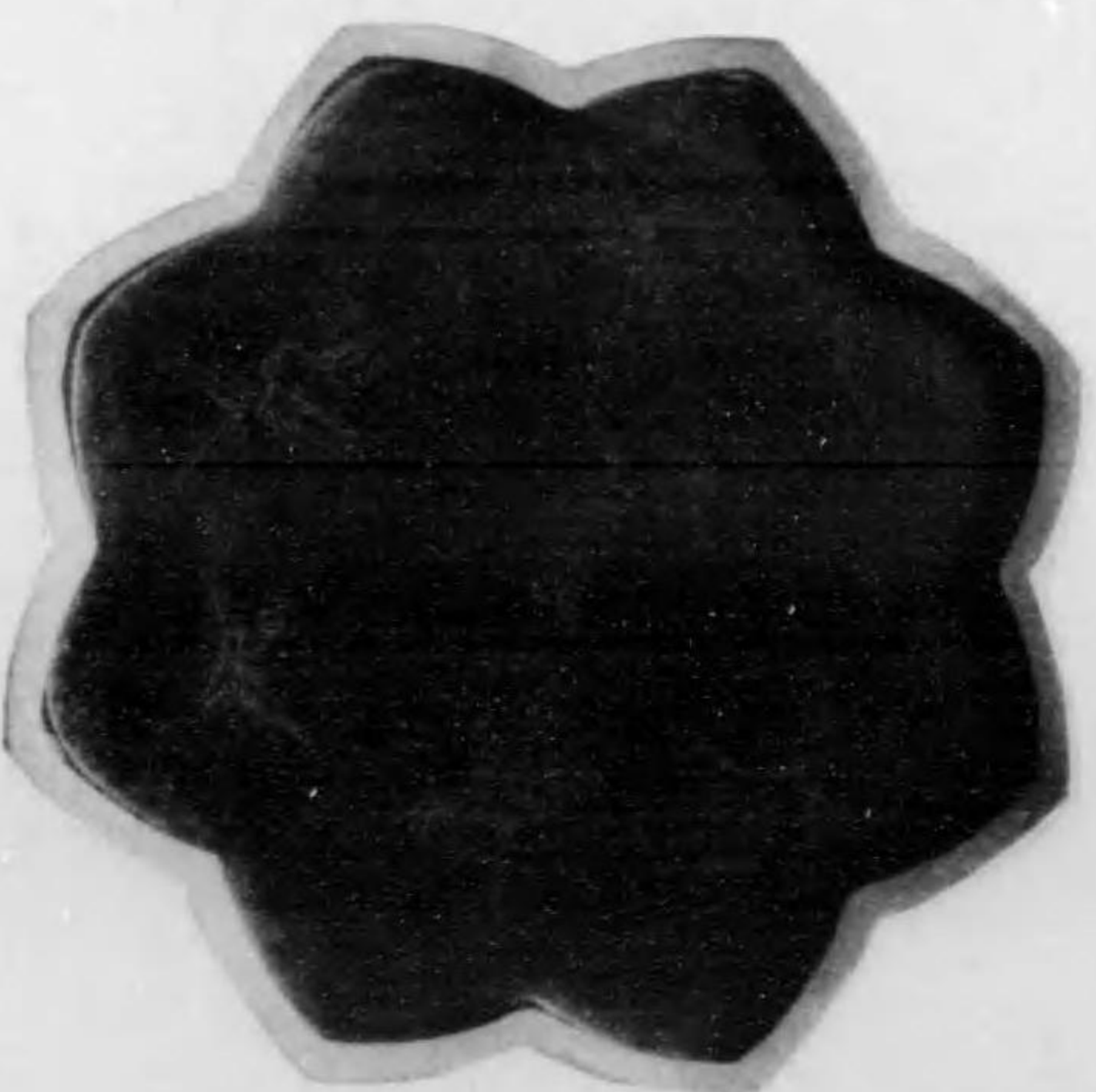
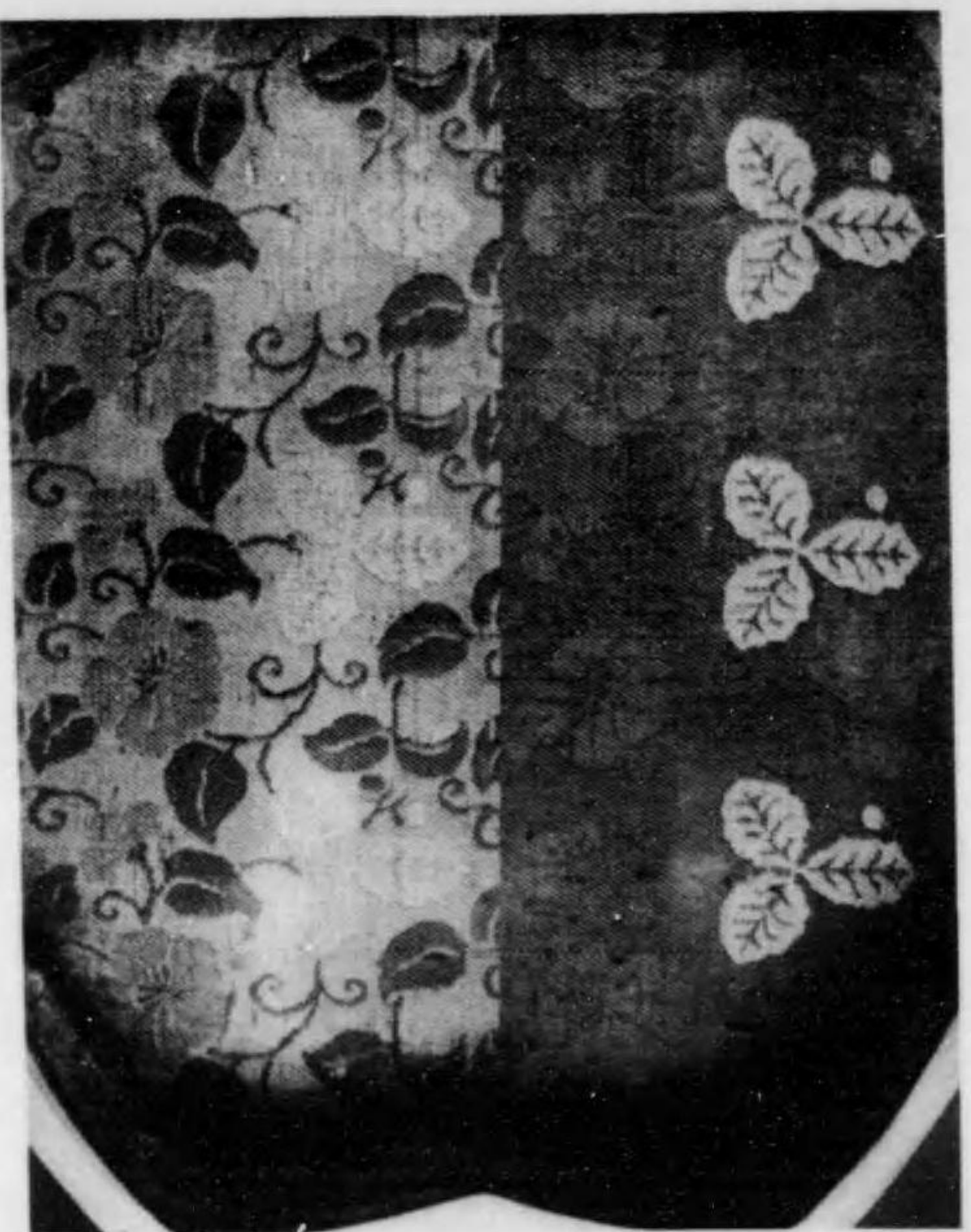
工部省美術調査第三卷

第八十二 藤來時繪鏡奩

足利時代
熱田神宮藏
愛媛県

右上面は養正松喰の母として下段は前なる
笹の模様を示し、左上面は身の内側の折立の模
様を殆んど真大に示したり
この鏡は上部を崩黄地に模様に表し、下
部は黄地に桐草に三つ柏を配したる崩黄にて
織出せる珍らしきものなり

工部卿藤原公三郎





第十四号
卓小繪蒔文鸞蘆

代時山桃

藏館古微 部重三

本品は黒漆地に金銀粉を以て蘆を描き、鸞は銅金貝を用ひしが今腐蝕して僅かに痕跡を存せり、手法よく足利時代の氣韻を存するも其大手にして豪放洒脱なる圖様は、桃山一流の特長を發揮せるもの云ふべし、且机脚の牙像等頗る雄勁にして、當時の名工の手に成りしものなるを思はしむ、又斯藝の一名品と稱すべきなり。

上圖は甲面にして下圖は全形を示す。

甲面 竪八寸二分、横一尺七分
高さ 四寸二分

精工美術院蔵二番三番



第三十一圖
 亞比刺式唐草文陶皿
 唐代
 京師國文學部藏

これは白き陶土を以て造れる淺き皿にして、平底を附し外面は稍黃褐色の色を帯びたるも、内面は白色に近き素地を現はせり。思ふに元々全面に柔き黃褐色の釉を施せるものならむ。内面には華麗なる亞比刺式の唐草模様を型押しにしたるが、手法精巧にして、支那陶器中稀に觀る所に屬す。其の發見地の精細を知らず、時代に就きても確證の根據なきも、其の陶質等よりして、恐らくは唐代(西紀第七世紀)第十世紀亞比刺文化の影響によりて支那に於て作られたるものならむ。

直径 一尺六分
 高さ 一尺三分
 後臺 高さ三分

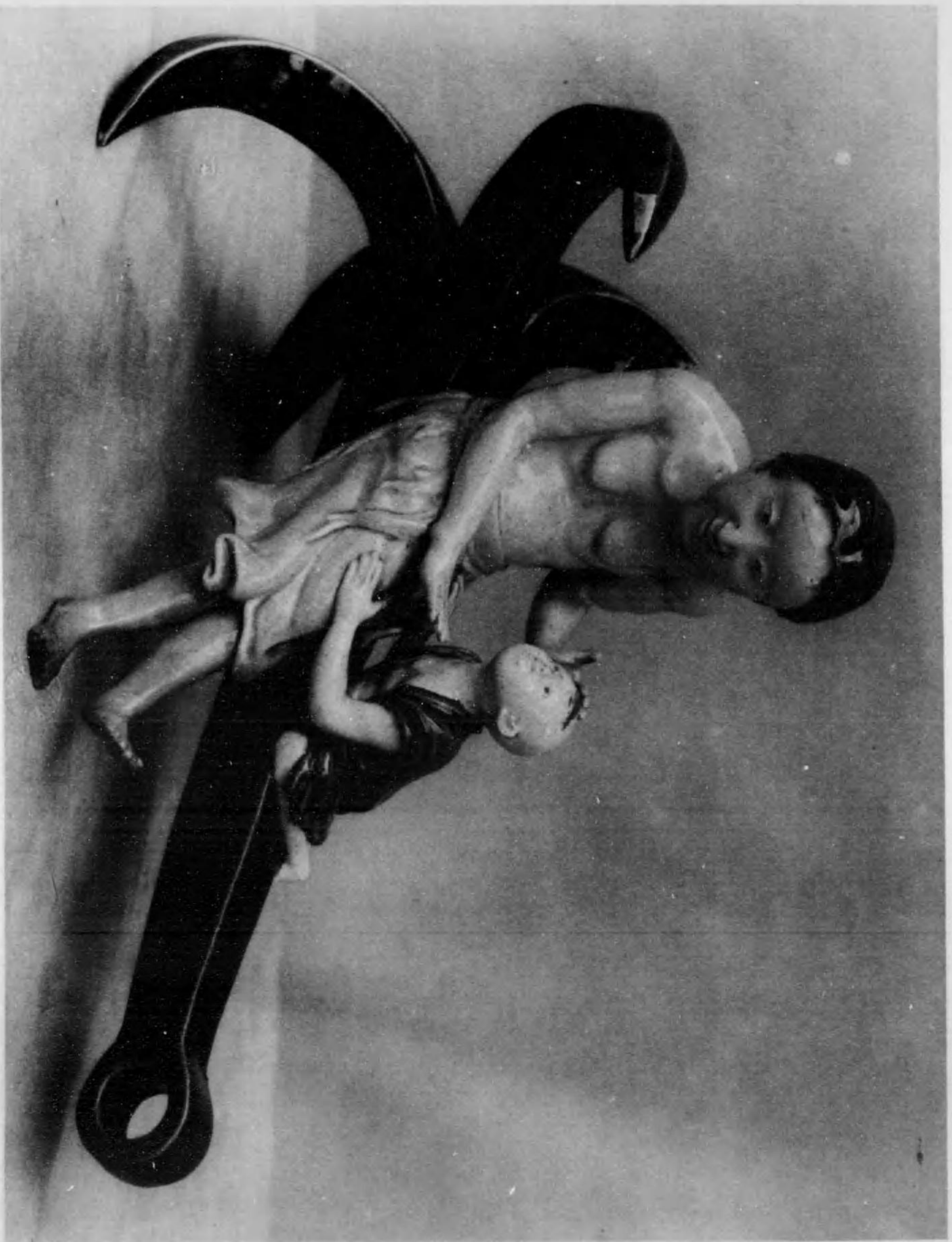
東京帝國大學文學部藏

圖二十三 第
 燒 庭 御
 期 末 川 德
 鐵 所 驗 試 器 磁 陶 器 物 典 局
 所 藏 京

御庭燒は永相傳傳とも稱す、文政昭和歌山の四
 方四張を辨燒、於國々各傳國と稱し、此處に
 葉を設けて製茶用、燒物名造りしが、文政十一年
 (西曆一八二八年)永徳全の利り著製するに及
 び、作品著しく進歩著盛成存等にも及びたりと
 稱すれども、其持はまことに紫、藍、黄、或は
 白淺茶等の紋紙細のものを出せしが有名なり。
 本品は慶應義塾官製陶器試験所の藏にして、袖
 鑿寫眞形繪美、特に細の如き細長きものを作
 るに、能く全般の如を得たる技藝の凡ならざる
 を見る。

高 三 七 寸 四 分

鐵 所 驗 試 器 磁 陶 器 物 典 局
 所 藏 京



第三十三圖
 德川初期
 草煙形人挽車
 京都 醍醐寺藏

煙草は桃山時代、南蠻人により輸入され、其賦用の
 構造は都鄙共に非常に迅速に行はれ、其原形たるもの
 柄の幾に添せて用ふるものあり、或は江州水口坂の如
 き著名の例あり、其案の如き真鍮製を施したるも
 の多しと雖も、多くは長方形の體に造り、其中に、本品
 の如きはここに趣を凝めて新造形となし、其の車體の上
 に火入、灰吹等をのせ、之を挽かせるたる形を造り、人
 形は足車にも小車を附したり、當時特有なる長細管
 は長柄に打たる食物に懸る、器造にして、附屬品は
 散置とも、頗る斬新奇異にして、恐らくは茶室に於
 て益を觀せたる號の廻り行くを參さじし如く、此の煙
 草盆主要の點を周旋して、觀するに當せしものなるべ
 く、技巧及輕妙能く全體の調和を得たり、この人形の衣
 裳は半ば彩色の味あるは、彼の角骨鎧具等の工人
 等の手に出せしものならん歟、長さ尺高き寸五分
 本品醍醐寺に存するより考察して、鹽釜茶室風草
 けた作品とも云ふべし。

醍醐寺藏 第三十三圖

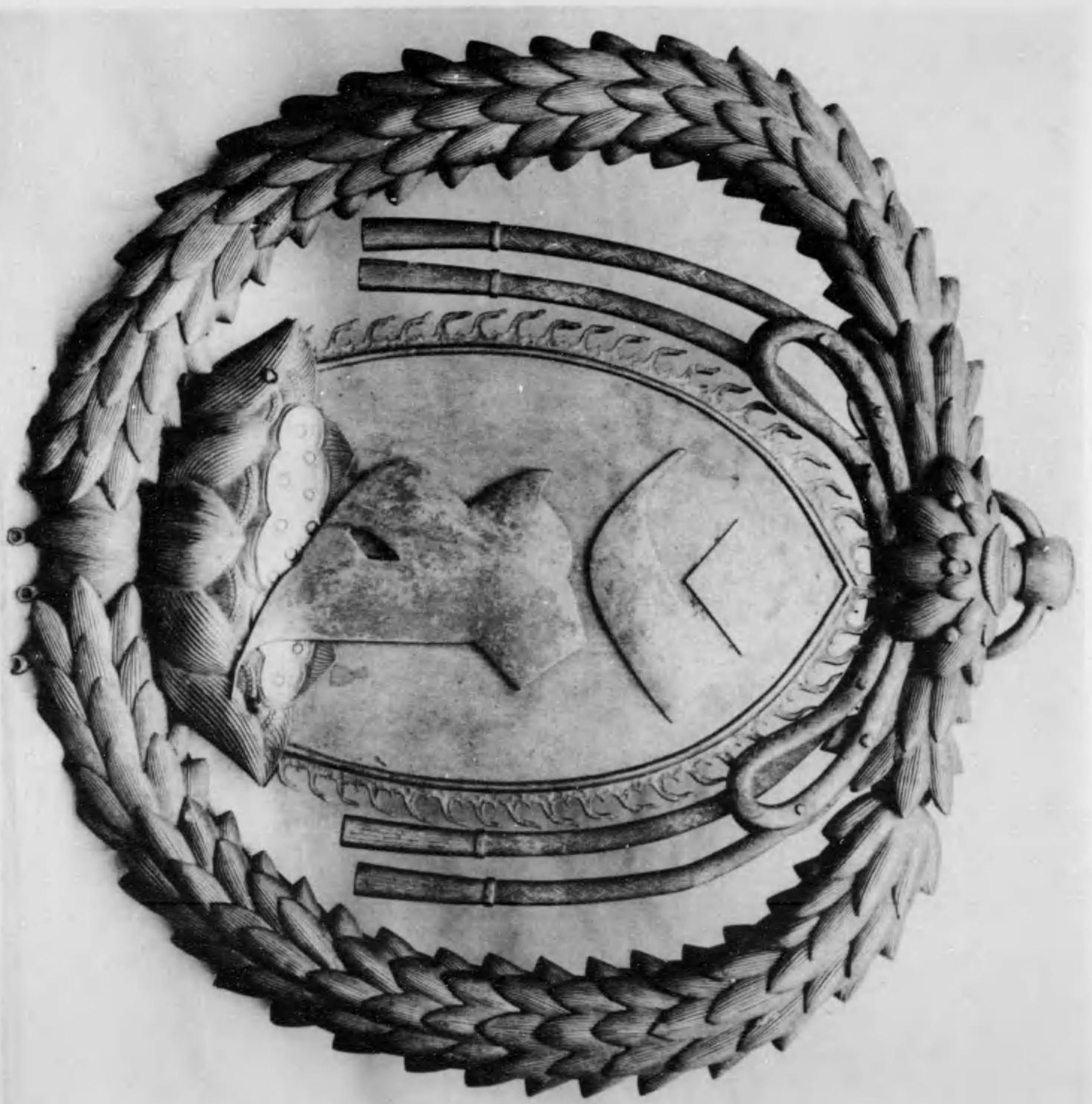


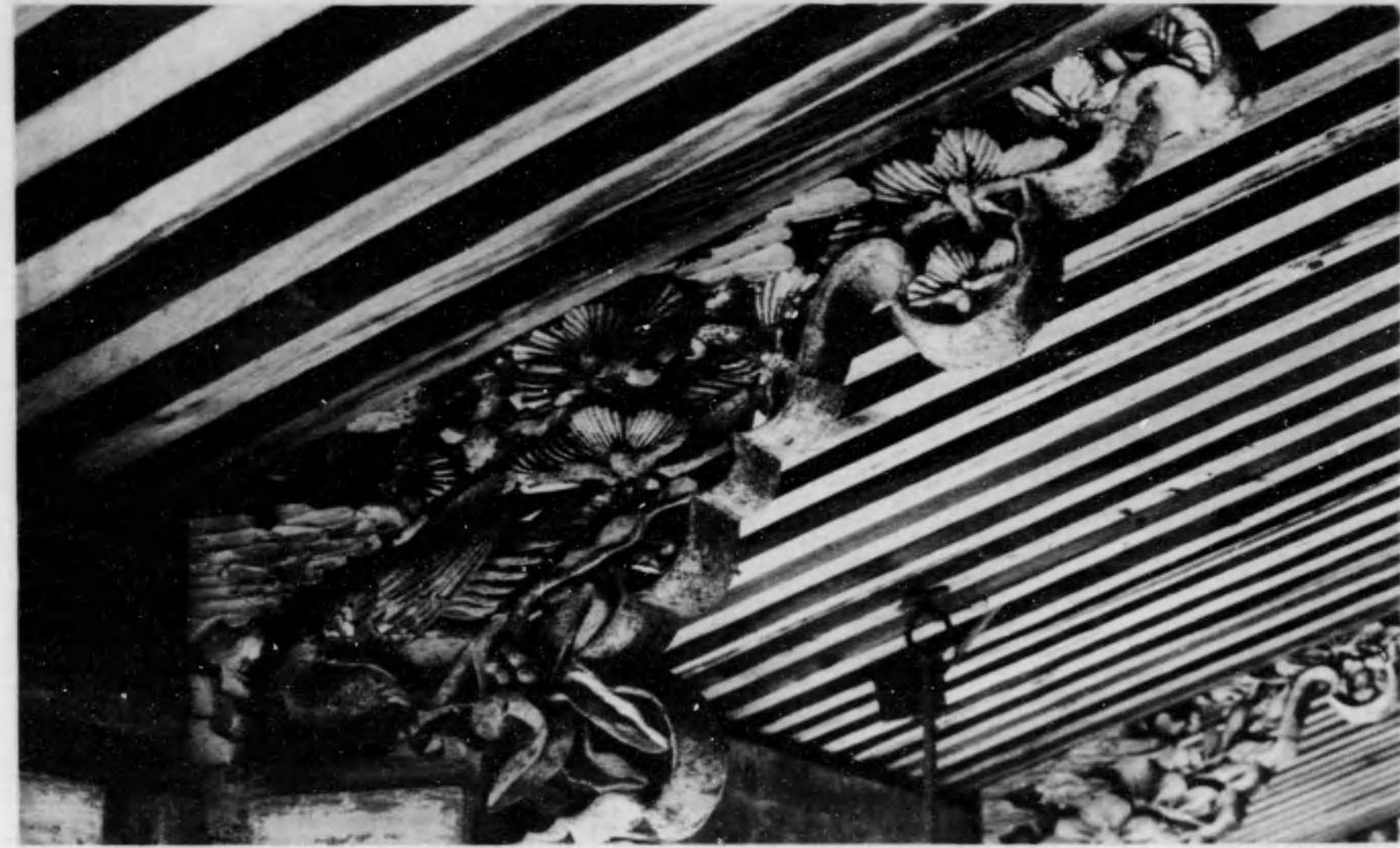
國 實 兵 主 會 社 代 鑄
金 銅 華 鬘

ここに掲げたるは、兵主帥社の東平堂藏物中の一つなり、即ち漢朝を二條の赤い糸に結んで懸せしむる比較的原始の形にして、糸の結餘りは通常様に垂れて紐を別に飾の間に方柱状のものとして附するものなれども、これは亦、圓筒の内方に三本並列したり、この形のものには前二年第十九回東京博覧會に於て更に古風なり、圓の中央、漢座の上には糸の光背を設け朱字を附し、漢座の下端には例により五つの密金物を三個の鈴と二個の總金物を附けたるが點を呈したり。本品の製品箱にして、其紐の別文に三垂を以て打紐の紐文を寫したるのみならず、漢書八輔官に古以金物に同じ様式のものありて、全體彫刻的手法は鎌倉時代に屬する奈良西大寺の佛具に頗る類似するものあり、社傳、別類例の寄進の云ふべし。

厚 九 一 一
 寸 尺 尺
 分 四 三

東京市立博物館蔵





第三十五圖

木造彩色花鳥文手挾

桃山時代

奈良縣分水神社藏

本圖は吉野水分神社、社殿建築の一部なる手挾の中特に圖様面白きものを撰び掲げたるものなり。

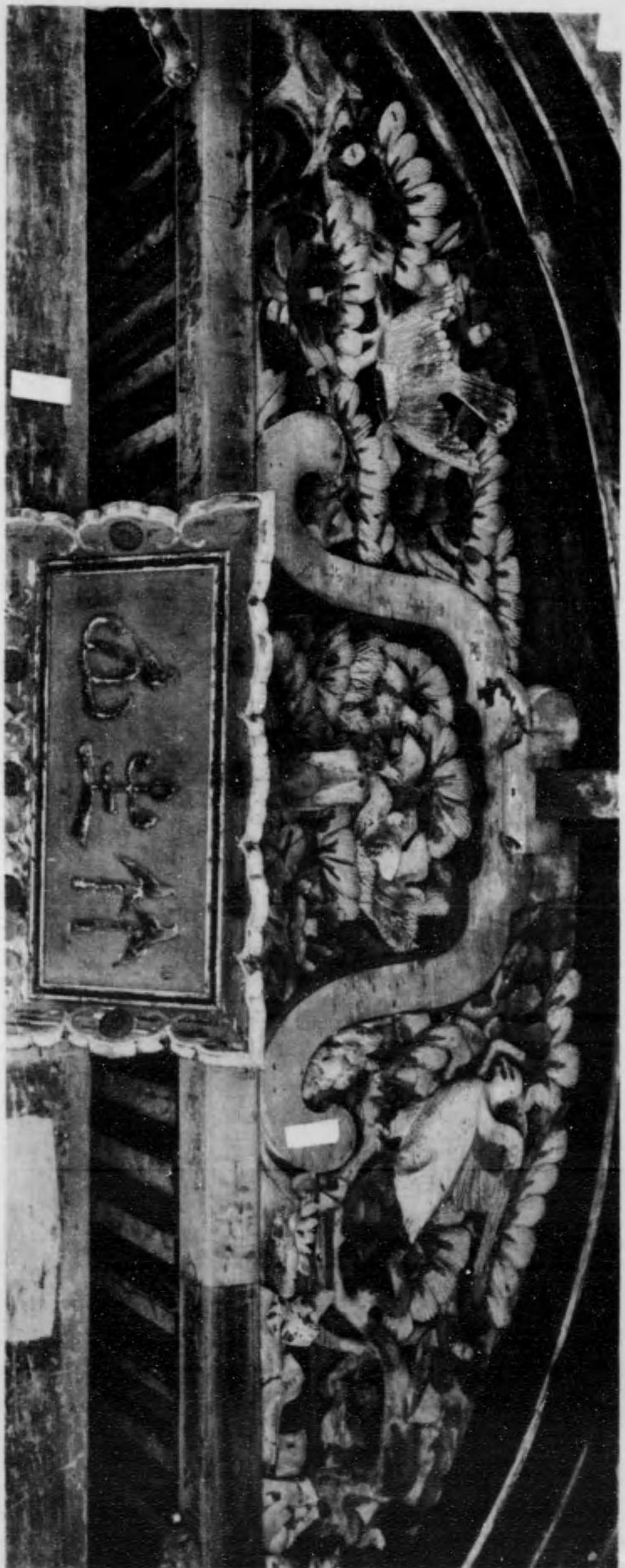
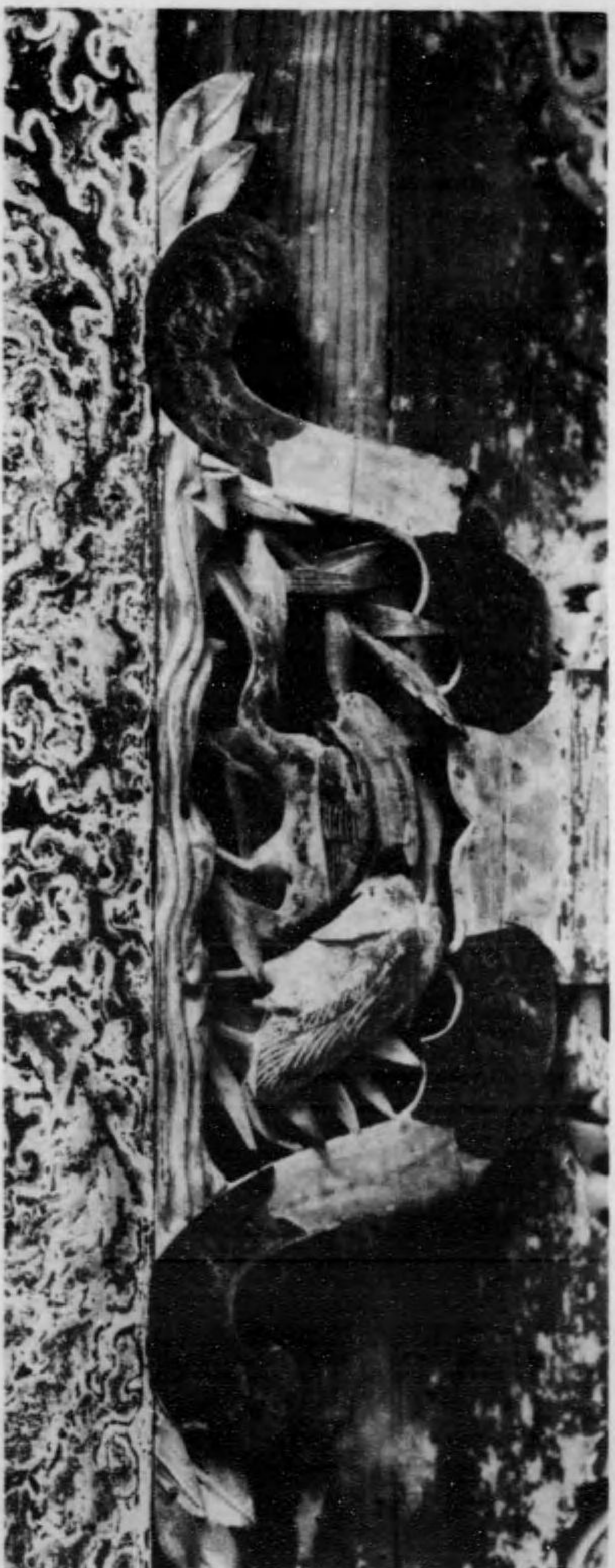
上圖は松に雄三根元に萬年生を刻し、所々に例の桃山式の屏風貼付けに見る所の、置上げ雲形を配し、下圖も亦虚に雁を、何れも流麗にして巧妙なる輪廓の中に適應したる配置は、當時有名なりし山樂、永徳等の名手の圖案に成りしものと思はる。

工書製圖部第二卷

第三十六圖
木造彩色壁画
奈良 眞經 水鏡 桃山 分神 時社 神代
藏社寺

こゝに物々三頭も亦桃山時代保護建造物の主要なるものにして、世間縁、琴端、経端等に金物を打たれたる往々存すれども漆に金物を施せるもの種なるが、上圖、水分神社殿の漆に之あり、前圖に掲げたる手鏡等と共に、彩色依然として殘存し尙糾纏として當代の物を傳ふ下圖は竹庄宮藏寺所在のものにして、彫の内外の關係最曲あり、雄健なる彫手法と共に香卓、きき鏡資料たり。

新田神社：奈良眞經藏社寺



葉杳文冬忍銅金・缺殘冠銅金

代時古古上微 雜重三

古墳發見品中、珍奇なる銅製品は其數なしとせし
 雖も、發見其に關する是前、資料の類に列りては頗る稀
 にして所傳多からず。本品は類品中の特殊なるものにし
 て、圓板上に忍冬杳文同様の唐草を充滿し、其内縁に
 は連環文を刻し、外縁に其下面に七個の小弁を下向き
 に附け、其飾は頭より見たる輪影にして、夫れに二對
 の細き葉を添へたるものにして、恐らくは確實に據ら
 るものなるべく、又符號には三箇の脚あり之れに輪環の
 物を施して、頗るに奇なるに似せしものなるべく、之れ
 を發せしものなるべし。斯の如き飾を鑿用せしは、我國
 古代彫刻の特殊にして、實に稀觀のこゝ言ふべし。こ
 の文様より察するに古墳發見中、稍後期に屬するもの
 にして、本品の意匠に至るのなり。

左圖は頗る巧なる鑿造の物を地板に伏せて、其
 周圍を鑿にて發せし、右圖は銅製に比すれば、頗る進歩
 せるものにして、古墳發見以外のものには法隆寺藏玉璽
 の厨子を物若くは圓寺藏西天王の金物等に類し、古
 墳發見中の最も未だ圖解のものにして、佛敎傳來當時の
 遺品なるべし。本品は馬形の柱に雲珠の根に裝着せし
 もなるべし。

右圖 直徑 尺分五厘

左圖 長さ 尺四分、幅四寸二分

銅製品(二) 葉杳文冬忍銅金・缺殘冠銅金



圖八十三第
 黒漆前机
 足微古
 代所
 藏

本品は京都府に傳はりし佛なる前机にして全體漆
 漆甲板は筆返しなく、四脚は楕圓にして香灰間の扶
 り方は鎌倉以來の風を存して複雑なる輪廓を呈し、器に
 下縁の間に圓の如き持送りを作りて配付せしめたる
 意匠は、この種前机には珍らしきものなり、作風は初期
 期の造りの多量も、食物の形式及刺文を以て自然な
 り、本館時代末期の作と云ふべし、本品を鑑別する
 れども、恐らくは前具を陳列するものならむ。

明治四十二年二月東京美術院蔵工



圖九十三 倭
鞍 銅 螺 文 丹 牡 實 國
代 時 倉 羅
羅 社 神 時 比 山 白 羅 川 石

第二年第三回
照

神戶市立博物館藏



第十四章
鞍釦螺文丹牡實圖
代時倉鑑
藏社神時比山白 銀川石

なり

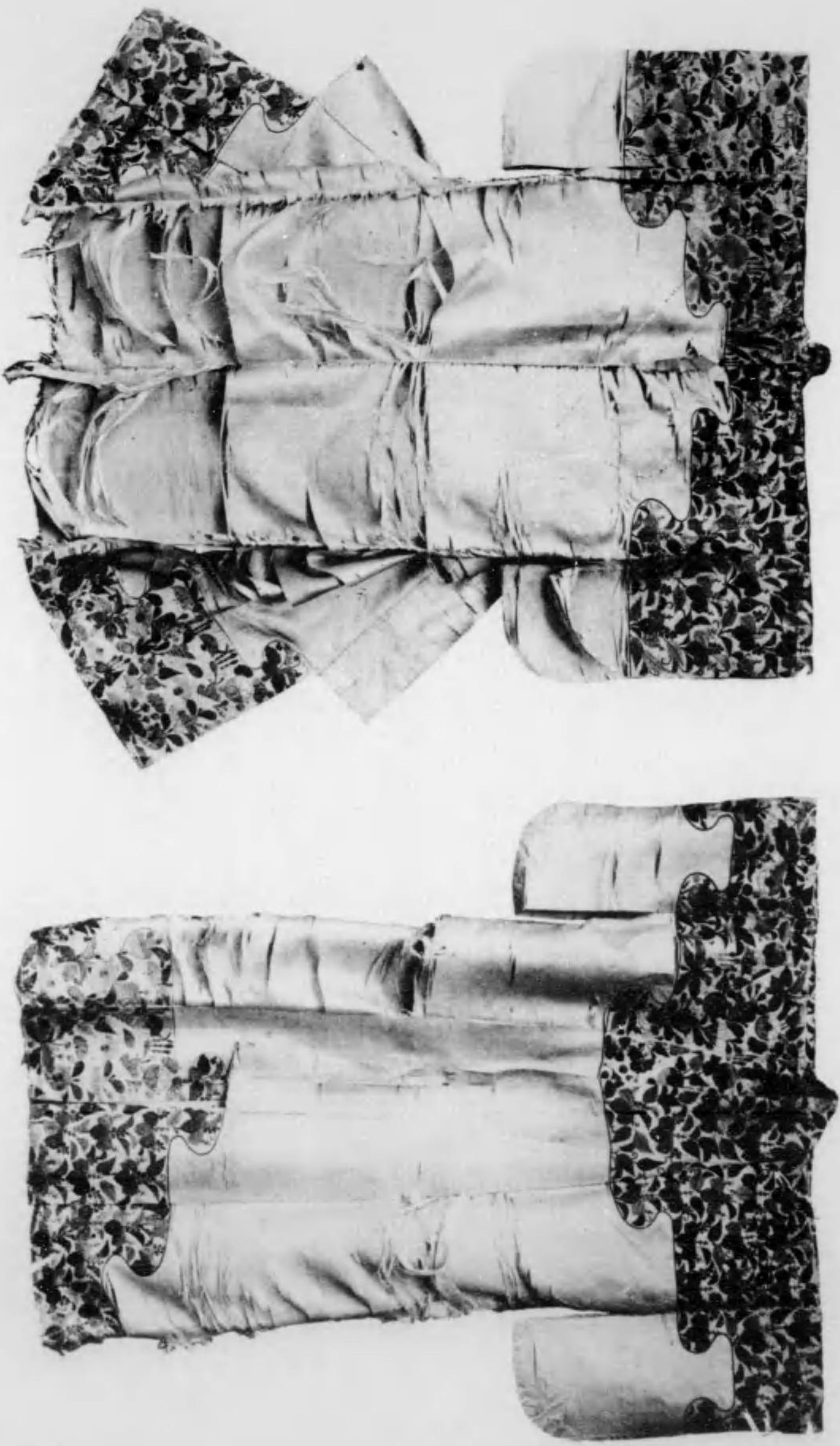
第二、第三圖の後縁の部分を実大に示したるもの

鑲嵌部等：東京美術院鑲嵌工



清神社は丹後國經々脚に定本庄村池田橋邊、赤島太郎
 郎發跡をなす社にして、古より存在する如く、現在の
 物中にも清島子の繪傳之図の墨東赤繪重寶有存り。
 ここに掲げたるは古傳之図より油畫を斷りし、生地の織
 貫にして、之に五彩の奉繪を以て、桐原之春の櫻繪を繪
 肩、袖及後身の襟肩に、片身裏に繪取りたるものな
 り、この様式は桃山時代より徳川初期互か行はれたる肩
 襦さ稱するものなり。
 全體刺繍は華麗なる水練を用ひ、花底は墨雲を織切り、其
 上を細線にて透麗へさなし、花繪及縁を深くなしたるも
 のなり、ここに奉草の中に表裏の縁を表はせる構想こ
 そに珍らしく、元來衣袋の類、空貯に傳はるもの頗る
 稀なるに、本品の如きは稀寶を名以て、當時の仕立
 及縫ひ方を窺ひ得るは殊に貴重にして、風俗研究上得難き
 好資料たり。
 身丈 三尺九寸三分、行 一尺四寸一分、袖巾 六寸五
 分、袖丈 一尺一寸五分、襟巾 三寸六分

第五百五十二番 東京清神機代時社



第二十四卷
第 五 册
緒
代 時 山 地
處 社 神 浦 野 原 草

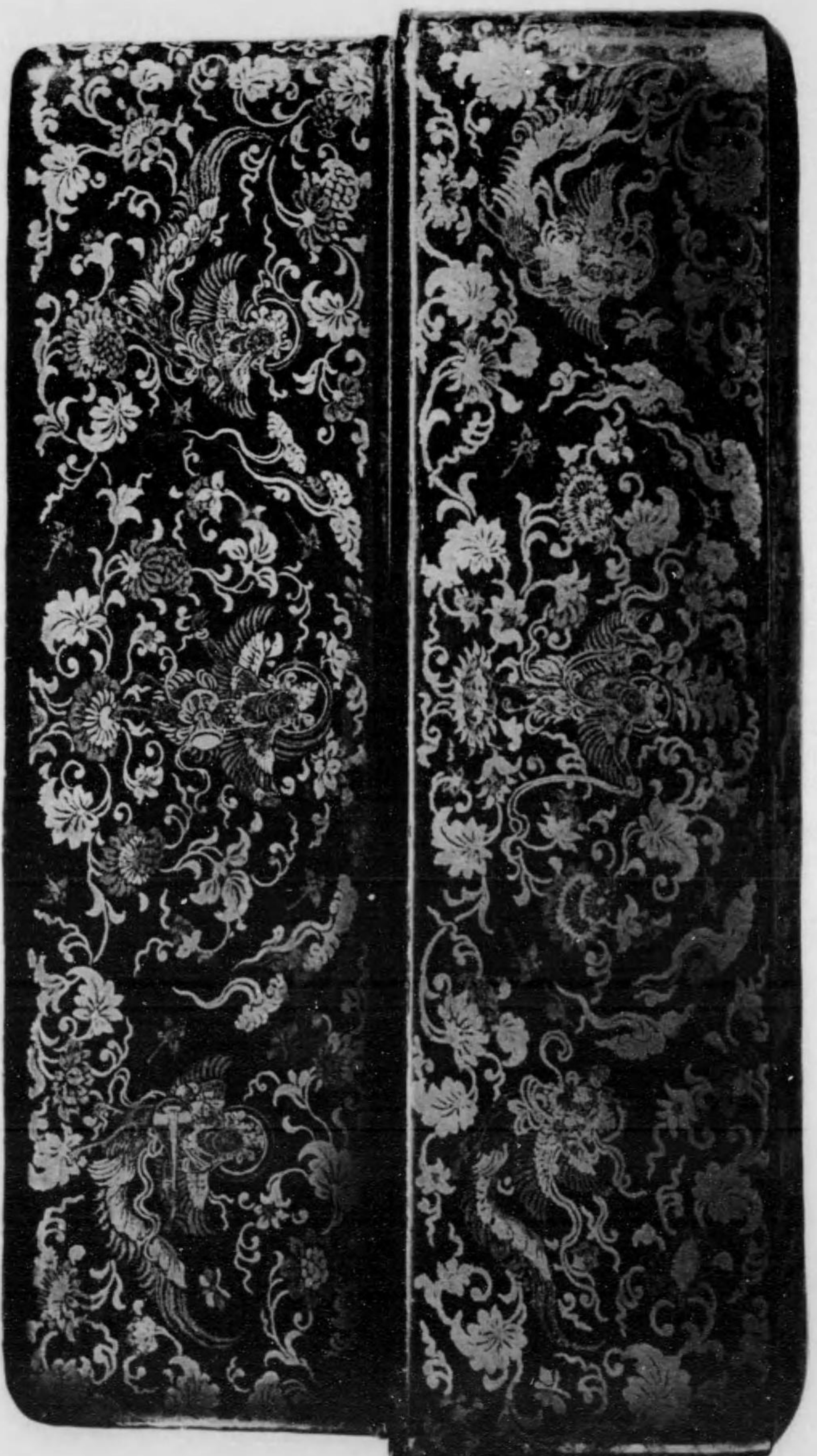
第十四圖の部分を實大に現はしたるものなり。



第三十四冊 寶國
 三十三帖冊子
 京都府 仁和寺 初藏

唐繪畫獨特の技工にして、其筆致に剛ひび、宋安時
 代に入りて其技藝、手法共に著しき變遷を假し、唐宋
 高僧代へて影響を著し、宋風の繁華なる當時、異國
 的な配合の趣を脱し、日本固有の趣味を顯はすに至れ
 り。
 こに拘る、三十三帖冊子は、弘法大師入唐の時來し
 たる善法三十三帖を稱めたる宮にして、延喜十六年(西
 暦九八八年)醍醐帝の命により時の右大臣崇徳が作し
 め、更ぞ結めて延喜御題しを後、仁和寺に傳はせ給
 れたるものにして最も由緒明確なる寶量の遺品な。
 本冊は如何にかぞせ遊の作りにして、唐畫の如く外
 面は濃墨に金銀の線彩を以て、寶相の中に蓮華如の
 成は秋姿成は舞ふの姿を描き、其他を凡て宋畫時代の
 所謂宋畫の如く、地は粗く線彩を以て、其間に金銀を
 置き、佛菩薩本阿彌陀菩薩海人摩訶波提菩薩等の名字
 を配入して、内題は墨色に著り、身の内面には所在作の跡
 書を施したり。其筆力の剛健自在なる捺筆の流麗なる體に
 題を從世に著りて、當代工藝美術の至寶たり。

三十三帖冊子 仁和寺藏



圖四十四 第三寶國
 管子册帖十三
 原和原仁 藏
 明初

右上面は部分を真大に示し右側は全面
 左上面は甲面にして左下面は背面を示す。

總高さ 三寸三分、身高さ 二寸九分、蓋高さ 三寸、
 長さ 一尺一寸五分、長身 一尺一寸、幅蓋 七寸
 三分、幅身 七寸

精工製所無定年正二



籠

燈

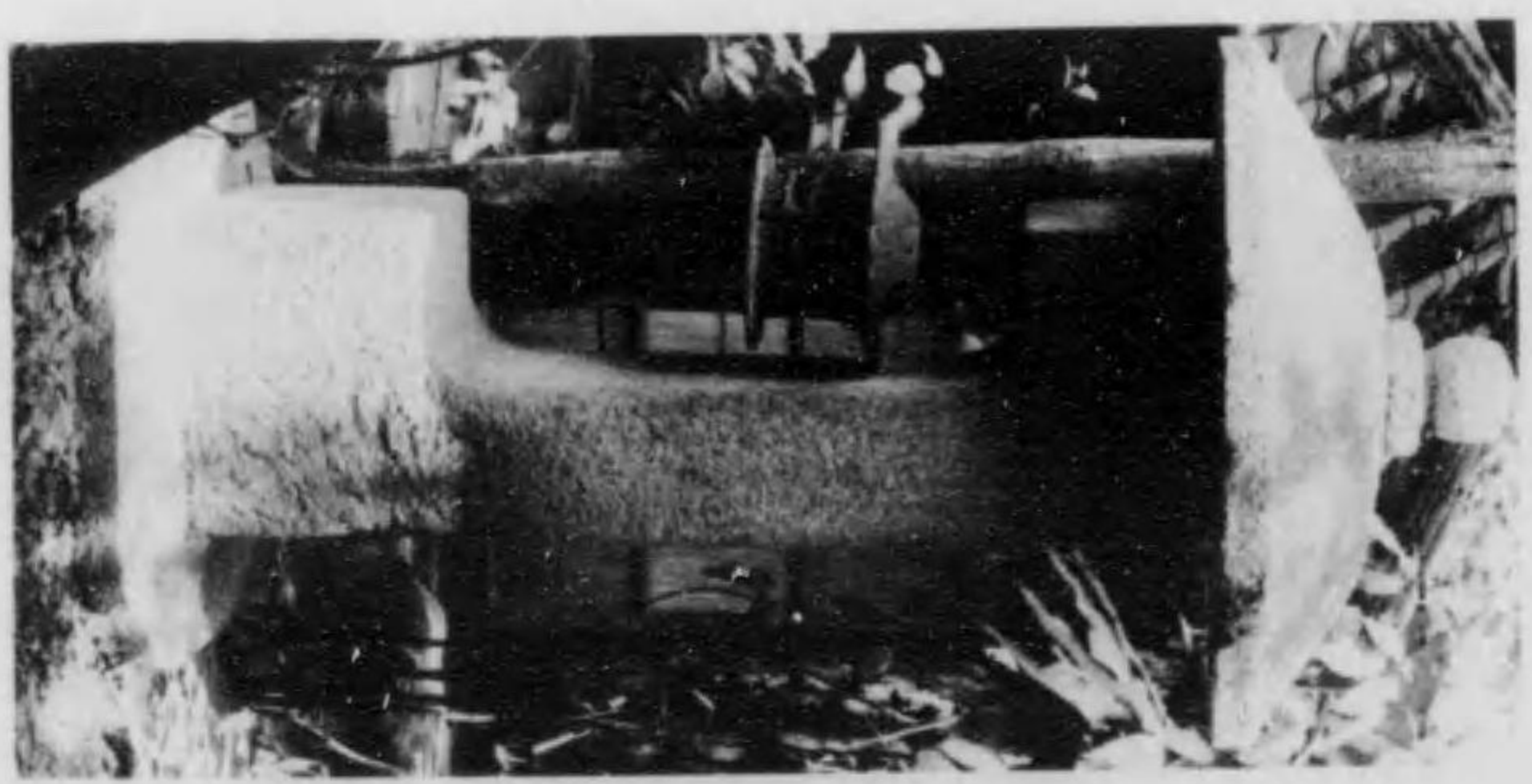
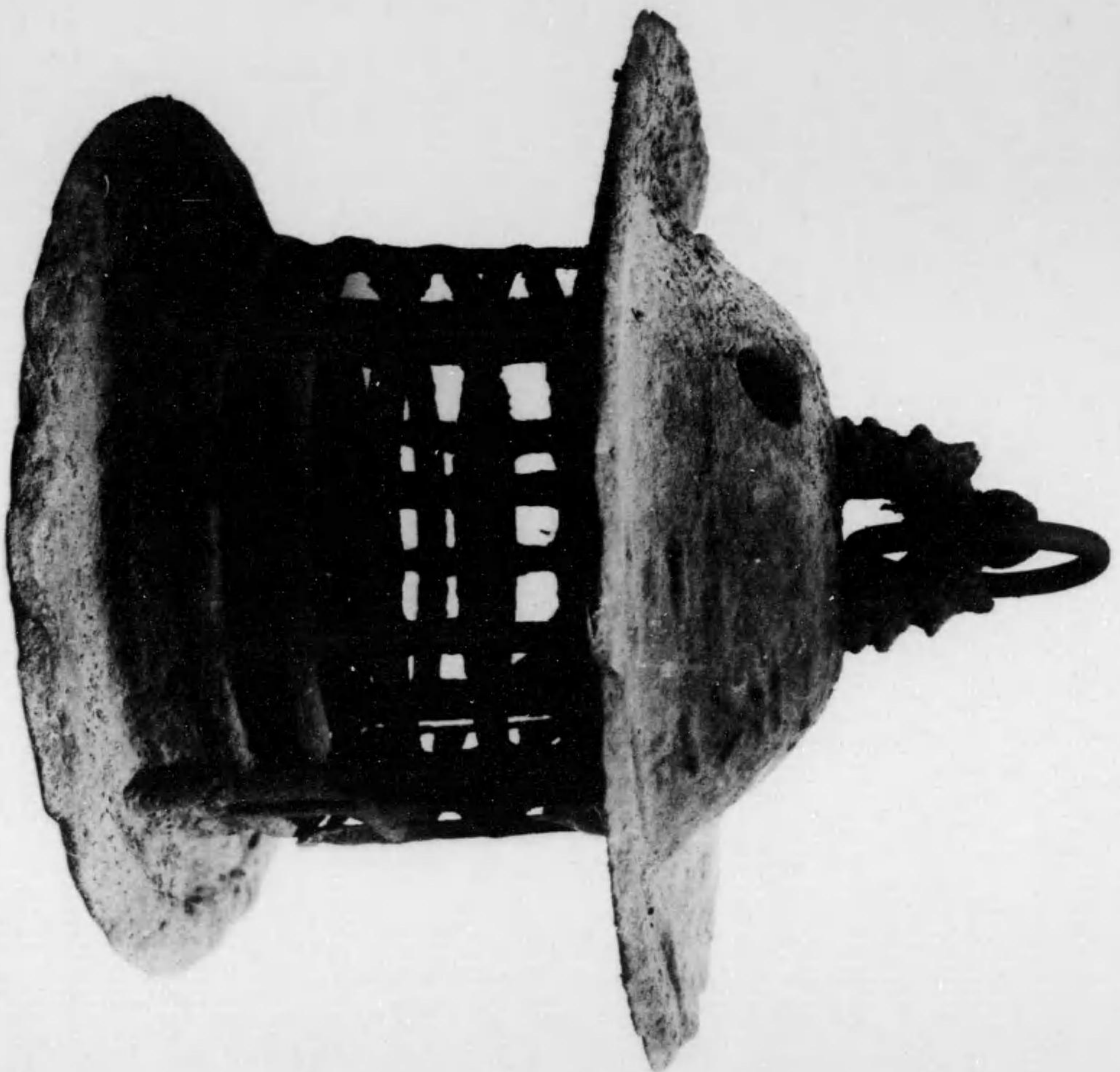
鐵

代時山桃
藏寺頭本派本寺藏

この籠は東京四谷漢學園中庭露園の露地において右圖
に示せる如く正に彫影の窓を頂ける石柱内に吊せるもの
にして、寶曆元年即ち天正十三年五月に鑄給あり。作者の
銘を詳にせずとも、其の酒殿なる構型、非凡なる技上は
當時有名な上人中、或は茶大工與三郎の手に成
りしもの與古也申へきものあり、この種鐵鑄物勿籠
中稀れに銘を存するものとして特に珍重す、又その作石
は當時のものなるや、或は後代に造りしものなるや不明な
れども、彼東北條院隆昌院の朝鮮石と稱する樹形の燈
籠或は同じく稱すべし異曲巧にして故は作石の頂上
窓石を載せず、又その約籠底縁まで全如何なる形取のも
のを用ひしか不明なるに、是は既に窓石を有し一種の風致
あり、殊に此の古鐵燈籠を存するは以て露園内の燈籠の古
き於處の參考と爲すべし

高さ 二尺一寸五分
窓 一尺五分

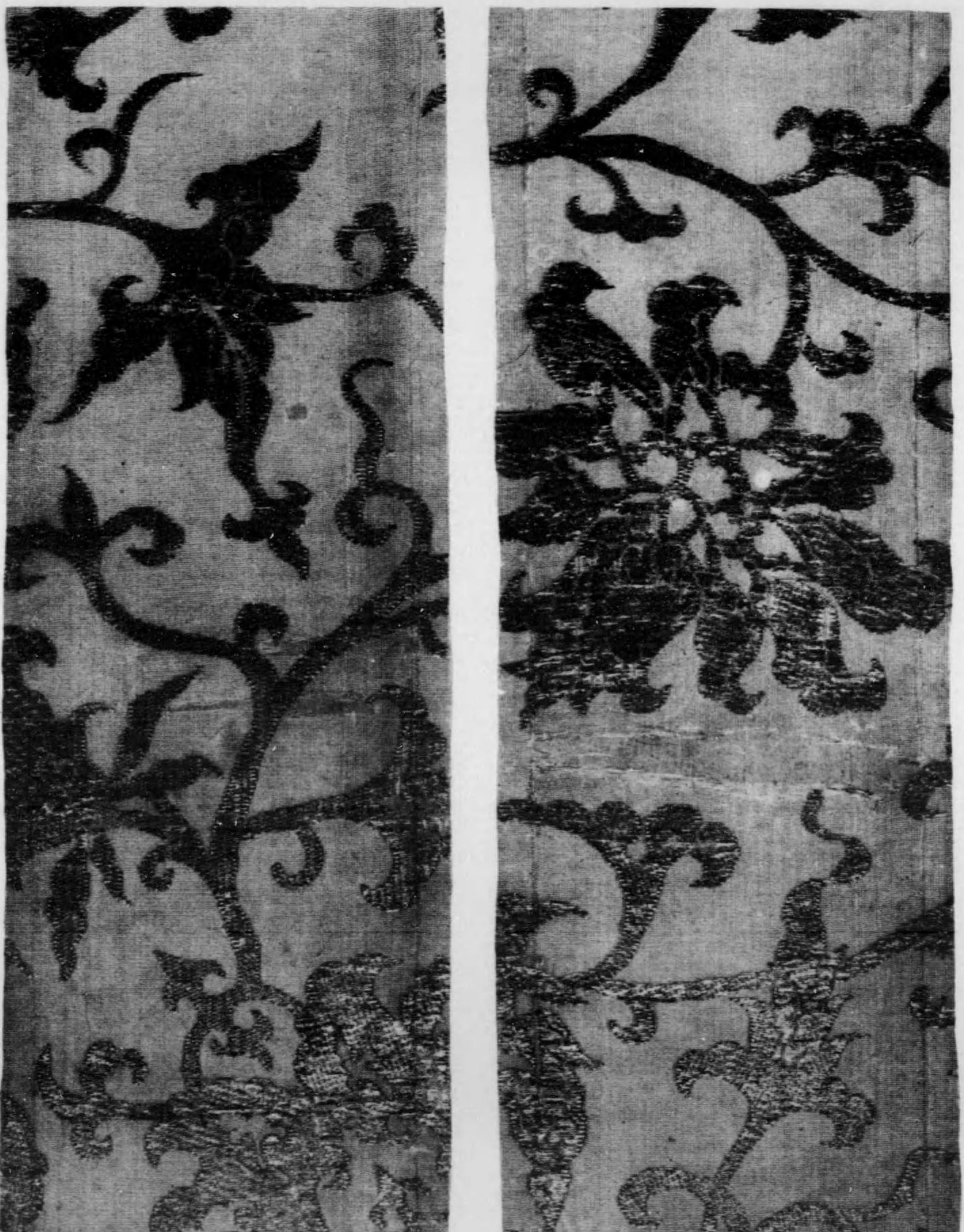
東京四谷第二條漢學園露園中庭



第六十四号
 金 紗
 京都 大 南 北 朝 時 代
 京 都 大 南 北 朝 時 代 寺 院

本圖は大徳寺附山大徳園四解二八一—三三六号所
 用の袈裟の一部にして破損を助けたが、桐の板に貼付け
 保存せる同寺貴重の什寶なり。即ち紗と稱し、生地は紗
 に金箔を以て唐花文を織ひたるものなり。日本にては
 竹屋町と稱するものと同手法なるが、本品は恐らく支那
 産来のものなるべく、文様實質何れ結構の美を極め、さ
 すがに高僧所用の品たるを感へば餘あり。

絹織物部 二部 京大南大徳園四解二八一—三三六号



第七十四号
 織: 穀文丸鶴
 代時朝道大府都京
 藏寺道南北南

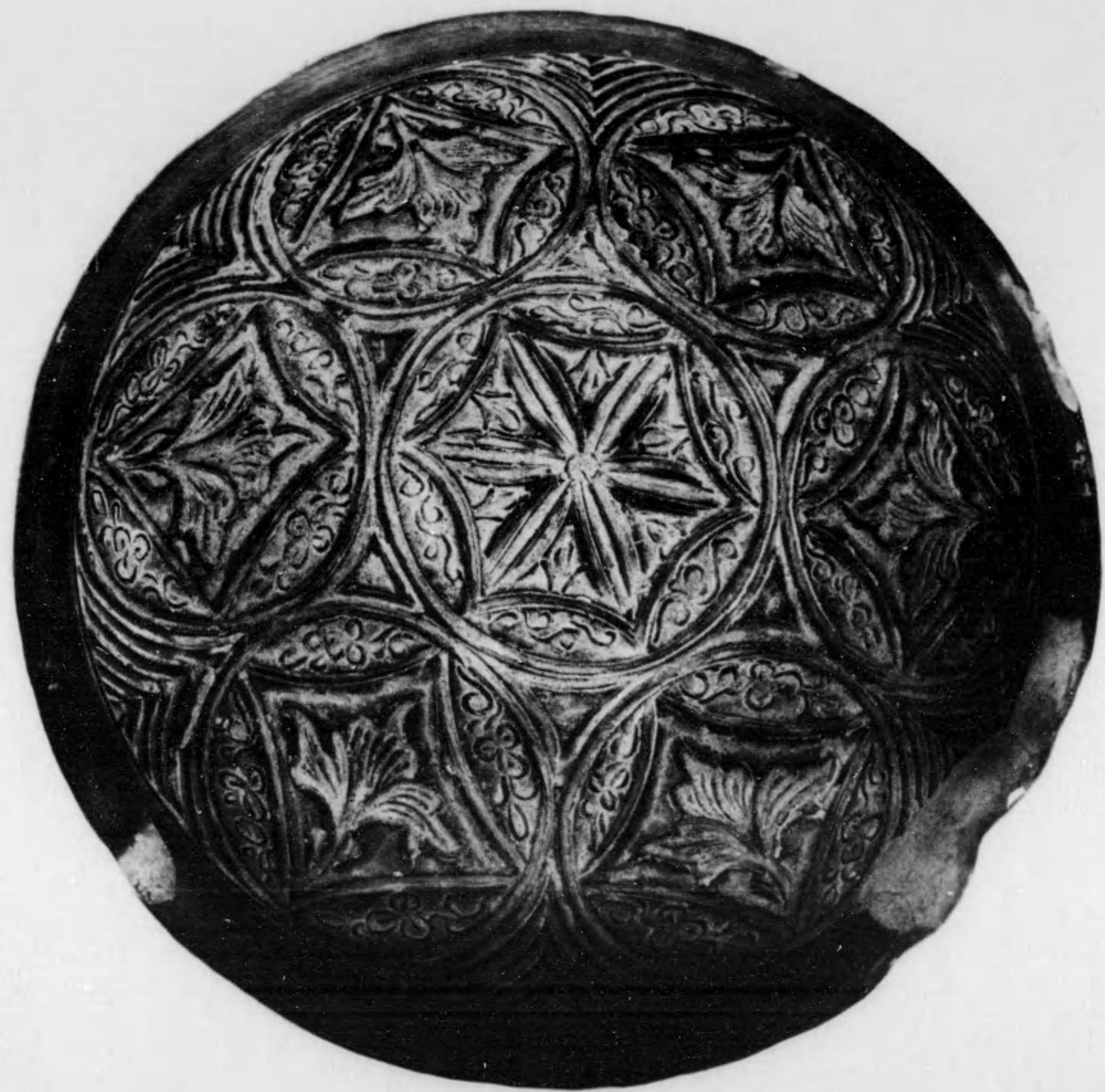
本品は石文香の穀物織に當り、當時既に珍重されしを證するものにして、製作年代は蓋し大徳園師に推定さる、全體黄白色にして松鶴の丸を中心とし、周邊に少く餘地を置き、地は紫の裏白で充ち、斯る文様の様式は古き織物には類例を免る所にして、平安朝の厚紙に存するものあり。本品の如きもの織物で作られしに非ざる歟、夫の文様の遠祖應に非ざるに非ざるに非ざる所多し。本品は粗織上より字織となしたるが、近世の穀織は皆織ならざるに、これは織を成れり、本茶製織は、浮織と称するもの三種ありしものか、古くは浮織なりしを近世浮織せざるに判りしが、里に角組織上の參考として尚た付離き資料たり。

大塚法橋大注文
 國師法衣 一帖 粟原紗 粟原浮織色
 慶長六年七月七日
 住山 宗花持

第五卷第三卷第三卷第三卷第三卷



1 2 3



第四十八号
支那古代彫土型

宋末元初時代
京都帝國大學文學部藏

模物の成形には捺り、轆轤、押型、鑄込の四法ありて、鑄込以外のものは上古より行はれたるに、押型のみは捺り、轆轤に比しあまりに注意されざるもの、如し。然れども型物には捺の面白味、薄肉の浮上げ、鑄込等の趣致を表はすもの多く、此の點に於て支那には捺形好みの考案技術の優秀なる製品多し。模物に用ふる型は材料により土型、木型、金屬型、石膏型、の四種類を普通とす。土型は素焼となして用ふるため之を素焼型と稱し、少しく氣孔を存し粘土板を之に當て、壓せば捺紋するに共に粘土の水分は型に吸收せられ型より離れ易きを以て、木型金屬型に優りて古くより使用せられたり。本品は支那の如何なる窯地より發見せられたるか明かならざれど、丸紋の七寶織き式の輪線中に精巧なる草花と唐草との彫紋を施し、而も彫離れに注意せる處少からず、尙ほ其型土は鉄分少なき細密なる粘土にして、相應に吸水性あり其紋様手法等より考ふるに、宋末乃至元初の素焼の母型と見るべく貴重なる遺品なり。

東京帝國大學文學部藏



第九十四号
磁州窑耳付花瓶

宋代
商周所
立陶磁器
試驗所藏

陶磁器は粘土製なるにより、成形加工極めて容易なるを以て、一般に彫刻の技術割合に早く進みしが、其繪模様に至りては繪具の火熱に耐ふる者を得る困難を、使用自由ならざるにより、其進歩遅延せる傾きあり。
本品も亦舊來繪高麗と呼ばれたるものにして、支那宋の世より河南省（現今直隸省）にて作られたるものなるが、黄灰色の素地上に薄く白掛の化粧を施し、原始的繪繪具によりて、胴に渦形の曲線三層に三個の横線を引き、其上に施軸して施上げし者にて、形態の濃たる中に鈎合を保ち、又細き横筋と太き渦線との筆致は、四個の平たき磁耳と光澤なき軸とにより、飾らざる中に精ある、素樸の風致を見得べく、質細粗の醜異相混じて軸上に現はれ、褐黑なる紋様と混じ、又腰部以下は軸を施さず、茶人の所謂尻持りの野趣を見せ、軸の垂下せる深痕は一種の風趣を現はせり。
磁州窯式の製法は、北支那滿洲より朝鮮に傳はりしものなるべきも、其産地の跡傳ふべきもの殆んどなし。
磁州は鉄を引く磁石を産するにより、此の名を生じたる者なるが、此地は又陶器を産し、之を磁州窯器と呼びしが、之により磁物の堅固なる瓷器を誤つて磁器と書し、今日一般に之を用ふすに至れり。

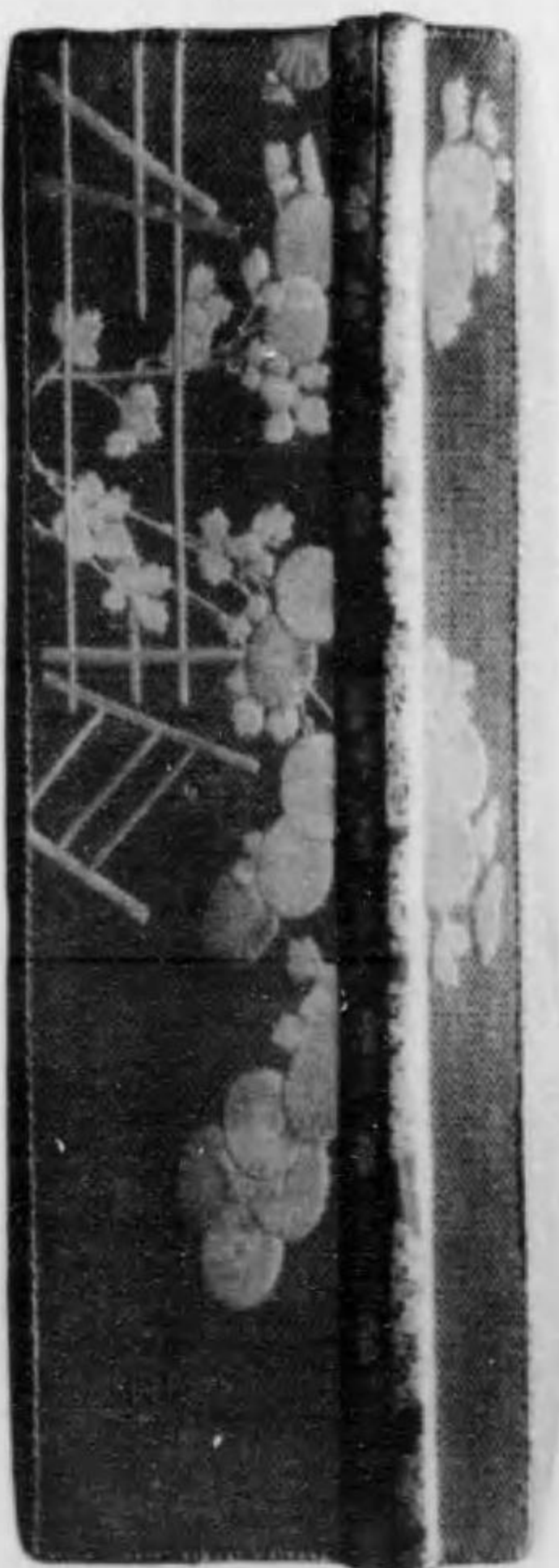
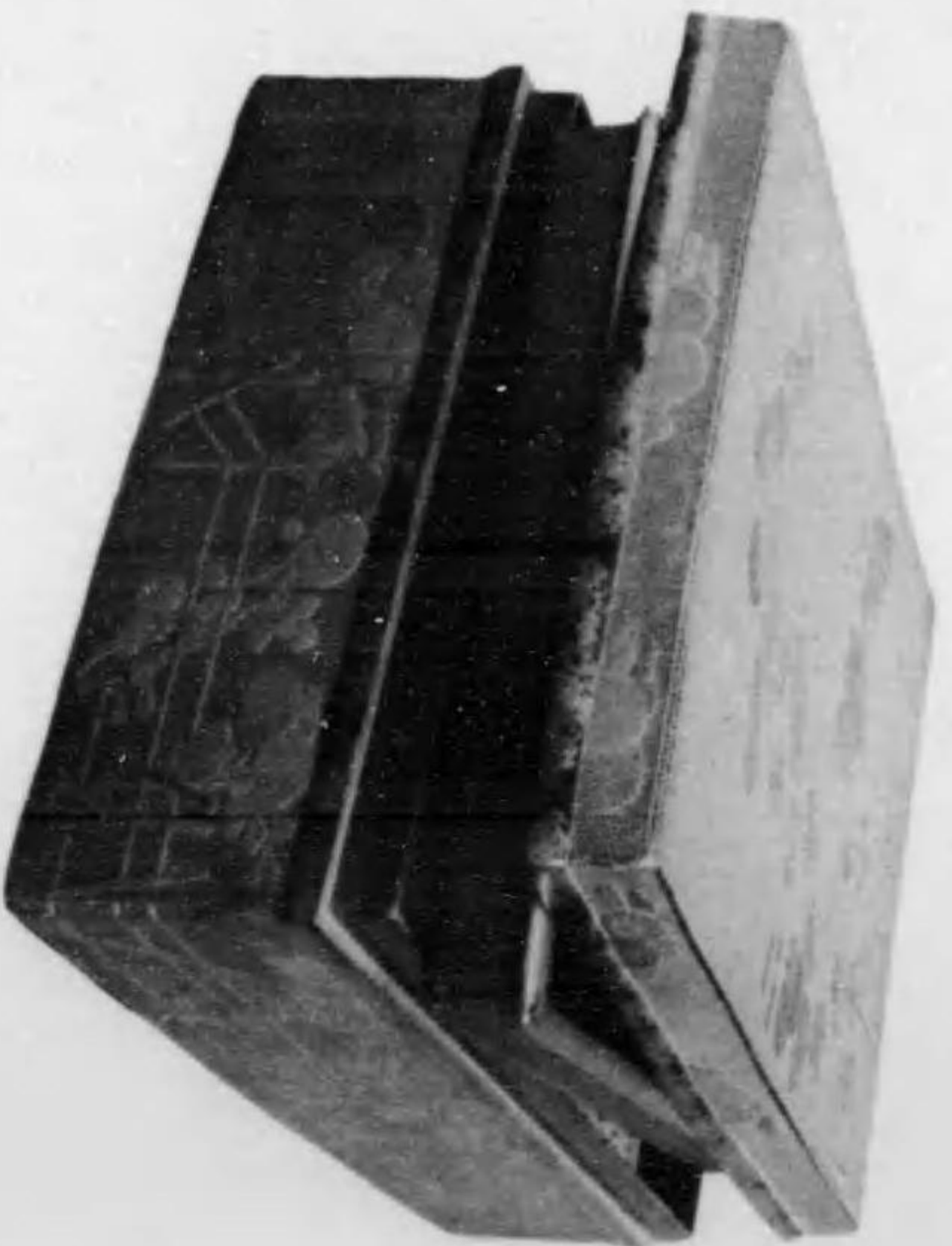
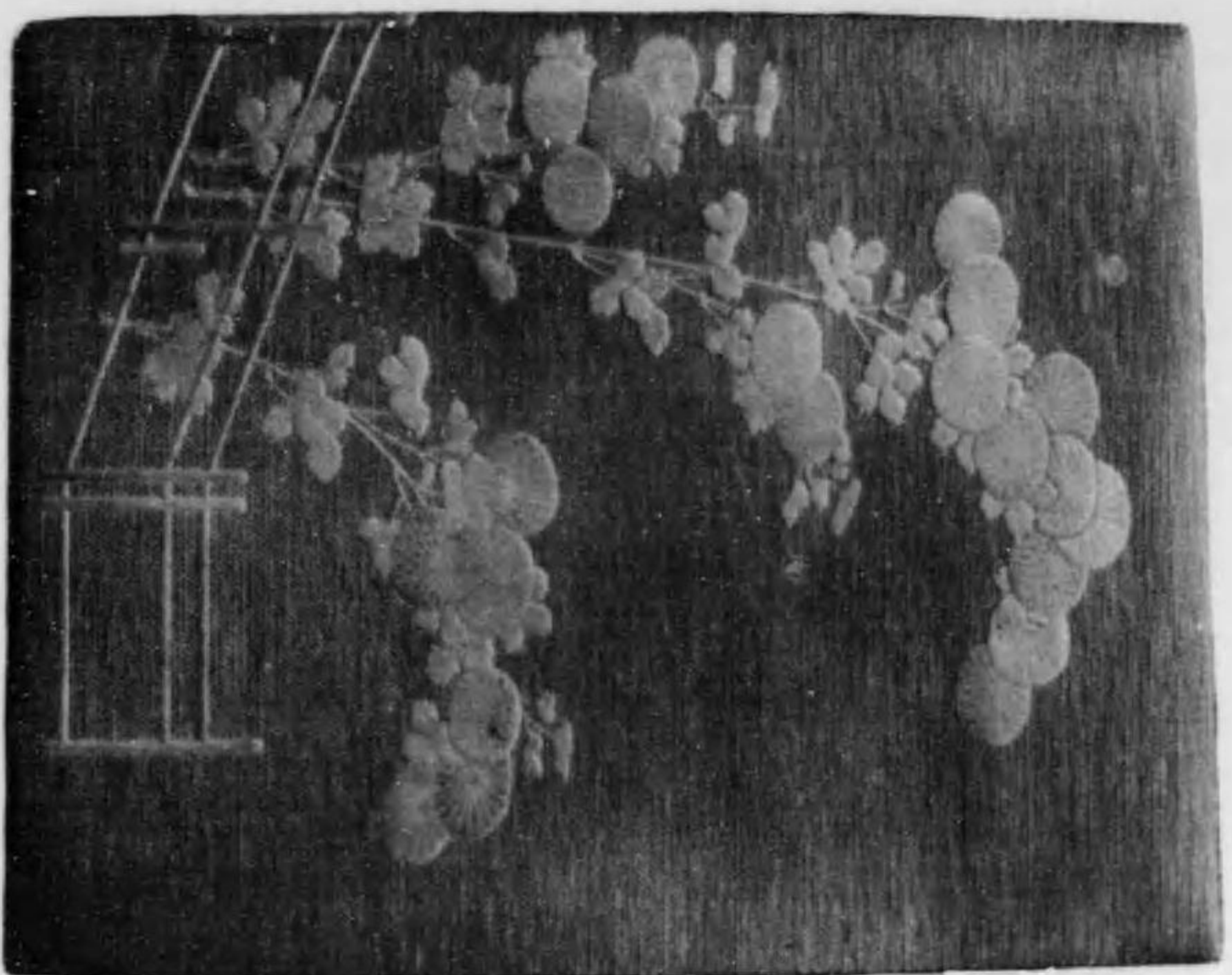
工部局建築部二部

第十卷 華 藤 菊 籠
 德 川 光 初 明 藏
 京 都 府 金 藏 寺 藏

本品は地に菊を貼付け、高華樹風に導きたるものにして、
 鬘字を折紙は鬘字の下まで貼られ印籠蓋となり、こ
 こに白は桐葉の経にして、葛原草を精妙に描り、
 右上面は文知對角線の一隅より左右に描き出される
 構圖には優り、この構法は慶長時代より起るもの
 にして、其有名なものに彼の出家大藏阿彌陀草庵
 繪手谷の圖あり、通察の香繪に見る如き筆重の感じを覺
 す。雖も全體をくわしたる所に多くの持長を有するもの
 なり。

總高さ 四寸六分五厘
 身高さ 三寸四分
 蓋高さ 一寸二分五厘
 長さ 一尺三寸六分五厘
 幅 一尺八分五厘
 鬘字深さ 一寸三分五厘

繪工 藤原 三郎 實 藏 師 工





第五十圖
華嚴緣起內宮
德川初期
京都府高山寺藏

本品は彼の有名なる國寶華嚴緣起を納めたる宮にして、構造は臺指たいさしの式に成り身は二段重ねにして、打覆せ蓋は臺に乗る様に作られ、身は二段共に側面に抉り入れて卷軸を取り出すに便し、臺柱には紐通しの穴に角形の鳴なり目を施したり其意匠精巧にして、圖の如く藤の棚を甲面（五十二圖）に描き、其几帳面は筒形を描きて竹に擬したる如き頗る巧妙と言ふべく、其の花房を各側面に垂下せしめたるが、手法また極金と青金を以て壽き、棚の竹には所々切金を施したり其内面は梨子地にして小口を沃懸地となす全體技巧周到にして圖案亦高尚なるもの斯藝參考の資料として推賞するものなり。

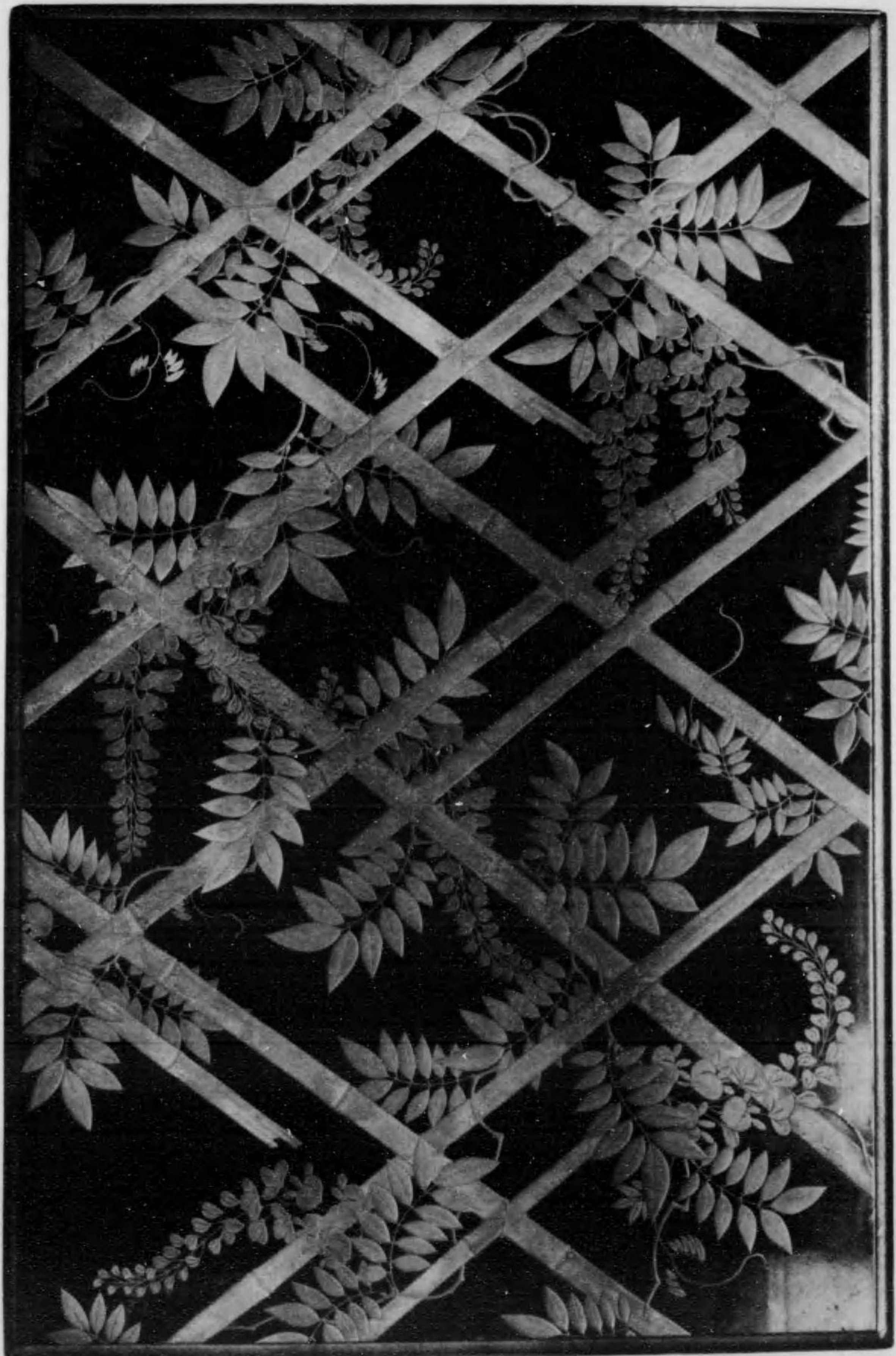
總高 六寸七分
長 一尺二寸三分
幅 八寸一分

工藝美術會社 第二卷 第六號

圖二十五
華嚴緣起內宮
德川初明
高杉宗久

本圖は五十二圖の甲面を写す。

華嚴緣起内宮



第三十五号 漢 緑 陶 和 代 印 象 氏 藏
漢 陶 緑 和 代 印 象 氏 藏

本品は銅器の形状を模したる筒形にして、接吻の三足と、繡花の遊環限耳とを有し、蓋は鏡縁の紋様を寫し、周縁の多瓣には銀樹紋を、水には麻草を配し、中區に蓮瓣を周らし内區は紐を中心として四葉を配し、其上に細ある古銅器に見る如き緑釉を施したるものなるが、水く土中に埋没せる爲め釉は銀白のラスタリを放ち蒼白燦然たる古色と壯重沈雅の形紋は大いに好奇と愛稱を覺えしむるものなり。

漢陶には本品に現はる、如きラスタリを見る事多し、このラスタリは其當時行はれたる騎火陶器の一種、斜断面に見るべき含鉛釉が水年土中し爲に釉薬一部分を還元をなし、鉛の薄層が銀色の光

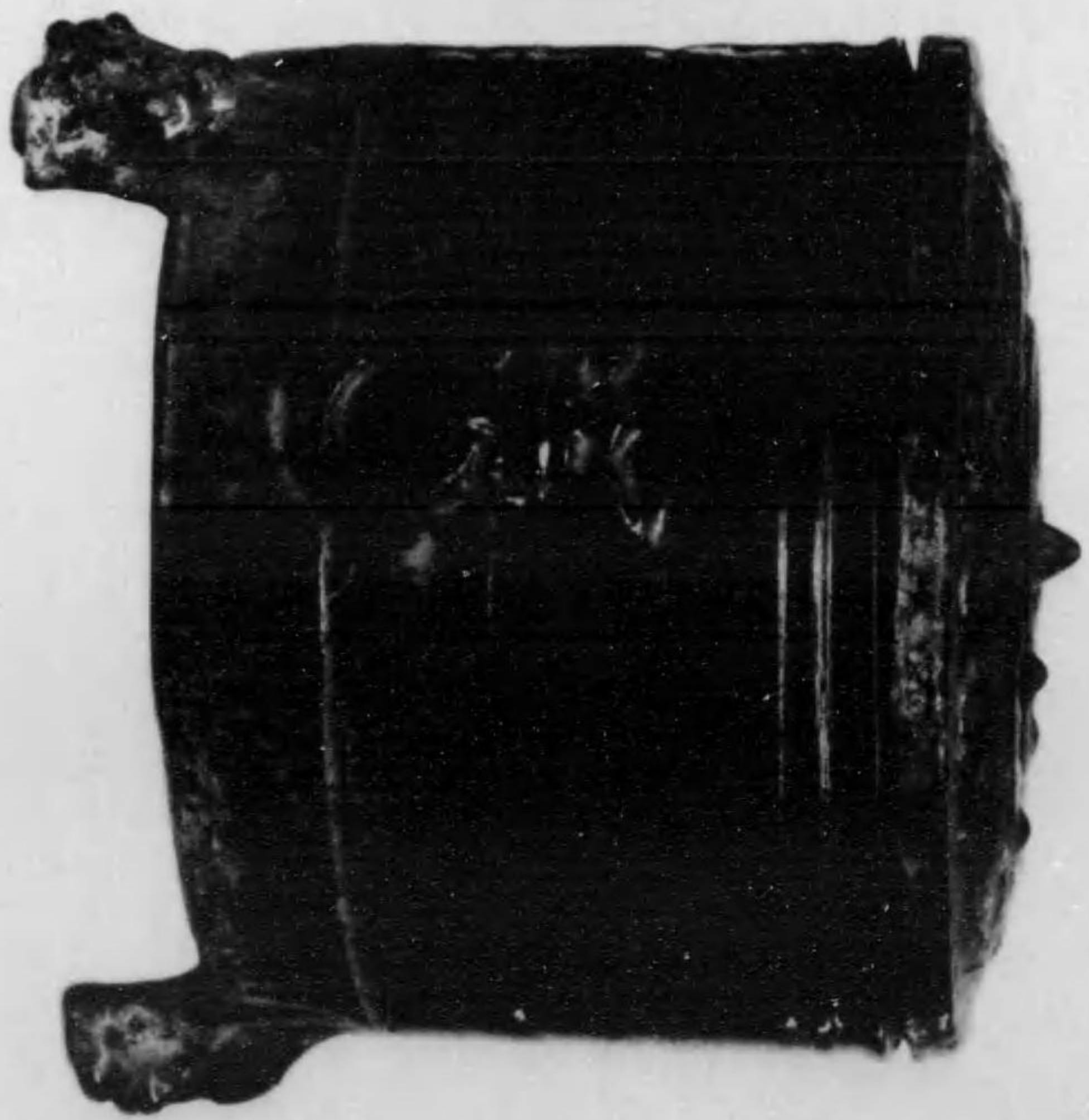
彩を放つものにして、圖に白く見ゆる處即ちラス

タリの爲なり。

由來漢唐時代の古陶器には含銅の綠色釉を多く見らる、之古銅の綠色と同一の美色を出すを以て愛好されしと、銅の化合物は含鉛釉に加ふるも其熔融度を昇すこと妙きに依る爲と思考する、星宿御子尚斯くの如く完好にして形製を止むるもの又稀にして最も尊重すべきものなり。

高さ 五寸六分
直径 六寸六分
周囲 二尺二分

綠外蓋第三十五号漢陶緑和代印象氏藏



第四十五卷
手引隠釘
期初川徳
藏寺開院 京都京 藏寺中野 山田大

幾内は鎌を以て、涼りし三輪も、留古建築の存する影が
 らず、園子其建築裝飾に關する遺品も多くして、從來世
 間に知られたる地、比較的近世の小品に到りては別體
 貴冑の眼を惹きつけるもの、本圖に掲ぐるもの、其類にして
 上の三圖は大阪府河内郡植生村中の木子野中亭、香風の長
 押に打つ所の障子物の中にして、右に上は右に寫真中、是は
 樞の裏に細寫「年を配したる名巧匠の圖、左は、この瓜
 の圖なりしが、兼て其の瓜の實の種ははりたるを、能に打
 ちしま、或したるは、其心して見られたり、この
 金物は、元建永三、其に安永十年、(開禧 一六七〇)足下大和郡田
 澤氏の寄進にかゝるものにして、ここに意匠の巧妙なるもの
 なり。下圖は、龍洞三藏書院の役員細の小機に用ふるもの
 にして、袴袴の圓の裏は、並に前蓋の七寶を入れたるもの
 にして、衣な多頭、圓の角子地は、銀にして、其他は、鑲て
 鍍金なり、又左端の七寶機のもの、は、東書院、終戸機に屬
 せるものにして、其は、初期の製作にかゝる、この種小
 品中特に、構想、趣、あつた、何れも、實大に、撮影したるもの
 なり。

續六卷末二、龍洞三藏書院、東書院、終戸機、工





第五十五圖
木造扁額

藤原時代
兵庫縣 鷺林寺藏

我が國古來、寺院宮殿等に題額を掲ぐる風あるは漢土の風を傳へたるならんも、全體の様式は却て朝鮮の古様を傳へたるものにして、其周邊を華狀に刻するを常とし、其最も古きものは、法隆寺東院の伽藍の扁額を始の所傳影なからず。本圖掲ぐる所は傳鳥羽天皇の宸筆にして、縁に三面寶珠と細長なる双馬頭を刻し、下部には三結杵を配したる圖様にして、古くは彩色を施したるものなりしも今は存せず、我が國中古の扁額裝飾の様式と額字の筆法を窺すべき一種のもの云ふべし。

長 二尺五寸
幅 一尺五寸五分

工部省美術調査部 第二部 第六圖

第六十五卷
 京都 醍醐寺 室町時代
 七條袷黃山遠雜裁

本品は袷の部を撮影したるものなり、袷地は黄纒又は大織と稱し朝鮮製織物の一種にして我が國に渡來したるは鎌倉・室町時代より特に室町時代に多し之を見本品も又この時代に渡來するもの之推知する、其袷は黄纒を連續せしむる形に同様に、其相又する處に八幅の小花を置き、其影の空面は大輪の輪花を一枝の變之を交互に配したるは、其構造圖に於て而も顯然たる感あり其組織は細き經糸を太き本脚糸を以て組織なし、文様を教團の意采にして構圖したるは、文様構圖の嚴整たるに反し、組織は空連組織の氣品を相調和して以て一種の風格を表はせり袷地の袷は俗に遠山割と稱し、遠山糸を以て之を織付たるも、及び機上に於て織出したるものとなり、本品は明治初年東京・葛西郡の色絹を種々に雜然と配置し、之を太糸に割り、以て自然に峰疊重疊して遠山割引に相似たる袷を裁すが故に此名を稱したるならん。袷は本來其製法を稱し、始の釋尊汚穢の袷を洗ひ清め縫合せて作らせしと稱すと、後世則ち華美なるものを用ひて、一種の袷を其々に云ふなり、古來高級名物の織物本條等に於て遠山袷系用のものを見、本品も亦該寺高僧所用のもの考ふて、今其所傳なき信も

第六十五卷 二番 室町時代 黄纒 七條袷



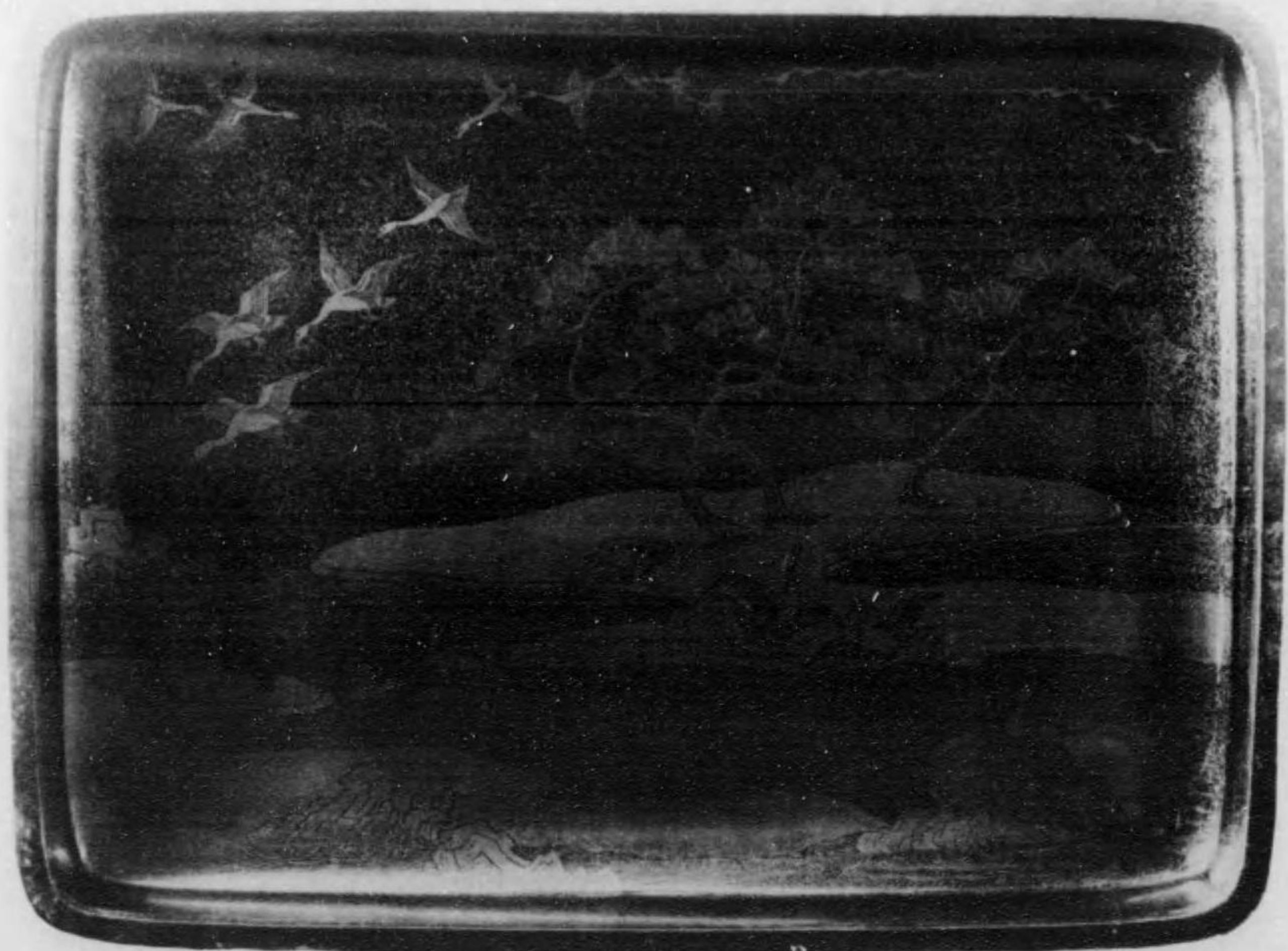


第七十五第
紗 刺 見 送

代時初明—末元
藏山者行府都京

本圖は祇園會山鉾の一にして山鉾裝飾の織物中の白絹と稱せられ類品又稀なるものなり。
長さ七尺四寸、幅四尺九寸五分、生地は紗を用ひたるが其技巧の驚くべきは全體赤色を以て紗の目を刺し詰め、更に五彩の絲を以て蛟龍昇天の様を刺し現はし其餘地には彩雲飛龍を、下部には奇巖屹立し碧海に珊瑚寶珠の浮ぶを現はし、龍の部分要所には小刺繻を施し、以て一層男壯の感を深からしむ、其構想の豪壯にして精緻なる手法努力の跡全面に溢る。
縁に用ひしは赤地金襴にして、安樂巻織の人影手と稱し、文様の間に唐児の花を持てるを見る、蓋し好機家の垂涎する能はざるものなり。この見送りには寶曆七年（西一七五七年）刊行の祇園御堂會細記に「見送り大唐の旗類を二つあはせたる也、つぎ合ひはさぬ道田なり。左右、唐をりもようは登り龍日輪をさし上ぐる圖此の日の丸の中に万の字有極は織物地帯に水さんごじゆ水晶等のもよう縁左右も赤地金襴安樂巻切小人形蓮華を渡る」云々記されたり。
或は元この雲の上に日輪ありしを修理の際切縮めたるものならむ。製作年代大唐は當らず元末—明初の作と稱すべきものなるべし。

工織藝圖會二部知大



圖八十五第
 一其 宮手繪蒔禽水樹梅繪手葦 寶國
 代時倉鎌
 藏社神島三 縣同靜

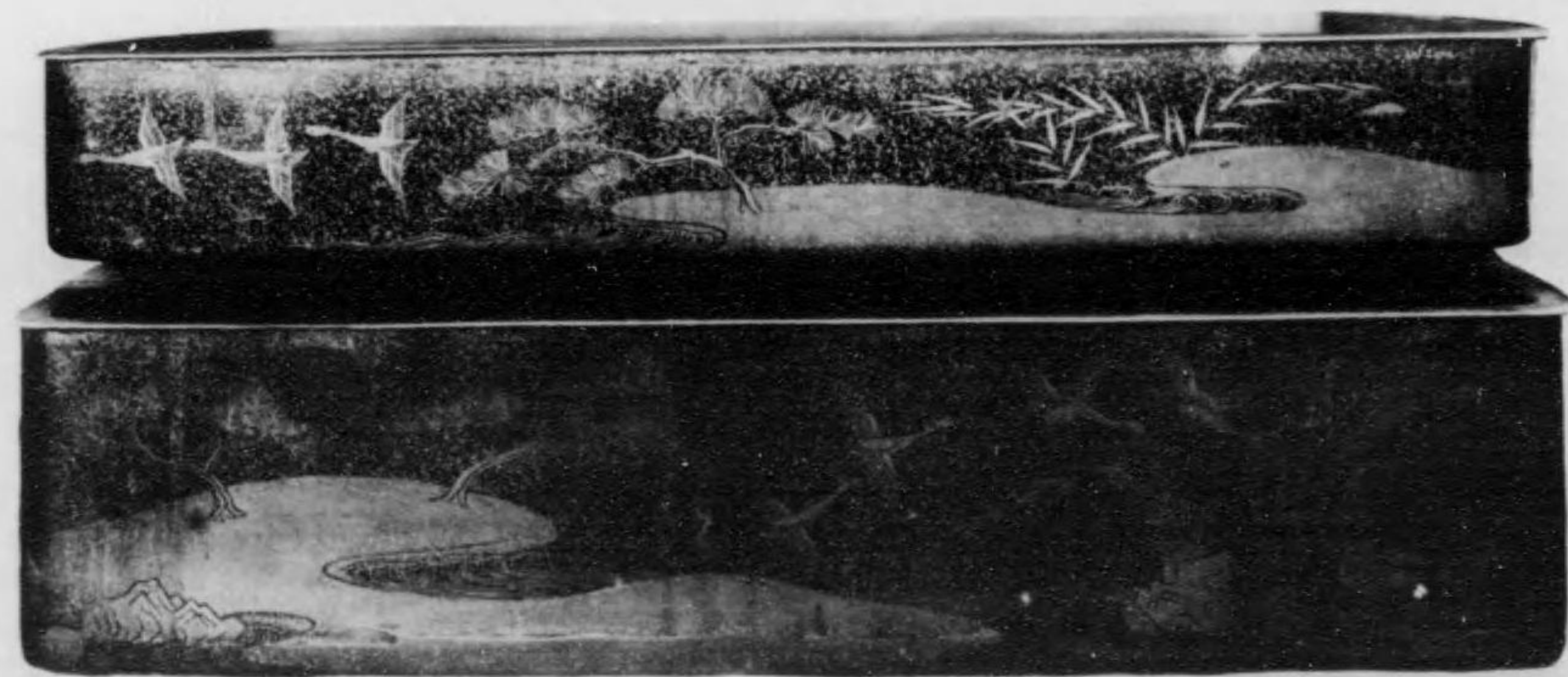
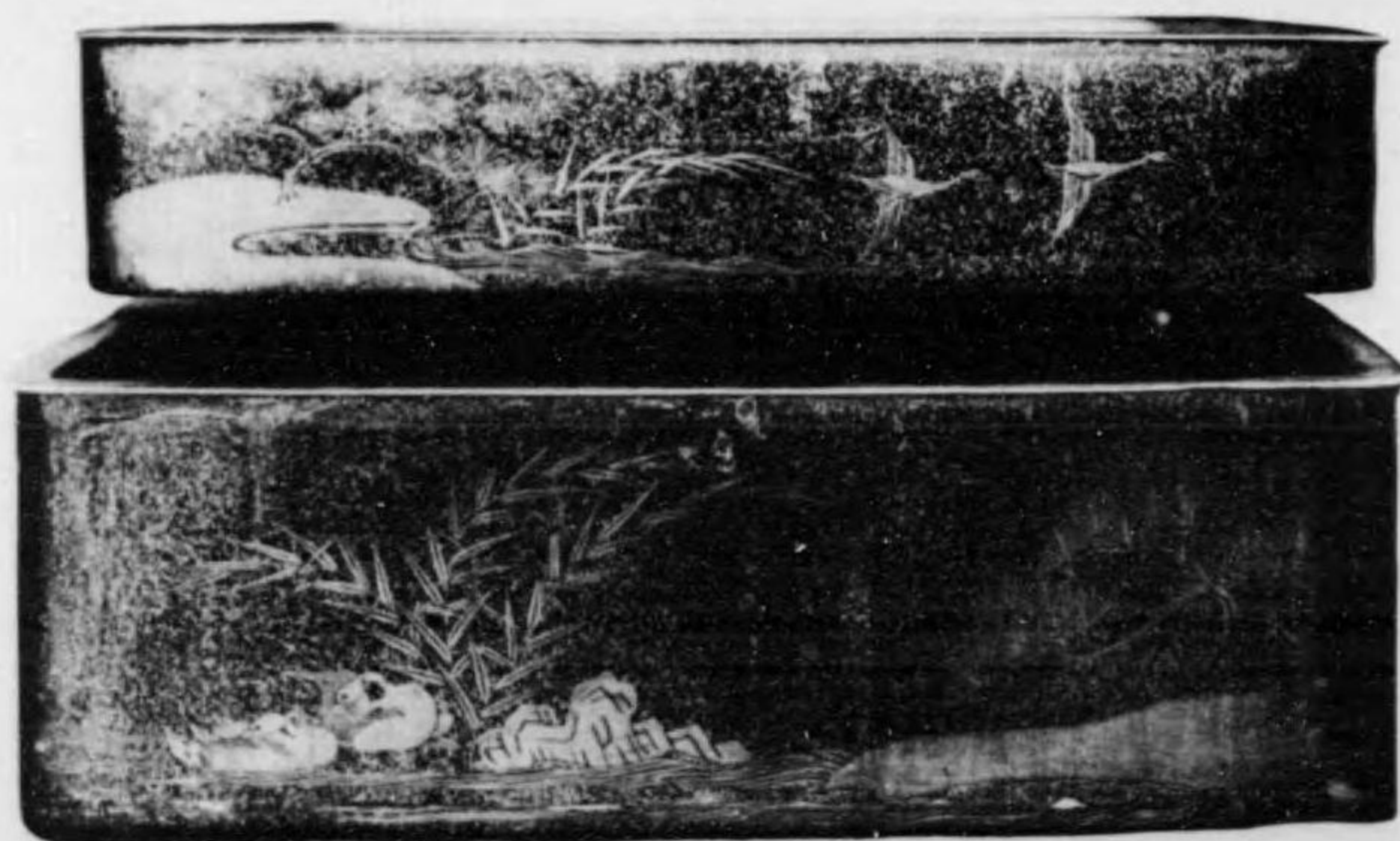
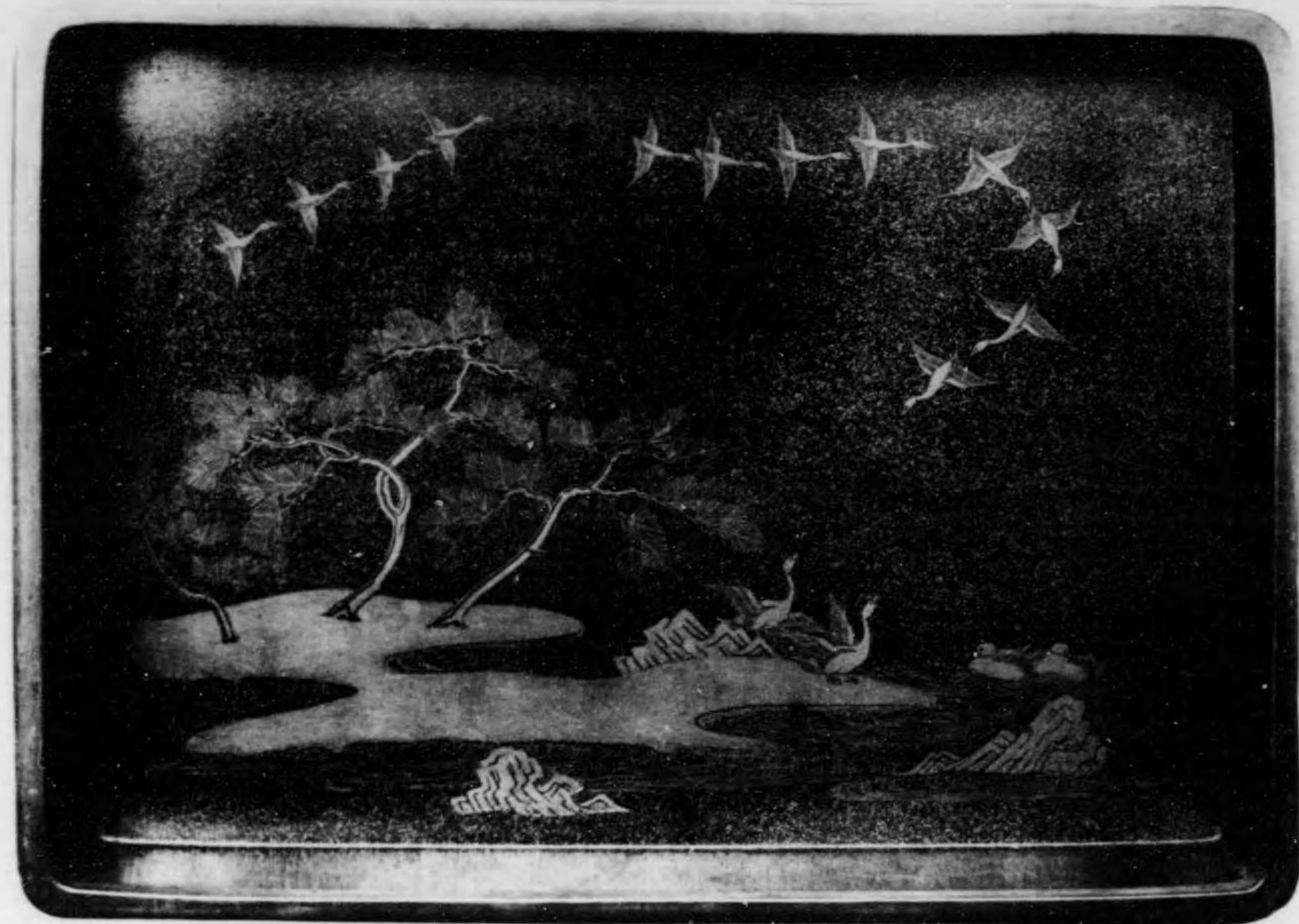
伊豆の國三島町所在、官幣大社三島神社藏、傳平政子齋附と稱する手葦にして世に有名なるものなり。全體沃懸地に八重一重の梅樹及波に水禽を配したる蒔繪を施し、其の構造は例に依りて、制張り形に湯の置口を施し、懸子は常三異りて二重に組入れたるは頗る古儀を存せり、身の内面は古くは箱の折立などありしならむも今は見る所なし。世間手葦の尤品を傳ふるもの一二に止らずも、本品の如く内容を完備せるのみならず、他に例を見ざるものを備ふ如きは稀にして、頗る貴重すべきものなり。

殊に手葦表面の樹木、水禽は稍肉を持たしたる蒔繪にして、當時既に高蒔繪の胚胎する所最も注意すべきものならん。此れを同時に作りて奉納せられしと見るべき、鎌倉八幡宮の沃懸地螺鈿菊文の觀音の、優美なるのみなるに比して圖様の變化一段なるを覺ゆ。

上圖葦の甲面には所々に金具を以て葦手を描き、梅樹の傍に杉木形の几帳を立てたるは、葦手の模様の曾侍錦帳云々の句意なるべく、明彦若くは古人の蒔の意を探りしものならむも、其本據今俄に知る能はず、ここに梅花の畫風は、當時の鏡春に多く見る所の梅花の圖に髮髻たるものありて、時代の特徴を知るに足るべし。其の一重の梅花には、銀金具を施したるも今剥落して其の痕跡のみを存す。

下圖葦の内面は陳地に洲濱、松と水禽を配したるものにして、内外の水禽の繪は葦手葦の雁行の字句より來りたるものなるべく、普通は鶴鷺等を描くに、是は雁を以てせるは頗る珍すべし。總高さ六寸三分、身高さ四寸九分、葦高一寸四分長さ一尺一寸四分、長さ一尺一寸二分、幅八寸一分。

町六第廿二番東京製蒔繪工



第九十五号
 二其 宮手繪蒔禽水樹梅繪手葦 寶園
 代 時 倉 錄
 藏 社 神 島 三 縣 四 靜

上圖は第一の懸子の見込にして、洲濱に松を描き先導の雁の降り居るに配して、連飛せる雁を描ける葦裏の圖と對比して、圖様の變化を見るべし、下圖は第一の懸子の側面を示したるものにして、狭長なる場面に適應せしめん爲に、芦を配したるは其の巧致なるを見る。

精工製蒔繪三島神社藏

三 其 宮 手 繪 時 禽 水 樹 梅 繪 手 基 實 圖
 代 社 神 島 三 縣 同 縣

上圖は手宮附屬中の一部にして何れも實大に示し、右は
 鑲嵌地に梅枝を写映色繪になしたる兼服のものにて、或
 は鑲嵌する用か、或は紐革などなむも、其の用途を
 知らず、袖を半管狀に作りたるは白綾などを採ためなら
 ぬ。其の本は革にして鑲嵌を嵌ぐに用ひ、本は鍍及鍍子に
 して、共に鑲嵌に色繪あり、左上の首出細網の領に梅枝
 を貼したるものにして、世間類品を傳へずれば其用途を知
 らずと雖も、或は結むすの如く用ひたるものたるんか。
 衣は鑲嵌軸の兩端に、色々の模様を重ぬりたるを巻
 きたる年にして、後世小上威等二節子の性質を有す。右下
 は鑲嵌の小笥にして、其側面甲面を示す甲は格の扇
 形にして、甲背の透しは熱田神宮御買の扇意と扇式に
 して、地盤には色繪たる松山に目を別し、其物に三本
 の紋を配たるは、或は張繪ならむと思はるなり。この
 意趣他の小笥を全く異りて、恐らくは手宮以外のもの
 を挿入して全仕合せのものならん。其三本條は鎌倉時代に
 於て有名なり、名越氏の家紋を配せるならん左圖は
 手宮中の櫛子の細網文と側面とを示したるものにて、
 其の首には栴首しんすいと、豊曆時代多く行はれし、鑲嵌の櫛首様
 式を穿するに在る。

種六第年三二第圖實大實大實大工

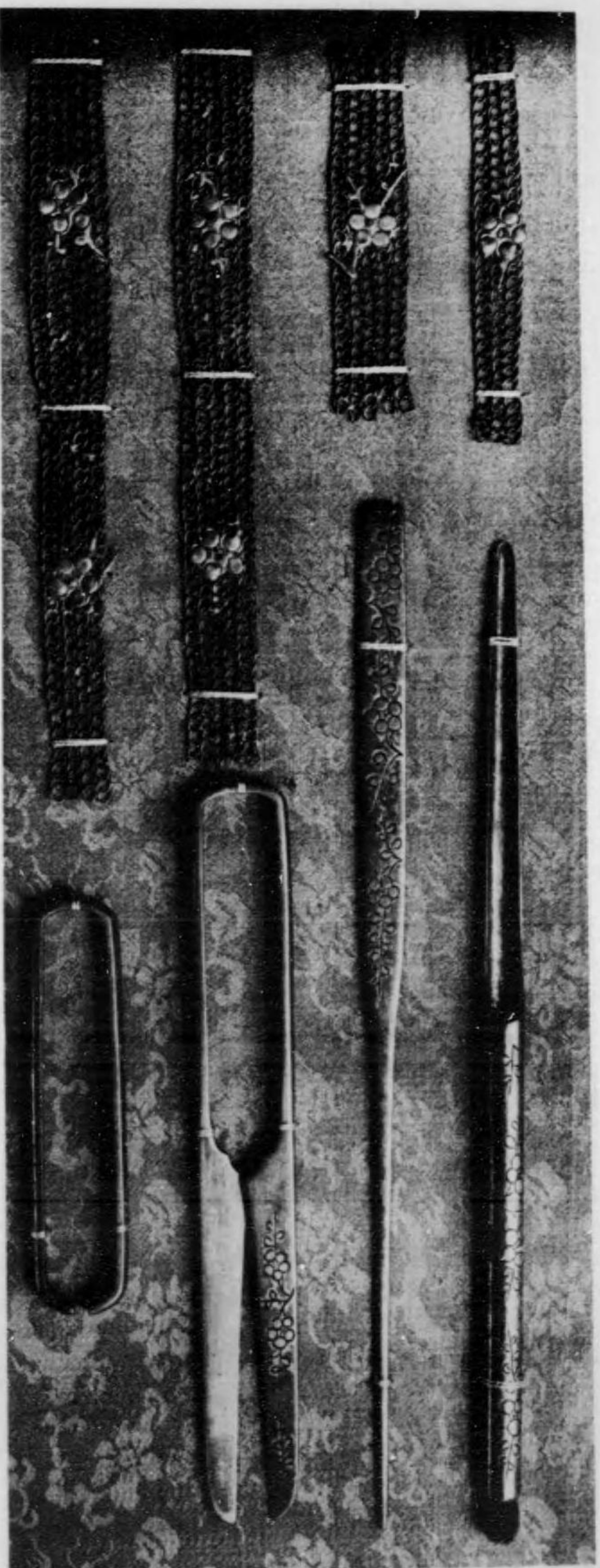




圖 一 十 六 第
爐 山 博 銅 青
 代 時 郡 浪 樂 漢
 藏 館 物 博 府 督 總 鮮 朝

本品は漢代銅器の特色を備ふる青銅にて作れる博山爐にして、其の構想に於て甚だ見るべきものあり。即ち徑六寸八分五厘の淺き盤の中央に踞せる龜あり、甲上に翼を擡げて將に飛翔せんとする鳥を置き、此の鳥の頸部にて爐を受くる處の意匠秀抜なるもの云ふべし。

本品は大正五年秋、北鮮平壤附近なる石巖里の第九號古墳（樂浪時代）より見出せしもの、當代支那の作品の此地に將來せられて埋葬せしものと解すべく、同時代に於ける金工技藝の進歩の跡を見るべき貴重なる資料たり。

總高さ六寸九分。

朝七第年二第五夏新製備工



四 二 十 六 第

鏡 神 四 龍 盤

代 時 郡 浪 樂 漢

藏 館 物 博 府 督 總 鮮 朝

本四神鏡は大正五年十月、關野工學博士一行の發掘調査せられたる、平安兩道大同郡大田江而貞柏里の流樂浪郡の古墳より出土したる遺品なり。徑七寸八分、縁厚三分ある平鏡細線式の四靈三端鏡の類なるも、本鏡にありては、内區の主圓様の一として、内側に厚肉の手法より成る二双の龍虎、(支那人の所謂は龍)を表はせるは甚だ特異なる點にして、外區また通有の流雲紋に代ゆるに一種の葉狀華紋を以てする所、他に多く類例を見ざるものなり、其の四靈三端にありても一々の圓形整齊にして、空間を飾るに鳥紋、渦紋等あり、圖式中最も完備の域に達したり。而して是等の何れもが彫鑿の銳利なるは、實の白銅と相俟つて漢時代に於ける此の種鑄造の發達を立證する重要な遺品と云ふ可し。尙銘帶なる銘は全文次の如く、また漢代の體をなす。

青蓋作竟大母傷、巧工刺之成文章、左龍右虎辟不祥、
朱鳥玄武順陰陽、子孫備具居中央、長保二親口富昌、
壽數金石如侯王。

七 第 卷 二 部 史 前 史 藝 術 工



圖三十六第
玉勾付帽金 種三飾耳純 具鉸金純

前以一統羅新 前以一統羅新及耶伽 代時浪樂漢

藏館物博府督總鮮朝

本圖は朝鮮に於て發見せられたる、細金細工の遺品中最も精巧なるのを撰びて掲げたるものなり。
 上圖は第六十一圖に示せる博山爐と共に發見せし鉸具にして長さ二寸一分三厘幅最大二寸一分餘の丸味を帯びたる表面中央に、母龍三其周圍に子龍六個を配置し、其の表現は極細なる金線と器粟粒大の金粒を以てなせるもの、而して此金色燦然たる中には、元三十六個の碧色鮮やかなる玉嵌ありし、今尙七個の玉の遺存せるに依りて知るを得べく、金玉相映して最も美觀をなし、細緻なる技巧類品中に冠絶す。作出品によりて製作の漢時代なるを知り得るは實に驚くべき事實なり(本圖は特に二倍大に現はせり)
 下圖は左端を除く三品共に南鮮出土の耳飾なり、此の種細金細工は他に類例あれど、こゝに示せるものは就中精巧にして意匠の見るべきものを掲げたり。右端は慶州曹門里の古墳より關野博士の發見せし一雙の飾りの一に係り、其の大銀の表面に細粒を以て龜甲型文を作り、内に寶珠文等を容れたる處、心葉形の垂れ飾りに同じ細粒を付けたるを併せ見るべし。二は慶尚南道尙州古墳の出土、薑様の垂飾り、其の上部の丸玉形飾りを付けたる及び銀の板形なるは珍らしき例なり。三は其の形複雑ならざるも、製作の壯重入念なる遺品にして、重ね算盤玉形の中飾りに緻密なる手法を示せり。總長約二寸四分あり、左端の勾玉と共に大正七年原田文學士の慶州曹門里古墳より發見せしものに係る。左端の勾玉は硬玉製の通有品の頭部に金剛を嵌せ其の端端を折り曲げて切目を附し蛇腹形となして、こゝに心葉形の小飾り十二個を附けたるは從來内地出土の勾玉に類を見ざる所なり。是等何れも伽耶羅統一以前の作品にして、當代半島に於けるこの種の技工風に勝れたるを知るべき好個の資料なり。

朝鮮半島二世紀前漢代美術品

第五十六圖
新羅統一以前
朝鮮總督府博物館藏
青銅鏃斗

此の鏃斗は大正十年九月發掘せられたる慶州金塚出土の銅鏃斗を復したる作品にして、支那よりの精緻品を見るべきものなり。鏃斗は鏃蓋として用ひられたるものにして、蓋部は鏃斗を覆ふ形に記號せらる、圖は其形を樹の末梢を亦せるものとて、球形の蓋部上圓錐形の三層の脚を張出し鏃斗の上部は廣き銅鏃を繞らし、一方に眼形の鏃頭を具し鏃蓋には八角形の鏃影を施し鏃鏃によりて蓋部に接續す、鏃蓋を此の片側に長柄あり、柄の兩端は眼形をなし蓋部に接續せる部分に鏃斗先端の眼主は其吐出せる舌を各各冬鏃斗を穿してたり。鏃蓋の上端、柄の表側面には柄となる毛彫の唐文様を表はして彫形の複雑なる鏃蓋を以て本品の價值を大ならしめたり。此の唐文様は那門白窟に於ける彫刻文に近く文様推古式の裝飾、就中法隆寺金剛觀音基のそれに類似せるものありて、當代工藝の精緻を不遺其たる參考資料たり。

新羅統一以前 第五十六圖 青銅鏃斗



第六十卷
新羅統一時代
新羅總督府博物館藏
綠釉四天王

慶尚北道慶熙郡内里而掛經里慶四天王寺開塔礎より發見したるにして、礎に於て厚さ二寸六分、幅約二寸三あり高さ現存約一尺五寸にして圓様より變するに高さ約三の臂長形のものなりと思はる。周圍は一段落して雲文を飾れる額縁あり、全面に線刻を施したり。像は正身姿ひたる爲至簡ならざるも、其の武裝にして二種に歸し、左手に弓、右に矢を執れるは增長を表はせる如く解せらる、彫法雖も新羅時代の手法を能く唱へたる新羅時代の藝術を感ぜしむるものなり。四天王寺草創は三國遺事に安武王十九年あり、本品もこの時代に屬せらるを見らる。

新羅王眞興王三十二年





青磁象嵌雲鶴文壺

高麗時代

朝鮮總督府博物館藏

本圖は高麗青磁の精華たる雲鶴象嵌の蓋付の壺にして、優雅なる飛鶴の姿勢、雲象嵌も見るべき瑞雲の拂曳ける構圖と、青綠水碧の如き釉薬の幾細さは共に驚くべき技巧を表はせるものにして、ここに蓋に合せ弾きの柄を付け、肩には四個の眞手の耳を配し、底邊に接して雷紋細きの帯線を表はし、上頸の周邊には象嵌の連綿を用ひて低邊との均勢を保つに意を用ひたるが如き、實に雲鶴手中の傑作と稱すべく、袖に粗大なる龜裂を生ぜしは固より責すべきにあらずるも、却つて剛壯の氣韻を加ふるものとも見るを得べし。

總高さ 八寸
 副徑 五寸七分五厘
 壺高 六寸六分
 口徑 二寸七分

工部省美術調査部蔵

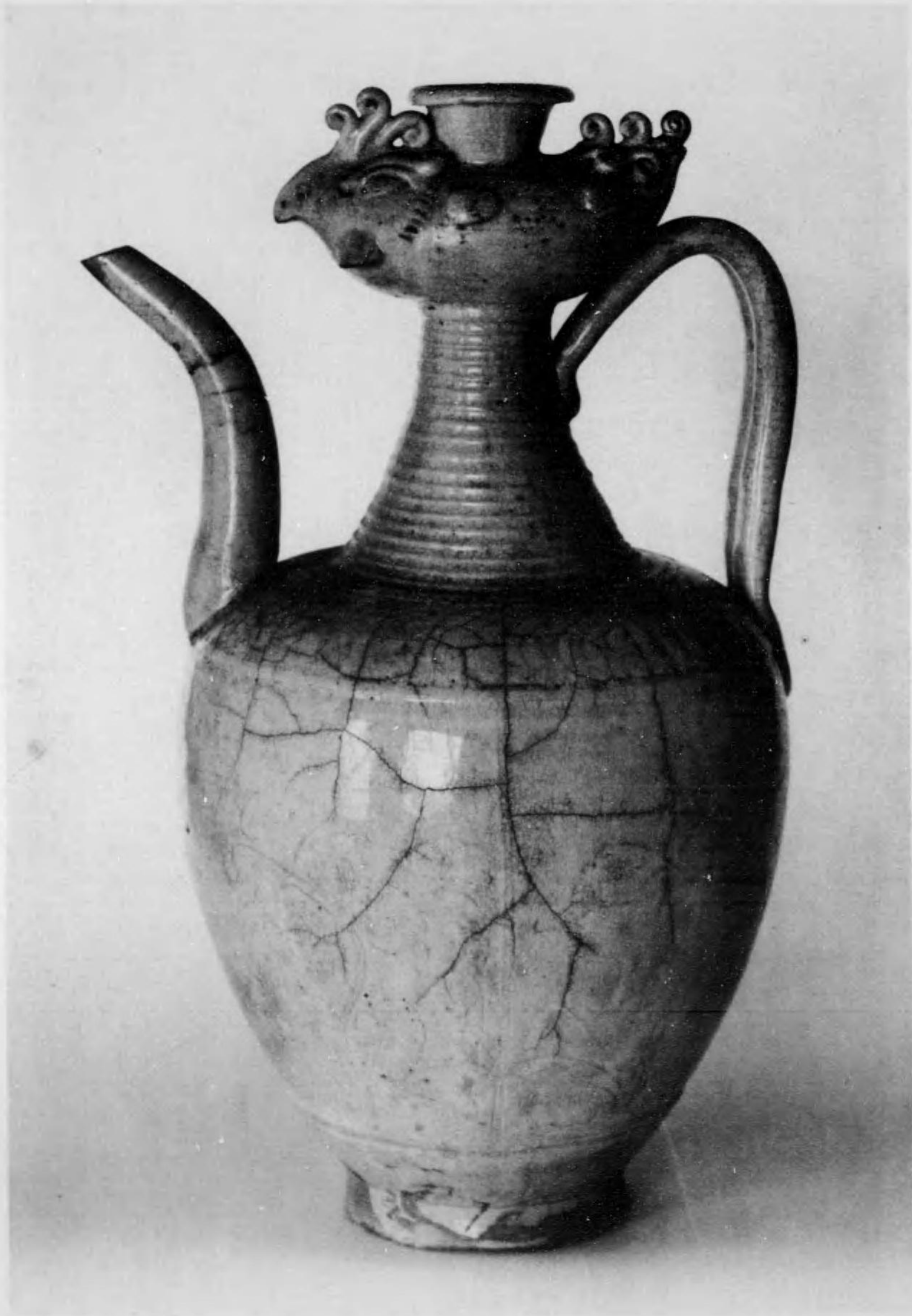


圖 八 十 六 第
瓶 文 葉 草 釉 黑
代 時 麗 高
藏 館 物 博 府 督 總 鮮 朝

本品は繪高麗の一種にして、青味を帯びたる黒釉の上に白釉を以て大膽なる草葉文を描きたるもの。其落付きたる地釉の上に純白色の文様の浮上りて見ゆる處、從來殆んど類例を見ざる表現法たり。草葉文またその大まかなる葉と細く柔き技との調和よく、加之口のしまりたる丸肩にして胴長なる形は前者と相俟つて頗る雅趣あり。蓋し高麗燒中稀に見る佳品なり。

高 九寸一分
口徑 一寸六分五厘
胴徑 五寸四分五厘

工 藝 美 術 學 會 報 告 第 二 卷 第 七 號



第九十六圖
 白磁刻文水注
 高麗時代
 朝鮮總督府博物館藏

本圖は形、特に珍らしき水注を示せるもの、鳳形を頸中にさし挿み其下部には
 機軸仕上げに際し表はせる刀痕の千筋あり。而も錐狀をなして鳳頭との均合ひ
 を保ち、肩部には松花の彫込みを見せ胴部に施せる草花の刻文は、半ば袖中に
 歿しながら精緻なる趣致をのこし、其の注嘴と手とは技巧を弄せずして軽く
 之を附する處、意匠の勁拔と軸葉温雅なるに相俟つて、愛賞すべき逸品の一な
 り。

高さ 一尺六寸五分
 徑 五寸九分

工部省美術院第二部第七號



第十七号
 唐花文花瓶
 高麗時代
 朝鮮總督府博物館藏

本品は埴形の種類にして一般に埴形と稱せらる、其文様作風は三島手又は雲龍
 手等の朝鮮固有の象徴品と全く其手法を異にし、支那磁州窯等の宋風影響を受
 けて發達せる者にして、鉄質の黒繪具を用ひ、其中部に綿密にして筆力ある賣
 相華を配し、肩には同一筆法による金花を描き、下部には黒彩を塗りて帯こな
 し、以て落付きを出せる者にして、特に花瓣を周れる莖葉の曲線が均勢を得た
 るは觀者をして次第に執着を生ぜしむ。

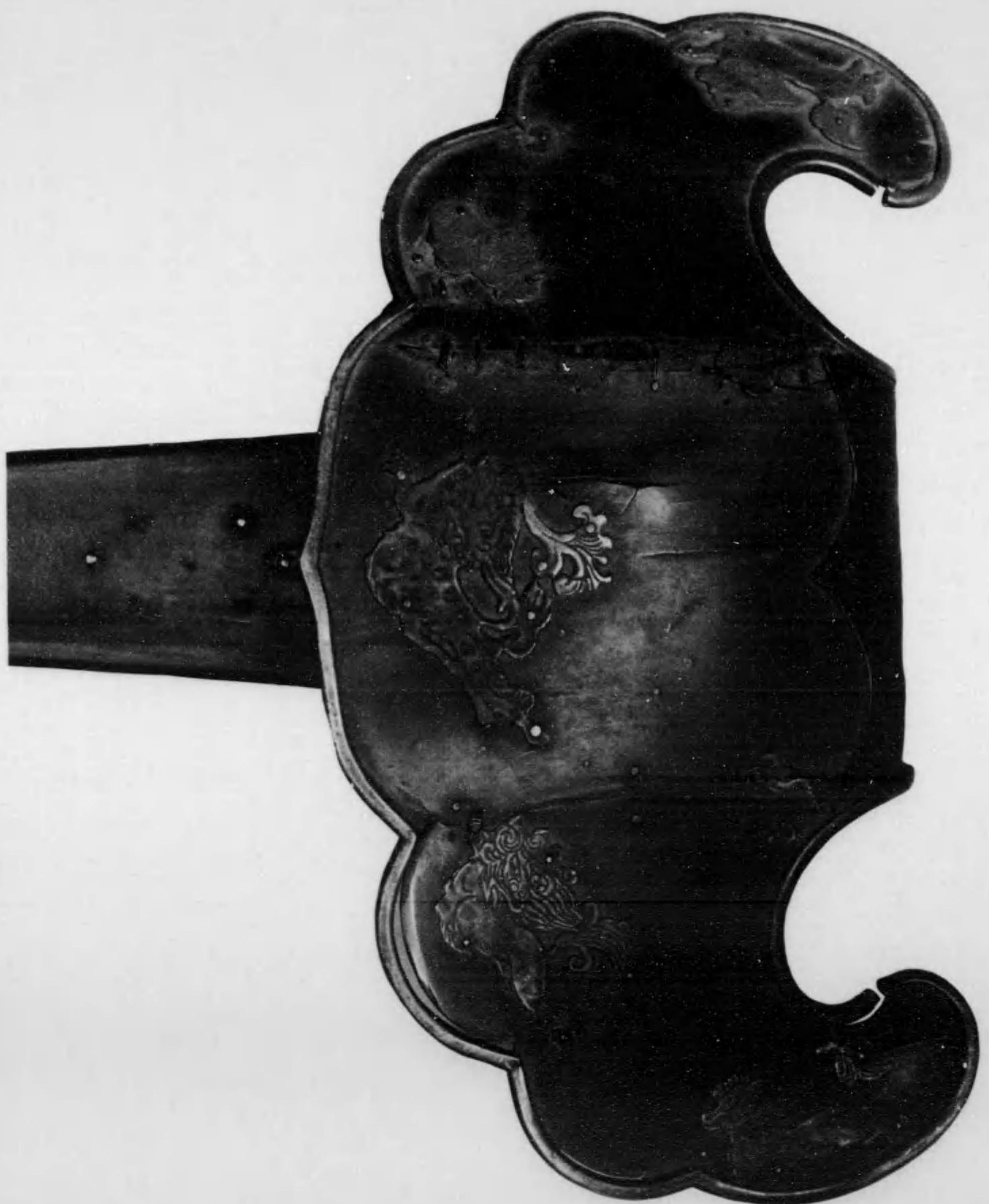
高さ 九寸
 口徑 二寸二分五厘
 胴徑 六寸一分五厘

工部美術院第二部第七号

圖一十七 獅 五 寶 國
 平 安 大 寺 初 明 鏡
 意 如 子 獅 五

此の如法頭陀大師嘗て維摩曾講して托れる所に
 して觀來此の護師を勤むる者之用ふるを規得ず
 知意は東歸法隆寺には觀る古物を傳ふ三類も本
 品の如き亦實に稀麗にして、其の柱體は犀角を以て
 造り之五瓣の走獅を彫鑿し其柄の表裏
 には三彩粉彩を塗布す、此の獅子は頭敎を表し三頭
 其の首には佛雲を獅子を廻ひしも、今は殘缺して
 所を附接して通接せり、獅子を裝飾せる獅の足は、
 裏に獅の形したる鹿を依せて撰り留りにせり、頭
 の別邊は鬘髮を施し、頭之柄の境には青銅製の花飾を
 物を依て柄の中部の首には銅を鑿ひ、柄端には蓋
 の柄に馬鹿草を毛彫したる鍍金を物を附したり、全
 部の首は圓柱にして、其の彫法兩素、柄端の首其は
 其の手法異はず、本圖は其頭部の表面を擴大にして
 第七十回圖に全體及部分圖を掲ぐ、本品を托して
 維摩に歸りて傳ふる聖賢上人は醍醐寺の圓山に
 て常山法勝の祖として其名高く延喜九年(四四九
 ○九年)入寂理頭大師と謚せらる、以て奈良朝以後
 平安朝の作風を鼻に足らん、鑿刻造の巧なるも
 の柄本寺へ傳へたれば醍醐前の裝飾を見るを得べ
 し今之を呼す。

七八九年二月 東京 國立博物館 工



圖二十七 第五獅子如意
 寶具宗 車 平 安 大 寺 明 藏

本圖左端は第七「圓」の異相あり、中下は螺小鳥座の一部分を廣大に、右方は表頭全體にして、右端は柄端を廣大せしなり。

總長三尺三寸九分、頸部径九分五厘、柄徑四寸五分、柄幅中部にて一寸二分、下端一寸四分。

工部省鑄造所藏 第三三三號 第八四號



國寶 仲津媛皇太后木像

奈良 藥師寺 藏
平安 初期



八幡大神を奉祀する社は全国に甚布し、其数甚だ多し。雖も、中世武家奉養の爲めに建立せしもの多く、其の最古のものは豊前宇佐より貞觀年間（西曆八五九—八七〇）山城藤原山に奉遷せし石清水神社、及東大寺鎮守手向山神社、大安寺及本寺の鎮守休息岡八幡宮等に過ぎず、其中祭神の御像を傳ふるもの石清水神社、手向山神社あり。雖も中世内丁の災ありて今國寶として傳ふるもの皆御坐當時の御像にあらざるに、獨り藥師寺の御像は全く僧行教、神教を奉じて山城に神幸ありし際、休息し賜ひし處に奉祀せるものに係り、御坐は其當時を距ること遠からず、隨て其の御服裝の如きも當時の故實を存し、本寺には此御像の外、僧形八幡及神功皇后御像と共に三坐ありて、竝中此御像は應神天皇の皇后として、御容貌より御裝束の如きも、御母后神功皇后の御像に比すれば若く華麗にましまして、當年作者の苦心の迹を察するに足れり、今此の御像は其服裝の我邦有職上の大參考となるのみならず、其色彩及文様等に至る迄、實に御坐當年以前の風を觀るべきものなるを以て、特に其色彩を原色を以て測はし更に次圖に於て之を略説せん。

工藤實隆藏 二重天冠 八幡宮



圖 四 十 七 第
像 木 御 后 皇 媛 津 仲 實 國

期 初 安 平
藏 寺 師 藥 藤 良 奈

抑も御体は全部櫛木を以て彫刻し、其御髪は別木を以て足し、御裳の裾も亦別木を以て足し、御巾の末も亦別木を以て盛り上げたり、御髪は下地を設けず直に鬘鬘を以て盛り、御髪上げしたる鬘の前の左右には、細き銅線の一椀三葉なるものを僅に存し、其左右の鬘面には髪のみを存す、是れ花鬘ある鬘子の残痕なるべく、大寶令の所謂鬘鬘といへる髪風なるべし、花鬘の形は今之を詳にする能はされども、「衣色の落葉」所載の正倉院御物の鬘鬘三云へる如き形なりしならん、然して此御像には御鬘は根も無し、御面は純白の胡粉にて彩り、御眼は細く、御鼻は朱にて彩り、胸の御肌には朱にて彩り、肩より胸背にかけて緑青を以て彩りたるは、所謂背子にして世間にては此御像等によりて、唐衣は一幅の絹に頭を穿るべき襟を開きて頭より被りしこと、騎武官及舞樂の補裾の如くならん、河人も考へし所なりしが仔細に拜見すれば、緑青の上にて朱にて襟の形を二重に置き、右を上左を下正に置きたるものにして、其襟の先きは如何にして留めけんか、御美豆羅の末にかくれて不明なれども、或は正倉院御物の衣服の如く蜻蛉頭にて留めしか、或は雅亮衣束抄の如く、唐衣の紐三云ふものにて結びしか、今考ふべからず、此の背子の裏は朱にて彩り、又御表衣は濃き丹の具にて塗り紫にて重層の花文を置きたり、御髪は胡粉にて塗り、朱、白、群青、緑等を以て草花三胡蝶を細密に置き、又御胸の單背子の間より長き紐を膝迄引出して垂れ、朱の具にて塗り、朱にて細密なる草花文を置き、此紐は如何なるものなるや不明なれども、裳紐にはあちて表衣結紐を背子の間より引出したるものなるや不明なれども、裳紐は彼の正倉院御物の間縫判紐の細帯、若くは宇佐神宮の神寶なる、神功皇后御物の御裳紐と傳ふる細帯の遺蹟ありて類る古様なり、又背子の上には、更に御頭の後より胸に亘り白緑地に塗りて胡粉にて飛雲形を細密に置きたる御巾を懸け、其末は左右の脇より後へ引きて裳の裾の上に垂れたり、之を他の諸社傳ふる所の女神像に比して一段古様あり、且つ其の形法の御像以外に出色あるのみならず、服飾、色彩、文様等奈良例より平安初期の貴族の服装を窺ふを得べく、海内無比の古神像として殊に尊重すべきを以て特に之を世に示す所以なり。高さ一尺二寸四分。

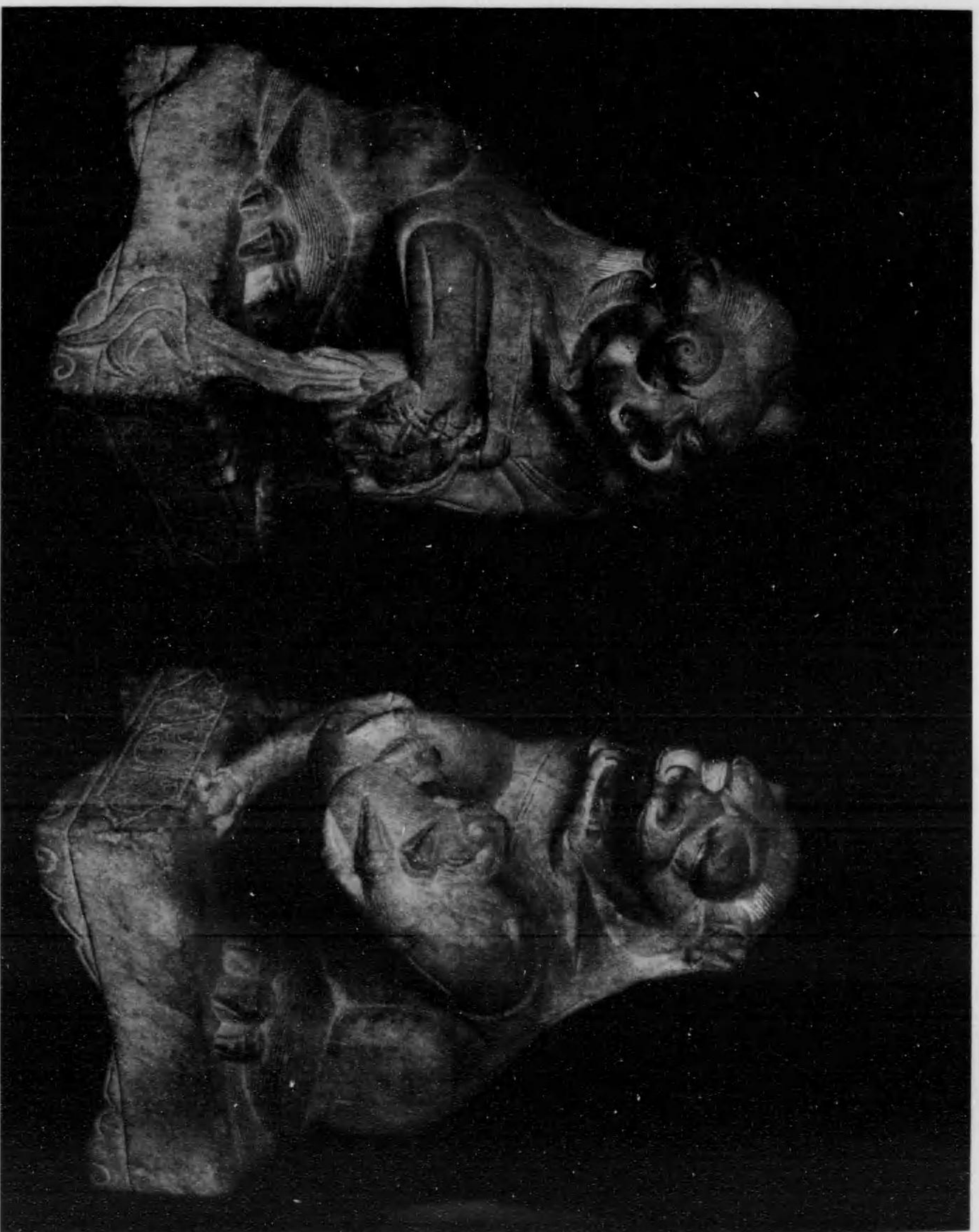
工 藝 院 藏 品 二 第 八 號

國 五 十 七 第
 石 影 獅 子
 山 縣 政 府 神 祇 課 出 版
 代 時 代 社

山縣神社は、健康及文藝の事にて有名な香北郡馬場山に在り、本品は攝天の石獅子、元來神社には其の神像の鑿祭の儀を執る爲めに大造の獅子狛犬を造じて、宮中崇清兩殿の御祭の時に用ひ、夫より轉じて小社の御祭を設けるものは、原の木匠に之を造じ、或は石獅子を造りて社前に置くに在り、殊外に石獅子を造くは遠く申度な形勢の儀に入らざりて、神社の御祭の獅子を造付たるものにして、其門口に置くは東大寺南大門の石獅子、仁和寺南大門の本獅子、清水寺西門の本獅子等其の例なり。然して狛犬のものは左を獅子とし右を狛犬と名付、右方を狛犬として右頭を右口を造するを法とす、本品は灰白色の大理石を成り、其の石質尙も正倉院御物十三文彫刻石に類して、夫れよりも稍後のものに屬せり、恐らくは獅子狛犬を造せしもの本社に奉納せしものならん、左方は鮮より造れしもの本社に奉納せしものならん、右方は香蓮を拜託して、英藏殿寺に傳へしものと共に東西兩地一對の彫曲と稱すべし。

寶曆元年凡承造は後身を待つ。
 慶長十年 皇居陛下鞍馬寺行啓の際御覽を賜りしものたり。
 高さ五尺三寸二分 右四一尺三寸五分。

攝天宮御物十三文彫刻石





圖七十七第
籠食繪蒔踊
明初川德
藏社神宮今府都京

第七十六圖全照。

繪八世宗三郎成實齋後藤工



種三鐔

作觀安屋土
藏氏郎三成瀬河 村原大

尾利米に方り、後藤朝葉出、影念に一生面を削
 拓し、爾來其手法を傳ふこと三百年、所謂家影
 の風を傳へて其の面白き處する能はざりしが、遂
 に其反動は俄然として起り、之を貴族の賞玩に供
 する作風と分つ爲に、彫影を稱し、富商豪族の間に
 珍重せられて、世を驚異せしむること、殆ど新野派に
 對する英二藤成は淺川御堂一派の如くにして、其
 中、奈良派に屬す藤葉、和譜、安現を以て奈良
 三作と稱す。
 本圖に掲ぐる鐔の作者は安現、通稱五八老後
 は東雨と號す、羽根庄内に生れ正阿彌珍久の門に
 入り、亮縁の頭官に出で、奈良長政に學び、後
 樂州守山城主松崎貞良に仕へ、延享五年（西曆一
 七四四年）七十歳に没す。
 右圖は龍銀打走し丹して、彼が得意の面壁の圖
 を刻す、耳輪及松葉等に金及漆胡の色繪あり。
 中圖は鑿嵌にして五段手小肉、象春の體には唐草
 を布目裁嵌し、裏面には大學頭林信亮の七言律
 を刻せり、左圖は鉄鐔、耳段手小肉處下げにして
 波に千鳥の文あり、共に東雨鐔作中の逸品と稱す
 べきもの、又三頭片鐔代金工の妙藝を見るべき
 資料として何れも貴大に之を示したり。

銅八景并二頭片鐔代金工



第九十七号
身 刀 腰

刻内喜 作繼康
藏氏郎三虎瀬河 府阪大

我邦上古の刀身には金銀を以て文字、若くは文様を象嵌せしものありて、石
上神宮の七枝刀、及肥前古墳發見なる、刀脊の銘文の如きあり、又正倉院に
は星雲を象嵌せしあり其他法隆寺、四天王寺等にも亦類品あり、雖も、未だ
象嵌によらずして、物象を鑿刻せしものはあらず、後世刀身に鑿刻するに
至りしは何の頃なるか、其起源猶明ならざれども、豐後行平などの作は其
古きもの云ふべき歟、爾來刀工自ら之を刻し或は特に之を専業せせるも
の出づるに至れり。爰に掲ぐる刀身は、刀室の銘に見る如く有名な越前
下阪の刀匠、二代康繼の作にして、及文、彎曲、龍小鉾付、切深く、切物
は同國の鐔工喜内相の作にして、双喙の妙技を示現せるもの云ふべく
類品稀なる傑作たり、佩表は上部に藥師如來、中に毘沙門天、下に文珠を
刻し、佩裏には桶の内に眞の俱利伽藍龍を、上には寶珠三楊柳觀音の種字
を刻す、地肌細かなる板目に美しく、切物は喜内の最も心血を傾注し
て刻したるものにして、普通の同作に比すれば最も傑出せるもの云ふべ
し。

總長さ一尺二寸六分、實際幅一寸三分、刀身長さ四寸六分。

續八郎三虎瀬河 府阪大

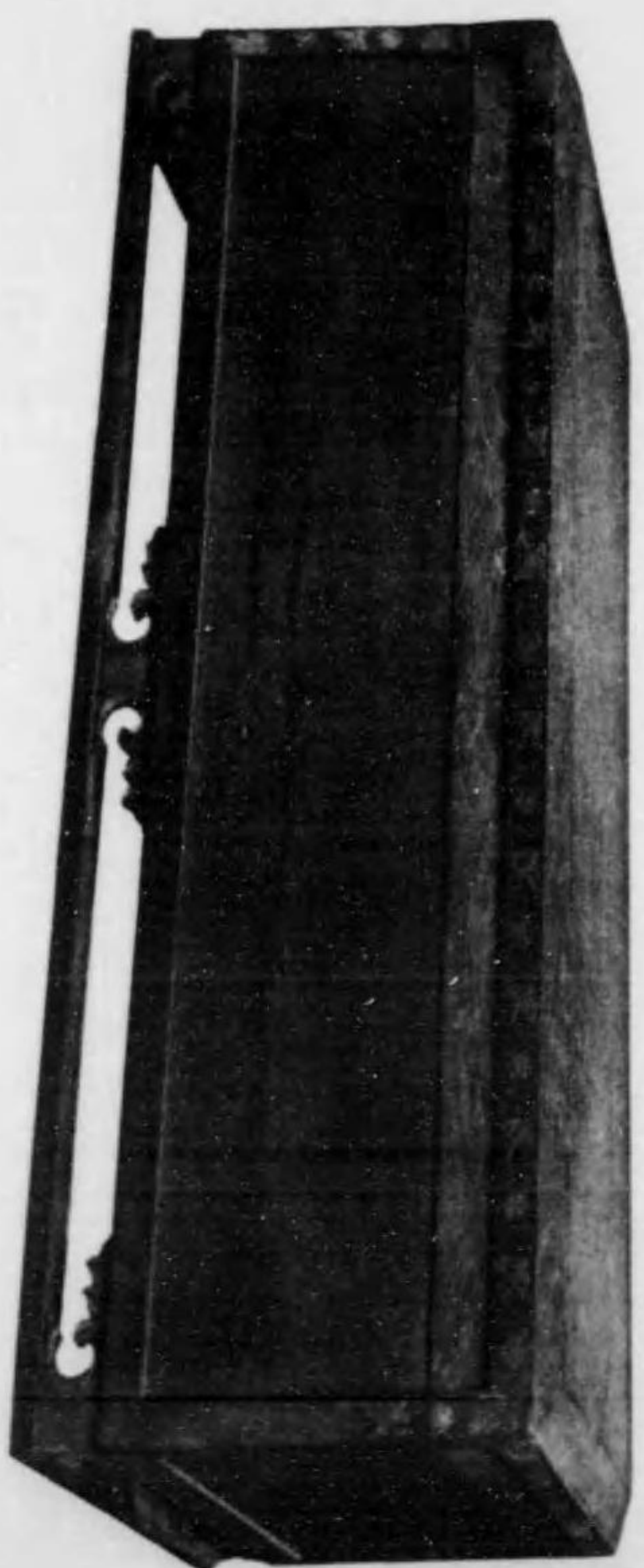
黒柿蘇枋山銀水山繪宮

第八十一圖
天 平 院 御 代
正 會 院 御 藏

正倉院御藏大不詳圖、計十百種の文様多くは、種々の花文を描き、本品の如く山岳樹木を圖せるは頗る稀にして、當時の墨風を窺ふ絶好の寶料と云ふべく、更に壬子女の屏風の樹石、東大寺藏出雲等の山水比して一段精緻なるものなり。
 大體は黒柿にて作り、彫削を以て之を染め、紫檀に據したるもの。其内及蓋上には金銀泥を以て山水を描き、ここに蓋上四方より山岳を描きたれば、恰も海五山圖の文様を思ふの感あり。本年朝の山廻りに因り、更ニ珠光より轉寫して描數す。衣襖は甲斐松葉を金泥にて描き、幹及飛禽を銀泥に描き、もの、圖中略々其の色彩を察するに足らむ。

高 四寸三分
幅 九寸九分
長 一尺二寸八分

工 師 無 名 傳 承 五 代 繪 師





青銅三具足

第 八 十 二 圖
 末 利 足
 藏 寺 迎 來 縣 賀 滋

我國佛前の莊嚴中には、古來より香華燭等を供するあり、燭は多く油燈を用ひしが鎌倉時代に至り、禪宗の輸入と共に佛前の具足も一變し、香華燭の三具は必ず一定の様式のものを用ひ之を三具足と稱し、或は之に左右の大華瓶を加へて五具足と稱するものあり、多くは青磁若くは青銅を以て作り、古風の油盞を用ひしものは、釘等を挿して燭燭に轉用するに至れり、而して當時の三具足、五具足等は佛前のみならず、武家書院の押板にも用ひしものにして、鎌倉以後室町時代には盛に在家に於ても之を用ひし故に、其遺品も亦尠からざるべきに拘らず、實際は今日に傳存せるもの殆んど見るを得ず、こゝに掲ぐるは其傳來の明なるもの一として、奈良唐招提寺所藏のものと共に變型三云ふべきものなり。

全體の製作は蠟型にて作り、古風なる韻を以て裝飾さし、香爐の脚には法隆寺舊藏の臂に見る所の風來神に類せる堅牢地神を用ひ、燭臺には獅子を用ひたるが、其技能頗る熾然して三具足の類なるべきものにして、外箱には左の文字あり、我國に於ける蠟型鑄物の精巧なるもの、一として其年代の略々推すべきものに屬す。

此瓶之三具足江州志賀郡
 來迎寺江爲西乘坊後世菩提
 奉寄進者也 天正十五丁亥
 十一月吉辰 深蓮花押

燭 高さ 一尺四寸
 花瓶高さ 一尺二分
 香爐高さ 五寸六分

工 藝 學 叢 書 第 二 卷 第 八 十 二 圖



第三十八圖
青銅三足具
足利末利寺藏
來實畫

第八十二圖は各々略三分の二に撮影し本圖は實大にしたり。

昭和九年二月六日東京美術工

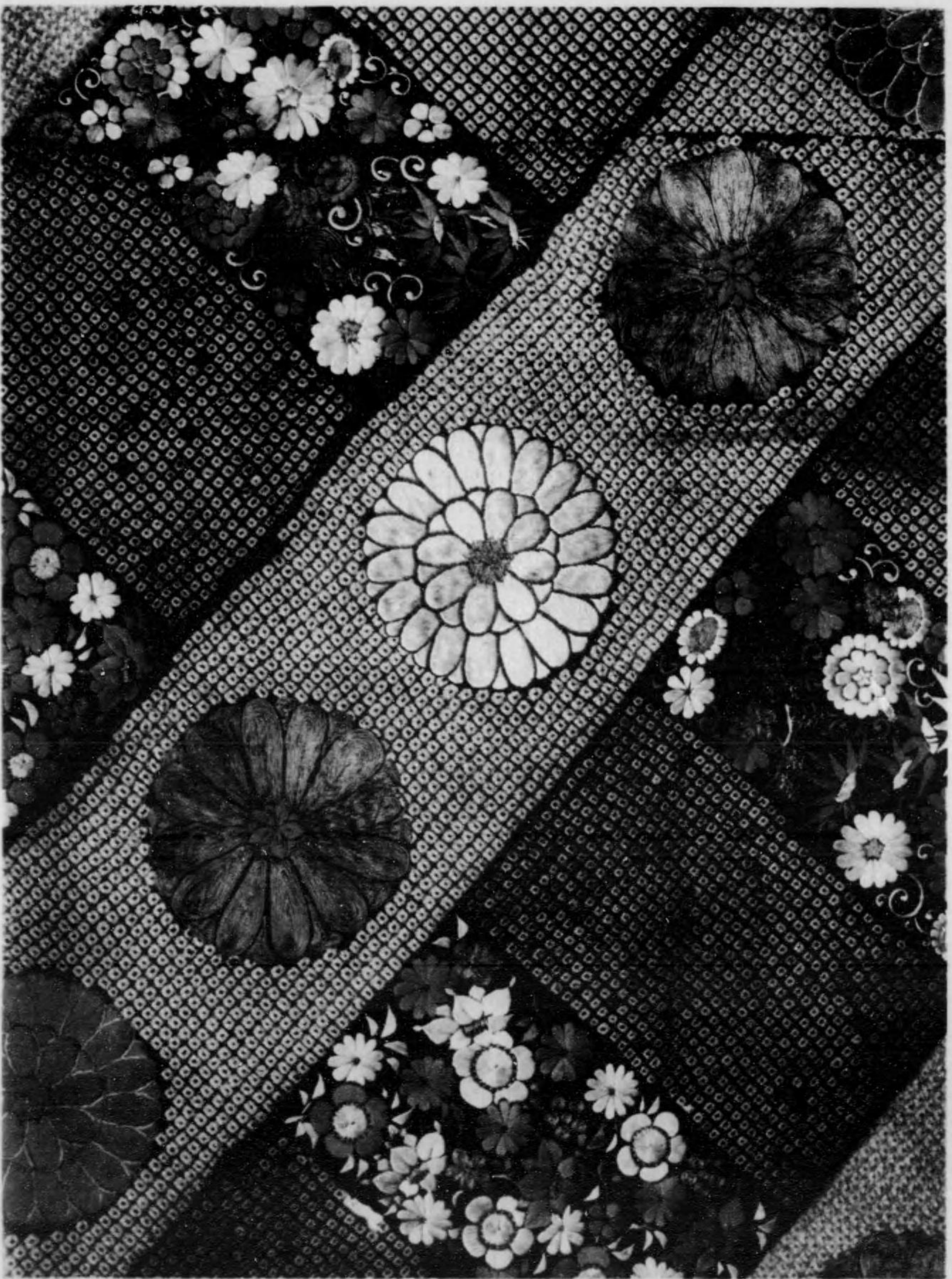
第四十八節 鹿混刺子繡小袖

京都府伊達川中川明
伊達運助氏鑑

本品は元祿頃流行したる鹿子に刺繡を施したる小袖の一部を現はしたるものなり。

大體文線子地に紅さ藍を以て斜に太字線有鹿子につ、其間に清菊の文様を金線、赤白紫の刺繡を以て現はし、又反對の方向に斜に鹿鹿子の線を作り、混さ温の間に松竹鶴鶴或は寶蓋し菊梅、櫻桃等を組合はしたるが、其種類頗る奇抜にして豪華の感ある中品類を保てり、斯かる意匠は普通の小袖には多く觀例を尠く、技巧亦精細なるに能く全體の調和を得たり、唯其當時最も精練せる工の努力に成るもの云ふべし。

工部省美術工部局蔵





第十八号
木造扁額
平安末
京都府東福寺藏

本圖に掲ぐるものは普通の物額の式と異りて、經案の様式に類し、雲形の上に蓮座を刻し、其上に棒を施し上部には蓮座の上に三面寶珠を安じ、其の左右には一種の輕快なる流雲を刻したり、全部は黒漆にして流雲の部には所々綠色を止め、文字板の部は地堂胡粉を僅かに存し、文字は金箔を貼せし跡あり、恐らくに群青地に金字をなせしものなるべし。

本品は京都三聖寺の扁額にして、白河天皇西曆一〇七二—一〇八六年の宸翰と稱せらる、該寺は同天皇の建立し給へる所にして、元天台宗に屬せしが後、四條天皇の御宇西曆一二三三—一二四二年一國師の建立せし萬壽寺と併せらる、以て寺傳從ふべきに似たり。本圖録第二卷第五十五圖に掲げし聖林寺藏鳥羽天皇宸翰額と共に得難き資料たるべし。

長さ二尺八寸二分、幅一尺四寸二分。

工部省美術調査部第二卷第五十五圖

國 實 胡 德 樂 用 瓶 子
 那 八 十 六 四
 平 安 山 向 手 明
 社 神 山 向 手 明

本品は胡德樂用の瓶子にして、唐時代の文様を示せり。元來、胡德樂は唐樂なり、其後、高麗樂となせしもの、一經、三十四曲の二にして、名、胡德樂と稱す、其樂は、假面を付たる舞人四人出で舞ひ、次に東帶して舞、次に瓶子取りこの瓶子を舞へ出で、東帶の舞臺を舞人に翻め、瓶子取りの舞を仕て舞人舞す、其中に瓶子取り秘かに自ら酒を飲み清酒の醜をなすものなり。本品は當樂所用中最も昌氣なるものにして、下地は木挽にて作り、黒漆を施して之に白粉を以て樹竹を描きしもの、この文様中樞に見る所の逸品と云ふべく、源氏物語ありて古色持すべきものあり、堀へ所の厨料は後世用は其餘を存するもの云ふべく、文様赤銅大尊寺の御帳の裏に比して更に一段古樸なるものなり。手向山神社にはこの御料用なる瓶子取りの面に左の裏ありて本品の年代を考へに足らん。
 『東大寺奉願九十日講正年三月十一日上座展禮開覺仁』
 高さ二尺三寸五分、口径三寸五分、胴徑二尺六寸七分、底部直徑四寸七分。

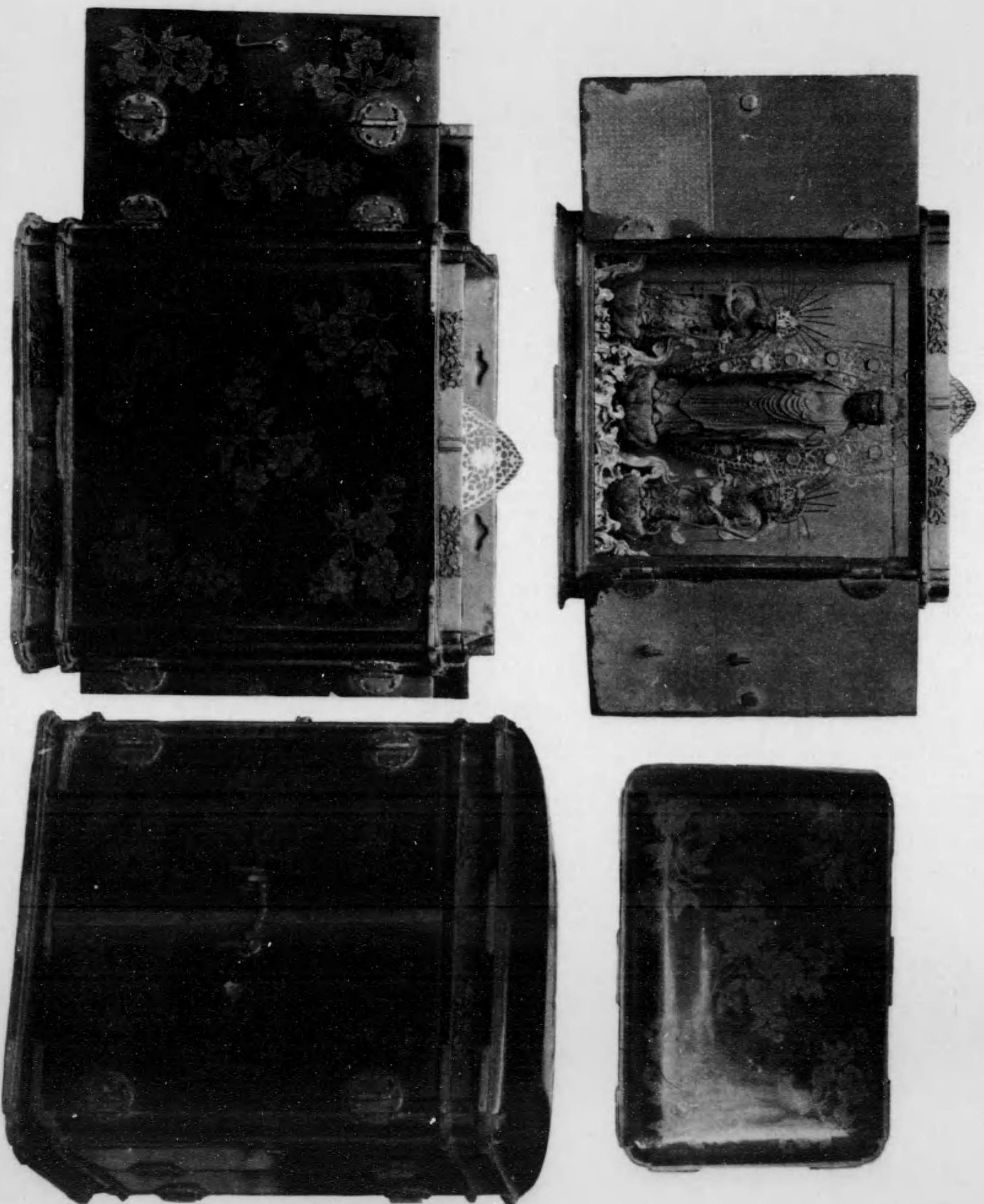
東京大学文学部蔵



第八十七号 時 繪 厨 子
 京都府 報 北 朝 代
 南 恩 寺 時 代

本品は高さ四寸七分、幅四寸四分、奥行三寸九分、木瓜形の小厨子にして、腰尻三尊を安置す。素地は布紋で、墨色なし、金唐繪を以て寶相華を描くものにして、扉の裏面等は、白群地に切金を以て格條を描き、亦欄間及織込の部の金物にも同じ寶相華の透通金物を用ひ、八寶、蓮華及打懸金物等は無地鍍金用ひたるが、本尊の製作と共に精巧を極む。本品は昔如の春日厨子の一轉化にして所謂、須臾厨子に變じたるものな、幸傳不明なるものを納めたる處にて「江戸徳田物標標新録」あり、該寺は納島家の菩提所なりと傳ふは、同家祖先の寄進に係るものならむ歟。

工 師 無 名 三 部 二 年 九 月 九 日

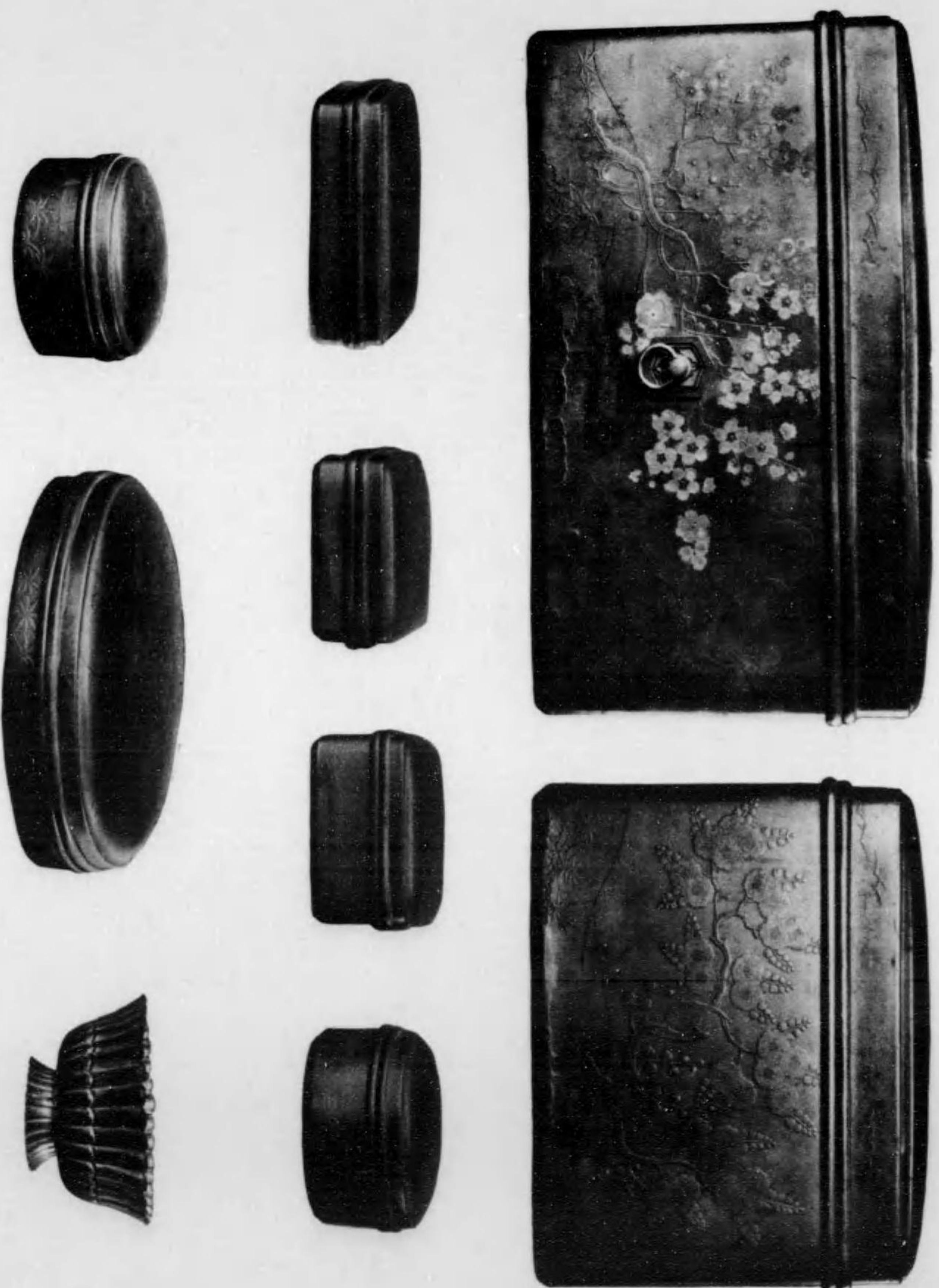


四 其 宮手繪詩禽水樹梅繪手葦 寶 國

圖八十八 華
代社時會島 三 畫四部

上圖は第五十八圖所載の手葦の其側面にて縁飾の底は鍍金鑲甲の透彫なり、下圖右端は鍍金彫花形の水入にして、次は白砂入、緋緞入等の各種の小笥六品にして、後世はこの六種を倍數にして十六品組み、之十二の手葦と稱するに至れり。(第五十八圖參照)
總直徑三寸八分。鍍金直徑四寸二分、高さ一寸一分。
小笥六品 直徑二寸五分、高さ一寸二分。
同(七)形 直徑二寸二分、高さ一寸二分。
同(長形)形 長さ二寸六分、直徑一寸二分。
水入 直徑三寸一分、高さ一寸六分。

繪五部 第一 第二 第三 第四 第五 第六



第九十八圖
實 業 部 三 島 會 社 代 理
五 其 實 業 部 三 島 會 社 代 理
手 繪 水 樹 梅 禽 詩 宮 手 繪

右上面は絹織の背文を示せるものにして、従来の鳥居様
在法によりて無繻の紐を施して文様の全體を見る能は
るに至りしは遺憾なり。
上左三圖は小笥の甲表、裏返し及身の内面を示し、下三
圖は縁臺の甲面及裏面及底部の文様を示せり。

絹織の鳥居様

